

**平成29年度
自己点検・評価「年次報告書」**

**長崎女子短期大学
自己点検評価室**

【目次】

| 部 署 名 | 職 名 | 氏 名 | 頁 |
|--------------|-------|--------|----|
| 学長 | 学長 | 玉島 健二 | 1 |
| 栄養士コース | コース長 | 草野 洋介 | 3 |
| ビジネス・医療秘書コース | コース長 | 濱口 なぎさ | 5 |
| 介護福祉士コース | コース長 | 長尾 久美子 | 7 |
| 幼児教育学科 | 学科長 | 白石 景一 | 10 |
| 学生部 | 部長 | 光武 きよみ | 12 |
| 図書館 | 館長 | 森 弘行 | 14 |
| 自己点検評価室 | 室長 | 武藤 玲路 | 16 |
| 入試広報室 | 室長 | 前田 功 | 18 |
| キャリア支援センター | センター長 | 原田 実輝 | 20 |
| FD・SD委員会 | 委員長 | 武藤 玲路 | 22 |
| IR推進室 | 室長 | 森 弘行 | 24 |
| 募集・広報委員会 | 委員長 | 前田 功 | 26 |
| 紀要・図書委員会 | 委員長 | 田川 千秋 | 28 |
| 教務委員会 | 委員長 | 山口 ゆかり | 30 |
| 学生委員会 | 委員長 | 古賀 克彦 | 33 |
| 学生相談室 | 室長 | 福井 謙一郎 | 35 |
| 食品加工研究センター | センター長 | 橋口 亮 | 37 |
| 地域連携推進センター | センター長 | 長尾 久美子 | 39 |
| 地域子育て支援センター | センター長 | 本村 弥寿子 | 41 |
| 寮務委員会 | 委員長 | 植木 明子 | 43 |
| 事務局 | 局長 | 三藤 英文 | 45 |

| 職 名 | 氏 名 | 頁 |
|-----|--------|----|
| 学長 | 玉島 健二 | 47 |
| 教授 | 橋口 亮 | 48 |
| | 森 弘行 | 49 |
| | 長尾 久美子 | 50 |
| | 白石 景一 | 51 |
| | 草野 洋介 | 52 |
| | 中澤 伸元 | 53 |
| | 松尾 公則 | 54 |
| | 武藤 玲路 | 55 |
| 准教授 | 島田 幸一郎 | 56 |
| | 濱口 なぎさ | 57 |
| | 山口 ゆかり | 58 |
| | 植木 明子 | 59 |
| 講師 | 古賀 克彦 | 60 |
| | 中村 浩美 | 61 |
| | 田川 千秋 | 62 |
| | 本村 弥寿子 | 63 |
| | 荒木 正平 | 64 |
| | 福井 謙一郎 | 65 |
| | 光武 きよみ | 66 |

| 職 名 | 氏 名 | 頁 |
|-------------|--------|----|
| 講師 | 江頭 万里子 | 67 |
| | 樋口 誠 | 68 |
| 助教 | 昆 正子 | 69 |
| | 山本 尚史 | 70 |
| | 蛭原 正貴 | 71 |
| 実習助手 | 太田 智子 | 72 |
| | 桑原 真美 | 73 |
| | 桑原 倫子 | 74 |
| 事務局長 | 三藤 英文 | 75 |
| 入試広報室長 | 前田 功 | 76 |
| キャリア支援センター長 | 原田 実輝 | 77 |
| 事務(会計) | 宮崎 伸一郎 | 78 |
| 〃(会計) | 一瀬 章子 | 79 |
| 〃(教務) | 林田 翔太郎 | 80 |
| 〃(学生) | 栗原 縁 | 81 |
| 〃(入試広報) | 藤田 紫織 | 82 |
| 司書 | 伊藤 理恵子 | 83 |
| 寮(寮監長) | 海保 佐知子 | 84 |
| 〃(副寮監) | 海保 都恵子 | 85 |
| 〃(副寮監) | 大場 恵美 | 86 |

**平成29年度
「部署別報告書」**

平成29年度 「学長・運営委員会」 年次報告書

区分： 学科コース・委員会等・事務局等・教職員個人・その他（ ）

氏名：玉島 健二（学長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 運営委員会及び入試委員会における協議、学科・コースの取組を通じた本学の活性化
2. きめ細やかな学生支援体制、学生相談体制等による「学生満足度」の向上
3. 積極的な募集活動による定員充足率の向上

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 学科長、コース長に本学活性化に向けた取組を推進するように促す。
私立大学等改革総合支援事業への応募を通じて、施設設備の充実に努める。
2. 課題を抱える学生、悩みを抱える学生等に対して、各チューター、学科・コース長、学生部長、寮務委員会等の教職員が分担・協力しながら、聞き取り等を行い、退学・休学等の防止、学生満足度の向上などに努める。
3. 入試広報室及び各教職員が、当事者意識を持ちながら、業務に当たることを基本として対応する。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・A・B・C・D 」
・学科コースの特色化については、ビジネス・医療秘書コースの「登録販売士」資格取得に向けた提案、1年次のプレゼминаール案が出され、30年度から取り組むことになった。
・私立大学等改革総合支援事業については、タイプ1及びタイプ5が採択され、5つの教室が整備できることとなった。
2. 自己評価「 S・A・B・C・D 」
卒業生調査のアンケート結果によれば、学生満足度はビジネス・医療秘書コースを除き、全体的にアップしている。その一方で、施設設備の充実、学生寮への不満などの声が挙がっており、次年度の課題としたい。
3. 自己評価「 S・A・B・C・D 」
学生募集については、3月9日現在で、定員充足率は81%となっており、前年度を2ポイント下回っている状況である。その要因は、生活創造学科の2つのコースにおける定員割れである。3月24日（土）から行われる「春のキャンパス見学会」を皮切りに次年度の学生募集活動が始まるが、全力で取り組みたい。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 栄養士コース及びビジネス・医療秘書コースの特色化が最大の課題である。マスコミに登場する回数を増やすなど、コース長らとともに対策を検討する。
2. 施設設備の改修、教授法の改善、学生寮運営の在り方の検討など、学生からのアンケート結果をもとに、対策を講じていきたい。
3. 各種奨学金・減免制度の見直しなど、高校生を引き付ける対策を検討する。

平成29年度 学長・運営委員会 年次報告

Plan 計画

- ①本学の活性化
→ 運営委員会等での協議、学科・コースごとの取組を通じて
- ②学生満足度の向上
→ きめ細かな学生支援体制、相談体制
- ③定員充足率の向上
→ 積極的な募集活動

Do 実行

- ①学科長・コース長が先頭になった取組の推進
私立大学等改革総合支援事業への応募による施設設備の充実
- ②チューター、各学科・コース長、学生部長等が分担しながら、聞き取りや対応を検討・助言
- ③入試広報室、各教職員が協力して、オープンキャンパス、ガイダンス等に当たる

Act 改善

- ①栄養士コース及びビジネス・医療秘書コースの特色化について、引き続き各コース長を中心として検討・協議していく。
- ②施設設備の充実、教授法の改善、学生寮運営の在り方など、学生からのアンケートを踏まえ、対策を講じる。
- ③各種奨学金・減免制度の大幅な見直しを検討する。

Check 検証

- ①ビジネス・医療秘書コースにおける「登録販売士」の資格取得に向けた提案、1年次のプレゼミナール案が出された。
私立大学等改革総合支援事業については、タイプ1及び5が採択され、5つの教室整備に着手できた。
- ②学生満足度は、ビジネス・医療秘書コース以外は上昇している。
- ③定員充足率は、3月9日現在で81%に止まっている。

平成29年度 「栄養士コース」年次報告書

区分： ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：草野 洋介（コース長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 実力ある栄養士の養成—擬試験を柱に栄養士実力認定試験対策により力を入れる。1年時から認定試験を意識させる。コースあげての対策を行いA判定の増加を目指したい。
2. 長崎食育学の活用—崎食育学に対する認識および長崎の伝統食に対しての意識のさらなる向上を目指すとともに本学の資源を生かした公開講座を昨年度に引き続き開催し学外の長崎食育学に対する認識を深める。
3. 学生、教員、助手が一体となった協働—これまで以上に学生、教員、助手が一体となり協働するコースの雰囲気構築、情報を共有し学生支援を行う。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 栄養士実力認定試験に対しての意識づけ強化を行う。調理系科目のレベルの維持を図る。
2. 学生に対し「長崎食育学」の講義のみならず日常からの長崎伝統料理に対しての認識向上を行う。長崎食育学を生かした公開講座により本学の認識向上を図る。
3. 協働を徹底するため教員間の「ハウレンソウ」徹底により学生に対する情報の共有を行う。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・B・C・D」
栄養士実力認定試験結果は前年並みであった。大量調理技術に関しては1項調に深化している。
2. 自己評価「S・A・B・C・D」
長崎食育学に対する認識は本学進学の一動機の一つになっている。公開講座「長崎県の健康寿命」「島原の郷土料理」、「カステラのルーツ、パオデローを親子で作ろう」を開催し栄養士コースへの認識を深めた。
3. 自己評価「S・A・B・C・D」
学生に対する情報の共有が深まった。28年度入学生において再履修科目を出すことなく全員が進級できた。キャリア支援において例年より就職決定が速かったが一般就職が多い傾向がみられた。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. これまで通り模擬試験を柱に栄養士実力認定試験対策を行うとともに次年度より認定試験対策、将来の管理栄養士試験に向けた対策講座を導入する。大量調理技術のさらなる向上を目指す。受験者が少ないフードスペシャリスト講座を見直しより栄養士養成の充実を行うための検討を行う。
2. 長崎学に対する認識および長崎の伝統食に対しての意識のさらなる向上を目指すため系統講義においても長崎食育学を意識した講義計画を立て実施する。学の資源を生かした公開講座を昨年度に引き続き開催し学外の長崎食育学に対する認識を深める。
3. より教員間の「ハウレンソウ」徹底により、一体となった協働するコースの雰囲気を構築、情報を共有し学生支援を行う。

平成29年度「栄養士コース」における教育の質保証のPDCA

Plan 計画

1. 実力ある栄養士の養成

模擬試験を柱に栄養士実力認定試験対策により力を入れる。
大量調理技術のさらなる向上

2. 長崎食育学の活用

長崎食育学に対する認識および長崎の伝統食に対する意識のさらなる向上を目指す。本学の資源を生かした公開講座を昨年度に引き続き開催し学外の長崎食育学に対する認識を深める。

3. 学生、教員、助手が一体となった協働

一体となり協働するコースの雰囲気構築、情報を共有し学生支援を行う。

Do 実行

1. 実力ある栄養士の養成

栄養士実力認定試験に対する意識づけ強化
調理系科目のレベルの維持

2. 長崎食育学の活用

「長崎食育学」の講義のみならず日常からの長崎伝統料理に対する認識向上

長崎食育学を生かした公開講座により本学の認識向上

3. 学生、教員、助手が一体となった協働

教員間の「ホウレンソウ」徹底により学生に対する情報の共有を行った。

Act 改善

1. 実力ある栄養士の養成

これまで通り模擬試験を柱に栄養士実力認定試験対策を行うとともに次年度より認定試験対策、将来の管理栄養士試験に向けた対策講座を導入する。

大量調理技術のさらなる向上を目指す。

受験者が少ないフードスペシャリスト講座を見直しより栄養士養成の充実を行うための検討を行う。

2. 長崎食育学の活用

食育学に対する認識および長崎の伝統食に対する意識のさらなる向上を目指すため系統講義においても長崎食育学を意識した講義計画を立て実施する。

本学の資源を生かした公開講座を昨年度に引き続き開催し学外の長崎食育学に対する認識を深める。

3. 学生、教員、助手が一体となった協働

より教員間の「ホウレンソウ」徹底により、一体となった協働するコースの雰囲気構築、情報を共有し学生支援を行う。

Check 検証

1. 実力ある栄養士の養成

栄養士実力認定試験結果は前年並みであった。
大量調理技術に関しては順調に深化している。

2. 長崎食育学の活用

長崎食育学に対する認識は本学進学の一動機の一つになっている。公開講座「長崎県の健康寿命」「島原の郷土料理」、「カステラのルーツ、パオデローを親子で作ろう」を開催し栄養士コースへの認識を深めた。

3. 学生、教員、助手が一体となった協働

学生に対する情報の共有が深まった。

28年度入学生において再履修科目を出すことなく全員が進級できた。キャリア支援において例年より就職決定が速かったが一般就職が多い傾向がみられた。

平成29年度 「ビジネス・医療秘書コース」 年次報告書

区分： **学科コース** ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：濱口 なぎさ（コース長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学びの実践
 - ・ 学内外の行事への学生達の積極的な参加を促し、事前・事後指導を充実させる（主体性・実行力、誠実性・協働性）
 - ・ 各種検定試験の合格者数増を目指す。（知識・技能、思考力、就業力）
2. ゼミナール
 - ・ 統一テーマ「地域交流・地域貢献」を継続する。（誠実性、多様性・協働性、表現力・創造力、自立性、貢献力）
3. 学生支援
 - ・ コース内教員で連携して学生の就職活動を支援し、卒業前の内定率を上げる
 - ・ 学生と教職員のコミュニケーションを密にし、各学生により添った支援を行う

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 学びの実践
 - ・ 2年 学長秘書（寮生2名、通学生2名）、1年全員「現代社会と女性」の補助（資料整理・来客応対等）
 - ・ 1・2年全員 長期休暇の活動報告会の実施など、プレゼンテーションの場を多く設けた。
 - ・ 秘書検定、ビジネス文書検定、日商 PC 検定、MOS の学内実施。
2. ゼミナール
 - ・ 長崎市内のオブジェマップや猫関連の情報マップ、就活パンフレットの作成と、子どもマナー教室の運営など、全ゼミで「地域交流・地域貢献」に取り組んだ。
3. 就職活動支援体制の強化
 - ・ 外部機関（ヤングハローワーク・フレッシュワーク・総合就業支援センター等）と連携した情報提供と就職支援の実施し、中小企業家同友会の協力による実践的な模擬面接も行った。
 - ・ 1・2年生合同で就活ピアサポートを3回実施した。
 - ・ 教員によるきめ細かな面接指導の実施。従来の二者面談に加え、2年後期には就活に消極的な学生に対する四者面談（教員3、学生1）を複数回実施。
 - ・ 掲示板を活用した情報提供の強化。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・**Ⓐ**・B・C・D 」
 - ・ 学長秘書の活動について、事前指導と振り返りが不足していた。
 - ・ 秘書検定は1級、日商 PC 検定は2級の合格者が出た。また、前年度と比較して、1年生の検定受験に積極性が見られた。（日商 PC 前年度の1年次受験者 15.3%、今年度の1年次受験者 44.4%など）
2. 自己評価「 S・**Ⓐ**・B・C・D 」
 - ・ ゼミナール発表会では1年生も能動的に参加する姿勢が定着し、質疑応答が活発に行われた。
 - ・ ゼミで作成するリーフレット・パンフレットの発行を早め、学外者からの評価を含んだ発表を行うことが望まれる。
3. 自己評価「 S・**Ⓐ**・B・C・D 」
 - ・ 目標としていた「卒業前までに就職率 100%」を達成した。
 - ・ 学生支援の満足度調査の結果で「就職・進学支援」が3.8、「教員との信頼関係」が3.7だった。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 実践力の強化
 - ・ 授業での学びが社会の中でどのように実践されるか、具体的な事例を学生が体験できる場を増やす。
 - ・ 従来の資格・検定に加え、登録販売者の受験対策講座を実施する。
2. 地域交流・地域貢献
 - ・ 2年生は「ゼミナール」の統一テーマとして継続して取り組み、1年生も新規科目である「プレゼミナール」で取り組む。
 - ・ 学外者との交流によって、コミュニケーション力強化を図り、地域社会の課題発見と解決を目指す。
3. 学生支援体制の強化
 - ・ 学生支援の満足度調査の結果で3点台後半だった「就職・進学支援」「教員との信頼関係」の向上を目指し、学生が相談しやすい雰囲気づくりを行う。
 - ・ 問題を抱えている学生に対し、コース内での情報共有とサポート体制の強化をはかる。

平成29年度 ビジネス・医療秘書コース 年次報告

Plan 計画

1. 学びの実践
 - 学内外の行事への学生達の積極的な参加を促し、事前・事後指導を充実させる(主体性・実行力、誠実性・協働性)
 - 各種検定試験の合格者数増を目指す(知識・技能、思考力、就業力)
2. ゼミナール
 - 統一テーマ「地域交流・地域貢献」を継続する(誠実性、多様性・協働性、表現力・創造力、自立性、貢献力)
3. 学生支援
 - コース内教員で連携して学生の就職活動を支援し、卒業前の内定率を上げる
 - 学生と教職員のコミュニケーションを密にし、各学生により添った支援を行う

Do 実行

1. 学びの実践
 - 2年 学長秘書、1年全員「現代社会と女性」の補助
 - 1・2年全員 プレゼンテーションの場を多く設けた。
 - 秘書検定、ビジネス文書検定、日商PC検定、MOSの実施。
2. ゼミナール
 - 全ゼミで「地域交流・地域貢献」に取り組んだ。
3. 就職活動支援体制の強化
 - 外部機関(ヤングハローワーク・フレッシュワーク・総合就業支援センター等)と連携、中小企業家同友会による実践的な模擬面接の実施。
 - 1・2年生合同で就活ピアサポートを3回実施。
 - 教員によるきめ細かな面接指導の実施。就活に消極的な学生に対する四者面談を複数回実施。
 - 掲示板を活用した情報提供の強化。

Act 改善

1. 実践力の強化
 - 授業での学びが社会の中でどのように実践されるか、具体的な事例を学生が体験できる場を増やす。
 - 従来の資格・検定に加え、登録販売者の受験対策講座を実施する。
2. 地域交流・地域貢献
 - 2年生は「ゼミナール」の統一テーマとして継続し、1年生も新規科目の「プレゼミナール」で取り組む。
 - 学外者との交流によって、コミュニケーション力強化を図り、地域社会の課題発見と解決を目指す。
3. 学生支援体制の強化
 - 学生支援の満足度調査の結果で3点台後半だった「就職・進学支援」「教員との信頼関係」の向上を目指し、学生が相談しやすい雰囲気づくりを行う。
 - 問題を抱えている学生に対し、コース内での情報共有とサポート体制の強化をはかる。

Check 検証

1. 学びの実践
 - 学長秘書の活動について、事前指導と振り返りが不足していた。
 - 秘書検定は1級、日商PC検定は2級の合格者が出た。また、前年度と比較して、1年生の検定受験に積極性が見られた。(日商PC検定前年度の1年次受験者15.3%、今年度の1年次受験者44.4%など)
2. ゼミナール
 - ゼミナール発表会では1年生も能動的に参加する姿勢が定着し、質疑応答が活発に行われた。
 - ゼミで作成するリーフレット・パンフレットの発行を早め、学外者からの評価を含んだ発表を行うことが望まれる。
3. 就職活動支援体制
 - 目標としていた「卒業前までに就職率100%」を達成した。
 - 学生支援の満足度調査の結果で「就職・進学支援」が3.8、「教員との信頼関係」が3.7だった。

平成29年度 「介護福祉士コース」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：長尾 久美子（コース長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 国家試験に全員合格
 - ①前期に基礎的項目の理解を強化
 - ②自学の習慣化と個別支援の充実
 - ③夏期講習の効果的な実施
2. 実践力を高める授業や地域活動の推進
 - ①事例研究・発表の充実継続
 - ②実践力、満足度を高める授業の実施
 - ③地域交流・貢献活動の継続
- 3 就職活動や学生生活等への適切な支援
 - ①就職活動支援の充実
 - ②学生への丁寧な個別支援

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 国家試験に全員合格
 - ①各教員担当授業で小テストを多く取り入れ、授業内容の理解と国試をつなげる工夫を行った。
 - ②受験対策問題集の自学を課題とし、毎週、確認のテストを行った。また、キャリアアップセミナーでは、テスト結果を分析し、データに基づく支援を行った。
 - ③夏期講習では、重点科目の基礎的理解を中心に実施した。
2. 実践力を高める授業や地域活動の推進
 - ①事例研究・発表で実習施設と連携し、専門職としての介護過程の展開やプレゼンテーションの修得を図った。
 - ②生活支援技術マニュアル作成、医療的ケアの実技、コミュニケーション技術など実技を強化する授業とした。
 - ③在宅で生活しておられる難病の当事者のお話やポールウォーキングの体験、認知症サポーター講座、地域包括ケアと地域で活動しておられる高齢者の活動のお話など、外部の方から直接お話をさせていただく機会や体験する機会を設け、実践力の強化を図った。
 - ④小島・茂木地区地域包括支援センターと連携し、「白木ふれあいサロン」での介護予防自主活動での交流事業、職員による介護予防出前講座など、地域活動に参加した。
3. 就職活動や学生生活等への適切な支援
 - ①介護人材センターや施設管理者・卒業生による介護職場に関するお話など就職支援の講座を開催した。
 - ②新入生歓迎会など1・2年合同の交流事業を実施した。
 - ③学生の個別の相談に丁寧に対応した。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・B・C・D」

- ①介護福祉士国家試験（H30.1.28、長崎県立体育館）は7名全員が受験した。
3月28日発表 7名全員合格
- ②学力評価試験成績（H29.11.28実施 介護福祉士養成施設協会主催）

| 得点（125点満点） | | ランク | 本学 人数（%） | 全国（%） |
|------------|-----------|----------|------------|-------------|
| 本学平均 | 89.14点 | A（80点以上） | 6名（85.71%） | 74.15% |
| 全国平均 | 87.34点 | B（60点以上） | 1名（14.29%） | 22.24% |
| 本学順位 | 131位/383校 | C（59点以下） | 0名（0%） | 3.61% |
| | | 計 | 7名（100%） | 5234名（100%） |

- ・昨年度より平均点が3.66点下がり、順位も落ちた。一般学生4名全員の得点が低かった。
- ・最低点は76点（Bランク1名）で全員合格基準（75点）に達していた。他6名はAランク（80点以上）であった。

③総合的評価

- ・全員合格したが、次年度は、基礎学力が低い学生についてさらに個別指導が必要である。
- ・全体の進め方として、国試に照準を合わせて、前期での基礎的項目の徹底理解、夏期講習での実践

力強化、後期での過去問題の正解率アップなどに計画的に取り組み、国試合格へとつなげるよう実施していくことが必要である。

- ・ 自学の習慣化（特に、一般学生）が不十分であった。過度に依存的にならないよう、自主的な取り組みにつながるような支援が必要である。
- ・ 国試問題が変化し、教科書のみでは解けない問題が多くなっている。各教員が、担当科目の問題傾向分析を行い、授業に取り入れ、学生の理解をより深めていくことが必要である。

2. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

- ①事例研究・発表の内容も深まり、成果があった。改善点としては、発表までの時間が短いため、実習後から夏休み期間を含めた取り組みについて検討する必要がある。
- ②卒業時アンケート（H28 入学生）の学習成果（6項目）についての評価の平均は4.0で、人数が少なく、偏りがあるかもしれないが、どの項目も他学科コースに比べ得点が高く、特に、①誠実性・真摯性(4.4)、②多様性・協働性(4.3)について高得点になっている。介護福祉士の義務規定として、誠実義務、連携義務が定められているが、2年間の学修成果として、介護福祉士に求められる基本的な態度・姿勢は修得できたのではないかと考える。授業評価アンケートについても、1年次評価（4.1）から2年次評価（4.3）と0.2ポイント増加している。一方、標準化テスト「キャリア・ステップ」については、1年次検査平均2.6から2年次検査3.2と高くなっているものの、得点自体が低く、2年間という短期間の中で、専門性の修得と同時に基礎的能力の向上も求められるという課題がある。
- ③地域交流は、1・2年合同で行ったが、時間的余裕がなく、不十分な点もあったが、高齢者の地域での生活と支援の在り方を学ぶ機会になった。また、地域の方々からも喜んでいただけた。
- ④1年生は、後期の成績が向上した学生が多く、社会人を中心に、福祉住環境コーディネータ2級に6名受験し4名合格した。

3. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

- ①就職支援の講座なども行ったが、7名のうち2名の養成科生がまだ就職先を決めておらず（活動中）、早い時期からの介護福祉職としての就職へのインセンティブを高めることができなかった。一方、一般学生は、例年より早く決定した。
- ②卒業時アンケートの総合的な満足度（設問8）は4.9と高く、全体的に満足していることがうかがわれる。
- ③1・2年生とも、全体に、まじめで、熱心に受講し、欠席も少なかった。1年生は、学生間のトラブルなどの相談が多々あり、そのつど学生の状況に合わせて丁寧に対応した。障害のある学生については、特別に配慮しながら支援した。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 国家試験全員合格

- ①国家試験日に照準を合わせた効果的な年間計画の策定と実施
- ②向上心を持って主体的に取り組むよう、自主学習の習慣化の支援
- ③各科目において、基礎的理解を深める授業の実施
- ④傾向と対策の徹底分析と学生への還元
- ⑤成績低位学生への年間を通じた個別支援の継続

2 実践力を高める学修支援

- ①事例研究・発表の充実
- ②実践力、満足度を高める授業の実施

2. 学生支援の充実

- ①就職活動支援の充実
- ②高め合う・支え合うクラスづくり
- ③学生への丁寧な個別支援

平成29年度 介護福祉士コース 年次報告

Plan 計画

1. 国家試験に全員合格
 - ①前期に基礎的項目の理解を強化
 - ②自学の習慣化と個別支援の充実
 - ③夏期講習の効果的な実施
2. 実践力を高める授業や地域活動の推進
 - ①事例研究・発表の充実継続
 - ②実践力、満足度を高める授業の実施
 - ③地域交流・貢献活動の継続
3. 就職活動や学生生活等への適切な支援
 - ①就職活動支援の充実
 - ②学生への丁寧な個別支援

Do 実行

1.
 - ①国試に対応した授業の工夫や、毎週の自学課題の確認テストを実施。
 - ②キャリアアップセミナーではテスト結果の分析とデータに基づく支援を行った。
 - ③夏期講習（全員参加）では、重点科目の基礎的理解を中心に実施。
2.
 - ①事例研究・発表で、専門職としてのスキルの向上を図った。
 - ②生活支援技術マニュアル作成、医療的ケアなど実技を強化するとともに、障害者や現場の方の話などを開催し、実践につながる学修にした。
 - ③地域包括支援センターと連携し、地域包括ケアに関する講話や、介護予防自主活動での交流事業、介護予防出前講座など地域活動に参加。
3.
 - ①介護人材センターや施設管理者・卒業生による就職支援講座を開催。
 - ②新入生歓迎会など1・2年合同の交流事業を実施
 - ③学生の個別の相談に丁寧に対応した。

Act 改善

1. 国家試験に全員合格に向けた支援
 - ①国家試験日に照準を合わせた効果的な年間計画の策定と実施
 - ②自主学習の習慣化の支援
 - ③基礎的理解を深める授業の実施
 - ④傾向と対策の徹底分析と学生への還元
 - ⑤成績低位学生への年間を通じた個別支援の継続
2. 実践力を高める学修支援
 - ①事例研究・発表の充実継続
 - ②実践力、満足度を高める授業の実施
2. 学生支援の充実
 - ①就職活動支援の充実
 - ②支え合いと、よりよい学修環境につくりにつながるクラス運営
 - ③学生への丁寧な個別支援

Check 検証

- 1
 - ①国家試験（1月28日；発表3月28日）7名全員が受験
 - ②学力評価試験成績（H29.11.28実施 介護協主催）全員合格基準到達；6名はAランク（80点以上）、Bランク1名（76点）
 - ③全体的には合格レベルまで到達できているが、基礎学力が低い学生について、応用力をつけるまでに至らなかった。
- 2
 - ①事例研究・発表は内容・プレゼンテーションとも良くできていた。
 - ②卒業時アンケートの学修成果6項目の平均は4.0と高く、授業評価アンケートでも、1年次4.1から2年次4.3に向上した。
 - ③地域交流は、1・2年合同で実施。時間的余裕がなく、不十分な点もあったが、高齢者の地域での生活と支援の在り方を学ぶ機会になった。
- 3
 - ①就職活動が遅く（活動中2名）社会人の就職活動に課題が残った。
 - ②卒業時アンケートの総合的な満足度（設問8）は4.9と高かった。
 - ③学生の個別の相談には丁寧に対応した。

平成29年度 「幼児教育学科」 年次報告書

区分： ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：白石 景一（学科長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 実習指導を通しての学びは、幼児教育学科の柱となる教育であるため、更に内容についてもシステムについても充実させていきたい。
2. 長崎女子校との連携について更に多角的に検討し、必要であれば、今年度も女子校応援プランに実施も検討したい。入学前の課題やピアノ個人レッスンサポート講座は実施の方向で更に充実させるべくまた、学科として取り組むべく検討したい。
3. キャリア教育については、昨年度から今年度にかけて、3月の研修時点での辞退や4月初旬での超早期退職があったので、今年度はそのようなことが無いよう、キャリア教育に資するガイダンスやチューター面談等の場において社会人、職業人としての意識を高めていきたい。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 本年度は、昨年度に引き続き、附属幼稚園体験学習の充実に努め、30年2月28日に学長にも参加頂き、平成29年度長崎女子短期大学附属幼稚園と幼児教育学科との連携推進会議を実施した。附属幼稚園の先生方からも率直な意見が出され次年度以降につながる、大変有意義な会議となった。
2. 本年度も8月23日～25日に長崎女子高応援プランとして、3年生の幼児教育志望者に対して実施した。昨年度から、入試広報室と女子高の進路とで調整して進めて頂いて助かった。また、サポートレッスンも例年通り実施し、入学前の課題への取り組み方や、入学までのピアノの練習方法などを、個人レッスンを主に実施した。
3. 本年度、キャリア教育については、新1年生入学オリエンテーション時より、就職状況や支援の方針などについて説明し、ボランティア活動、卒業生講演会、職業フォーラム、就職活動体験報告会等。2年次に於いては第1・2・3回就活セミナー、複数回の二者面談、進路相談会、園長講演会、また、長崎市保育会「ふれあい体験プロジェクト」、長崎県私立幼稚園連合会「みにこんね」、長崎県保育協会「オープン保育所（園）見学会」、長崎県子ども未来課「保育の仕事合同面談会」、大村市保育会「学生のための大村市内保育園・こども園見学ツアー」への積極的参加の呼びかけ等、様々な角度からキャリアについて学ぶ機会を設けた。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・・B・C・D」

昨年度（28年度）までは、実習統括は学科長1名であったが、本年度は2名体制とし、なるべく学科長が実習統括に於いて関わりを少なくするよう心がけたが、ほぼ、教育実習、保育実習（施設）、保育実習（保育所）保育実習指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、附属幼稚園体験学習、保育教職実践演習など、各担当が率先して責任感を持って取り組んでおり、来年度以降は学科長の負担は軽減されると思われる。ただし、実習事前事後指導に関わるスケジュールについては、綿密に計画を練る必要がある。

2. 自己評価「S・・B・C・D」

時期的に、免許更新講習、キャリアアップ講座、特例措置講座オ、オープンキャンパスなどでスケジュールが過密な中ではあるが、女子校の進路指導部と本学入試広報室とが連携して上手くセティングできて良かった。学科として取り組むまことについては、十分とは言えないが、今回初めて「ピアノ個人レッスンサポート講座」第1回目記念ホールでの実施の様子をホームページにアップすることができた。

3. 自己評価「S・・B・C・D」

昨年度に比べて、キャリアセンターとの連携がより緊密になってきていると感じている。長崎市保育会、長崎県私立幼稚園連合会、長崎県保育協会、長崎県子ども未来課、大村市保育会などが主催する各企画への積極的参加の呼びかけ等、様々な角度からキャリアについて学ぶ機会を提供する姿勢は評価できると考える。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 来年度（30年度）は、学科長、実習担当が交代するため、様々な問題が発生する可能性があるが、まずは、本年度までの流れを踏襲し、新学科長、実習担当の元、それぞれの担当者が率先して取り組んで欲しい。
2. 来年度は、音楽担当常勤講師1名となるため、学科として取り組むことが望まれる。
3. 来年度は、現代社会と女性の中に就活セミナーなどを盛り込む試みが計画されているが、学科としての協力体制が求められる。

平成29年度 幼児教育学科 年次報告

Plan 計画

1. 実習指導を通しての学びは、幼児教育学科の柱となる教育であるため、更に充実を図る。
2. 長崎女子校との連携について更に多角的に検討し、今年度も「女子校応援プラン」・「ピアノ個人レッスンサポート講座」は、できれば学科として実施していきたい。
3. キャリア教育については、学生が様々な体験を通して幅広く学べる機会を提供したい。

Do 実行

1. 本年度は、昨年度に引き続き、附属幼稚園体験学習の充実に努め、30年2月28日に平成29年度の附属幼稚園と幼児教育学科との連携推進会議を実施した。（学長、園長出席）
2. 本年度も8月23日～25日に「長崎女子高応援プラン」、12月・1月・3月に「ピアノ個人レッスンサポート講座」を3回実施した。
3. 新1年生入学オリエンテーション時より、就職状況や支援の方針などについて説明。就活セミナー、複数回のチューター面談、進路相談会、園長講演会など様々な体験を通して幅広く学んだ。

Act 改善

1. 来年度（30年度）は学科長、実習担当が交代するため、様々な問題が発生する可能性があるが、まずは、1年間本年度までの流れを踏襲し、学科長、実習担当者の元、協力し合い、それぞれの担当者が率先して取り組んで欲しい。
2. 来年度は、音楽担当常勤講師1名となるため、学科として取り組むことが望まれる。
3. 来年度は、現代社会と女性の中に就活セミナーなどを盛り込む試みが計画されているが、学科としての協力体制が求められる。

Check 検証

1. 毎年短大での実施であったが、今年度初めて附属幼稚園において開催した。交流・連携の意味においても良かったと考える。附属幼稚園側から率直な意見が多く出されてことも、今後連携を推進する上で良かったと考える。
2. 「女子校応援プラン」では、女子高進路指導部と本学入試広報室とが連携して上手くセッティングできて良かった。
3. キャリアセンターとの連携がより緊密になってきていると感じている。様々な角度からキャリアについて学ぶ機会を提供する姿勢は評価できると考える。

| 平成29年度 「学生部」 年次報告書 | |
|--------------------|--|
| 区分： | 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ） |
| 氏名： | 光武 きよみ (学生部長) |
| PLAN (計画)： | 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。 |
| | <ol style="list-style-type: none"> 1. 教務委員会、学生委員会と緊密に連携し、両委員会の円滑な運営に努める。 2. 寮務委員会の一員として、寮における危機管理体制の構築に努める。 3. 学生に関する情報共有を積極的に行い、問題行動の防止に努める。 |
| DO (実行)： | 目標の達成に向けて計画を遂行する。 |
| | <ol style="list-style-type: none"> 1. 委員会の開催期日、議題等を事前に確認して全ての会議に出席するとともに、課題の整理や課題解決に向けた相談等に積極的に応じる。 2. 寮務委員長や寮監の方々と連携して寮の課題や学生の状況を把握するとともに、寮生が安心して過ごすことができるよう協力する。 3. 学生委員会等と連携して学生の実態把握・情報収集を行い、必要に応じて学生全体を指導する。また問題行動が懸念される学生については、関係職員と共に個別指導を行う。 |
| CHECK (検証)： | 成果を測定 (量的・質的データ) し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに口 (囲み線) を付ける。 |
| | <ol style="list-style-type: none"> 1. 自己評価「 S・A・ⓑ・C・D 」 年間を通して全ての会議に出席した。学生部長初年度のため相談や助言を行うことができなかったが、各委員長の的確なリードがあり、検討事項を運営委員会へあげて、アドバイス等を頂き各委員会にフィードバックすることはできた。 2. 自己評価「 S・A・ⓑ・C・D 」 寮生(2年生)の飲酒による寮則違反があり、飲酒学生の面談を行った結果、その後の飲酒は見られなかった。また点呼・掃除・門限遅れに対する指導も複数回行ったが、疾患のため服薬していたり、学生自身の集団生活に対する意識も低く、指導が不十分であった。しかし、後期になるにつれ、委員長や寮監長との情報共有も密となった点は評価できると考える。さらに本年度は、救急車を要請することが多かった。今後は、職員等の救急対応の講習なども必要ではないかと考える。 3. 自己評価「 S・A・B・ⓒ・D 」 バスマナーについては、学生委員会・学友自治会と共に取り組んだが、周知徹底には至らず、苦情が減少することはなかった。また、短大敷地内で学生自家用車と業者様社用車の事故ならびに、ガラスを割り外傷を負うなど、不注意から発生する事故があり、それぞれに個別指導を行った。 |
| ACT (改善)： | 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。 |
| | <ol style="list-style-type: none"> 1. 各委員会の抱える課題を明確にし、課題解決に向けた相談・助言を積極的に行う。 2. 寮生の生活実態を細やかに把握し、寮務委員と密に連携して集団生活のマナー向上に努める。 3. 挨拶・言葉遣い・バスマナー等、学友自治会と連動して社会人としてのマナー向上に努める。 |

平成29年度 学生部 年次報告

Plan 計画

1. 教務委員会、学生委員会と緊密に連携し、両委員会の円滑な運営に努める。
2. 寮務委員会の一員として、寮における危機管理体制の構築に努める。
3. 学生に関する情報共有を積極的に行い、問題行動の防止に努める。

Do 実行

1. 委員会の開催期日、議題等を事前に確認して全ての会議に出席するとともに、課題の整理や課題解決に向けた相談等に積極的に応じる。
2. 寮務委員長や寮監の方々と連携して寮の課題や学生の状況を把握するとともに、寮生が安心して過ごすことができるよう協力する。
3. 学生委員会等と連携して学生の実態把握・情報収集を行い、必要に応じて学生全体を指導する。また問題行動が懸念される学生については、関係職員と共に個別指導を行う。

Act 改善

1. 各委員会の抱える課題を明確にし、課題解決に向けた相談・助言を積極的に行う。
2. 寮生の生活実態を細やかに把握し、寮務委員と密に連携して集団生活のマナー向上に努める。
3. 挨拶・言葉遣い・バスマナー等、学友自治会と連動して社会人としてのマナー向上に努める。

Check 検証

1. 年間を通して全ての会議に出席した。学生部長初年度のため相談や助言を行うことができなかったが、各委員長の的確なリードがあり、検討事項を運営委員会へあげて、アドバイス等を頂き各委員会にフィードバックすることはできた。
2. 寮生(2年生)の飲酒による寮則違反があり、飲酒学生の面談を行った結果、その後の飲酒は見られなかった。また点呼・掃除・門限遅れに対する指導を複数回行ったが、疾患のため服薬していたり、学生自身の集団生活に対する意識が低く、指導が不十分であった。しかし、後期になるにつれ、委員長や寮監長との情報共有も密となった点は評価できる。さらに今年度は、発作等により救急車を要請することが多かった。今後は、職員等の救急対応講習も必要ではないかと考える。
3. バスマナーについては、学生委員会・学友自治会と共に取り組んだが、周知徹底には至らず、苦情が減少することはなかった。また短大敷地内で学生自家用車と業者様社用車の事故ならびに、ガラスを割り外傷を負うなど、不注意から発生する事故があり、それぞれに個別指導を行った。

| 平成29年度 「図書館」 年次報告書 | |
|--------------------|--|
| 区分： | 学科コース・委員会等・ 事務局等 ・教職員個人・その他（ ） |
| 氏名： | 森 弘行（図書館長） |
| PLAN（計画）： | 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。 |
| | <ol style="list-style-type: none"> 1. 利用者サービスの改善 古くて利用されない図書が書架を占有していて学生より目的の図書が探しにくいとの指摘があり、不要図書の廃棄を進め、利用しやすい環境を整える 2. 不要図書の廃棄等により、学外向け無料サービス版 OPAC に対応 3. 九州地区大学図書館協議会 H29 総会研修会の運営 |
| DO（実行）： | 目標の達成に向けて計画を遂行する。 |
| | <ol style="list-style-type: none"> 1. 紀要・図書委員会で不要図書の廃棄を検討する。 2. 学外向け OPAC の登録書籍の見直しを実施。 3. H29 年 4 月に九州地区大学図書館協議会総会研修会をセントヒル長崎で開催。 |
| CHECK（検証）： | 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。 |
| | <ol style="list-style-type: none"> 1. 自己評価「S・A・B・C・D」 紀要・図書委員会ででの検討時期が遅くなり、H30 年度の実施に向け準備中。 2. 自己評価「S・A・B・C・D」 ブレインテック社に依頼し、登録書籍から利用が見込まれない古いものを削除し対応。 3. 自己評価「S・A・B・C・D」 問題なく総会・研修会を終了し、次年度幹事館へ引き継ぎ済み。 |
| ACT（改善）： | 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。 |
| | <ol style="list-style-type: none"> 1. 利用者サービスの改善のための館内整備。 2. サーバー機器を含めた蔵書管理、貸し出し管理システムの更新。 3. 各種研修会への参加。 |

平成29年度 図書館 年次報告

Plan 計画

- 利用者サービスの改善
古くて利用されない図書が書架を占有しており、不要図書の廃棄を進め、利用しやすい環境を整える
- 不要図書の廃棄等により、学外向け無料サービス版OPACに対応
- 九州地区大学図書館協議会H29総会研修会の運営

Do 実行

- 紀要・図書委員会で不要図書の廃棄を検討
- 学外向けOPACの登録書籍の見直しを実施
- H29年4月に九州地区大学図書館協議会総会研修会をセントヒル長崎で開催

Act 改善

- 利用者サービスの改善のための館内整備
- サーバー機器を含めた蔵書管理、貸し出し管理システムの更新
- 各種研修会への参加

Check 検証

- 紀要・図書委員会での検討時期が遅くなり、H30年度の実施に向け準備
- ブレインテック社に依頼し、登録書籍から利用が見込まれない古いものを削除し対応
- 問題なく総会・研修会を終了し、次年度幹事館へ引き継ぎ

平成29年度 「自己点検評価室」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：武藤 玲路（室長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 【学修成果の検証について】

昨年度までの反省で、学生の到達度と満足度について、不明確な点や統一性や整合性に欠ける点があった。各学科・コースにおける学修成果の到達度と学生支援の満足度について、評価指標と評価基準を確立する。

2. 【根拠資料の収集について】

自己点検・評価報告書に記載する観点の根拠となる量的・質的資料が、不十分であったり存在しなかった。第3評価期間の認証評価に向けて、PDCA サイクルが確立していることを示す根拠資料を収集・作成する。

3. 【自己点検・評価報告書の作成について】

平成30年度から実施される第3評価期間の認証評価より、評価の観点と報告書の様式が大幅に変更される。平成29年の8月に東京で開催されるALO説明会に参加し、報告書の執筆要項と執筆分担表を作成する。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 各学科・コースの学修内容一覧表と学修成果一覧表を作成し、学修成果の可視化と体系化を行った。

2. 第3評価期間の認証評価に向けて、根拠資料の一覧表を作成し、学修成果と規程集の収集・整理を行った。

3. ALO説明会に参加し、平成31年度の自己点検・評価報告書に関する執筆要項と執筆分担表を作成した。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**□**A・B・C・D」

学修成果の到達度、および学生支援（学修・生活・進路）の満足を体系的に可視化した一覧表を作成した。学修成果6項目の到達度は、学生の自己評価、学務データ、外部の標準化テストの数値で示した。その他に、成績分布、学生支援の満足度、授業評価アンケート、資格等の取得状況・進路状況を一覧表にまとめて示した。

2. 自己評価「S・**□**A・B・C・D」

自己点検・評価報告書のマニュアルに従って、観点別に根拠資料の一覧表を作成し、資料収集を開始した。

3. 自己評価「S・**□**A・B・C・D」

自己点検・評価報告書のマニュアルに従って、執筆要項と執筆分担表を作成し、数回の編集会議を行った。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 今後は平成31年度の認証評価に向けて、評価指標の体系化に努めるとともに、解釈と活用法を検討したい。

2. 今後は平成31年度の認証評価に向けて、提出資料と備付資料の根拠資料の収集・作成・整理に努めたい。

3. 今後は平成31年度の認証評価に向けて、執筆スケジュールと執筆分担に従って、報告書の作成を行いたい。

平成29年度 自己点検評価室 年次報告

Plan 計画

1. 【学修成果の検証について】

昨年度までの反省で、学生の到達度と満足度について、不明確な点や統一性や整合性に欠ける点があった。各学科・コースにおける学修成果の到達度と学生支援の満足度について、評価指標と評価基準を確立する。

2. 【根拠資料の収集について】

自己点検・評価報告書に記載する観点の根拠となる量的・質的資料が、不十分であったり存在しなかった。第3評価期間の認証評価に向けて、PDCAサイクルが確立していることを示す根拠資料を収集・作成する。

3. 【自己点検・評価報告書の作成について】

平成29年の8月に東京で開催されるALO説明会に参加し、報告書の執筆要項と執筆分担表を作成する。

Do 実行

1. 各学科・コースの**学修内容一覧表**と**学修成果一覧表**を作成し、学修成果の可視化と体系化を行った。
2. 第3評価期間の認証評価に向けて、**根拠資料の一覧表**を作成し、学修成果と規程集の収集・整理を行った。
3. ALO説明会に参加し、平成31年度の自己点検・評価報告書に関する**執筆要項**と**執筆分担表**を作成した。

Act 改善

1. 今後は平成31年度の認証評価に向けて、評価指標の体系化に努めるとともに、解釈と活用法を検討したい。
2. 今後は平成31年度の認証評価に向けて、提出資料と備付資料の根拠資料の収集・作成・整理に努めたい。
3. 今後は平成31年度の認証評価に向けて、執筆スケジュールと執筆分担に従って、報告書の作成を行いたい。

Check 検証

1. 学修成果の到達度、および学生支援（学修・生活・進路）の満足度を体系的に可視化した一覧表を作成した。学修成果6項目の到達度は、学生の自己評価、学務データ、外部の標準化テストの数値で示した。その他に、成績分布、学生支援の満足度、授業評価アンケート、資格等の取得状況・進路状況を一覧表にまとめて示した。
2. 自己点検・評価報告書のマニュアルに従って、観点別に根拠資料の一覧表を作成し、資料収集を開始した。
3. 自己点検・評価報告書のマニュアルに従って、執筆要項と執筆分担表を作成し、編集会議を行った。

平成29年度 「入試広報室・入試委員会」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：前田 功（室長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 積極的な高校訪問、各種ガイダンスへの参加、オープンキャンパス、各種印刷物のリニューアル、HPの更新等を積極的に行い、次年度入学予定者の学生募集活動に繋げていく。
2. 本学教職員及び校内の各種会議（特に入試・運営委員会、募集広報委員会）等と連携し、積極的な募集広報に努める。
3. 少子化の進行で高校生の数が減少する中、各種取組を通じて、平成29年度入学生を上回る学生確保を目指し、行動を取る。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 前年度の内容や取組について見直すべきところは見直ししながら、継続して学生の募集活動を続けていく。特に夏のオープンキャンパスについては、昨年度の反省事項がいくつかあったので、改善をめざす。
2. 運営委員会や募集広報委員会等において、委員の方々の考えを尊重しながら学生募集のために役立つことはすべて実行していくつもりでやっていく。
3. 前年度以上の入学生の確保（200名以上の入学者）のためにできるところからやっていく。特にガイダンスやオープンキャンパスには力を注いでいく。そのためにも各種パンフレットやチラシ、募集要項などの印刷物やHPの充実、長崎女子高校との高大連携に取り組んでいく。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

高校訪問はのべ約180校（4月～2月）を訪問。進路ガイダンスは64回（会場型16回、校内型48回）で、のべ面談参加者数は420名（H30年2月末現在）。学校見学会は5校（長崎女子高校を除く）に対応、オープンキャンパス（OC）は4回実施し、高校生だけの参加はのべ260名（参加者は夏の3回分のみ）。

2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

ほぼ計画通りに実施し、全学で取り組む体制が確立された。

3. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」

11月の推薦入試において、154名の志願（前年比－20名）という結果に終わった。最終的な入学予定者数は一般入試、自己推薦2期入試などの合格者数を加味すると162名+αとなる見込みであり、前年度比－25名という結果に終わりそうである。その原因はやはり長崎女子高校からの志願者が、幼児教育学科に33名、栄養士コースに7名、ビジネスコースに2名と偏りがあったことと栄養士・ビジネスともに例年に比べて絶対数が少なくなったことが大きい。他の高校からの志願者数は例年とほとんど変わらない状況である。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 高校訪問計画、募集要項作成、オープンキャンパスの内容など、次年度に向けて手直しを加えていく必要がある。特に学科・コース卒業後の姿が可視化できるような工夫をしていかねばならない。また、進路ガイダンスについては県内のあらゆる地区を回りたい。県外は沖縄と熊本天草地区を対象を絞りたい。
2. 運営委員会では必要事項に対して、懇切丁寧に説明を加えることで、学生募集の効率化・活性化につなげていきたい。
3. HPを含めた広報については、さらなる改善をはかり、200名に近い入学者数の確保に努めていきたい。

平成29年度 入試広報室・入試委員会 年次報告

Plan 計画

- ・高校訪問、ガイダンス、OC、HPの更新、各種印刷物リニューアルなどへの積極的な対応
- ・本学教職員及び各種会議との連携による積極的な募集広報
- ・各種取組を通じた前年度以上の入学生確保

Do 実行

進路ガイダンス、OC、高校訪問、HPの更新・充実、広報用チラシの新規作成、大学案内パンフレット・募集要項の内容見直しと充実、学校見学会の機会増と充実、長崎女子高校との連携推進、関係高校連絡協議会の開催 等々

Act 改善

1. 進路ガイダンス: 県北、離島、島原半島、天草(熊本県)へ
2. OC: 積極的な広報、昼食も含めた実施内容の見直し
3. 高校訪問: 訪問校、時期等の見直し、タイムリーな資料提供
4. 大学案内パンフレット: 2018年版をもとに内容の見直し、充実
5. 募集要項: 本学独自の奨学金のあり方の検討と記載方法

Check 検証

進路ガイダンス(64回)【高校48回、会場16回・面談者420名】、高校訪問(延べ180校)、OC参加者数【高校生 延べ260名】

→ → →

結果として、推薦入試での入学予定者154名＋一般入試・自己推薦で10名＋α、計162名程度【昨年比－25名】と、想定したよりも入学予定者数が伸びない結果となった

平成29年度 「キャリア支援センター」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：原田 実輝（センター長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 引き続き就職率100%を目指す。
2. 個別支援を強化し、特に動きの遅い学生や専門就職以外の学生の支援を強化する。
3. 効果的な就職ガイダンスの実施。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 各学科・コースにおいて、二者・三者面談、模擬面接、ガイダンス、企業交流会、就職活動体験報告会、事業主との交流等を行い、学生の就職意識を高める支援を行った。
また、キャリアセンターでは迅速な求人情報の提供、履歴書添削、個別相談を行った。
2. 個人的な相談には丁寧に対応していくと共に、自分から相談に来ない、動きの遅い学生に関しては教職員間で情報を共有し、適切に声をかけるよう努めた。
3. 学生の活動時期に合った合わせたタイミングで、効果的なガイダンスが行えるよう内容を見直した。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに口（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**Ⓐ**・B・C・D」

3月14日現在の全体の就職率は97.2%で、前年同期比0.8ポイント増であった。
最終就職率に向けて、引き続き未決定者5名の支援を行っていく。

2. 自己評価「S・A・**Ⓑ**・C・D」

- ・個別の相談には時間を割いて丁寧な対応を心がけた。
- ・履修や実習状況等、問題のある学生の情報が担当者のみにとどまり、情報共有が十分ではないケースがあった。
- ・卒業時アンケートによると、就職支援に対する学生の満足度は5段階評価の4.6ポイントであった。

3. 自己評価「S・**Ⓐ**・B・C・D」

- ・「現代社会と女性」の中で全学的なキャリアアップの意識付けを行った。
- ・各学科・コース共に、きちんと体系化された就職ガイダンスが実施できた。
(S・L・Yはガイダンス・就活セミナーとして3回程度、Lはキャリアアップセミナーの授業として18回行った。)

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 引き続き就職率100%を目指して支援する。
2. 問題を抱えている学生に関しては情報共有を徹底し、全教職員できめ細やかな支援を行う。
3. 早期離職者を減らす。
4. 卒業生の就職先調査を実施する。

平成29年度 キャリア支援 年次報告

Plan 計画

1. 就職率100%を目指す
2. 個別支援を強化する
3. 効果的な就職ガイダンスの実施

Do 実行

1. ・迅速な求人情報提供・二者面談・三者面談
・履歴書・ESの書き方指導、添削指導
・模擬面接・企業交流会・面談会の実施
・卒業生講演会・就職活動体験報告会・就職先訪問
・事業主との交流・卒業生の集い
2. 動きの遅い学生や、専門就職以外を希望する学生の情報を学科から収集し、個別に支援していく。
3. 学生の負担を軽減し、効果的かつ効率的なガイダンスとなるよう見直しを図る。

Act 改善

1. 次年度も引き続き就職率100%を目指す。
2. 問題を抱えている学生に関しては情報共有を徹底し、きめ細かく全教職員で支援していく。
3. 早期離職者を減らす。
4. 卒業生の就職先調査を実施する。

Check 検証

1. 3月14日現在の全体の就職率は97.2%と前年同期比0.8ポイント増であった。
未決定者5名の支援を引き続き行っていく。
2. ・学生の個々の相談には丁寧な対応を心がけた。
・履修や実習状況に問題のある学生の情報が担当者のみにとどまり、情報共有が十分でないケースがあった。
・卒業時アンケートによると、就職支援に対する学生の満足度は5段階評価の4.6ポイントであった。
3. 各学科・コース共にきちんと体系化された就職ガイダンスが実施できた。
(S・L・Yはガイダンス・就活セミナーとして3回程度、Lはキャリアアップセミナーの授業として18回行った。)

平成29年度 「FD・SD委員会」年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：武藤 玲路（委員長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 【FDについて】

授業でのアクティブラーニングの意義と方法が全学的に浸透しておらず、学生へ教育も効果を上げていない。アクティブラーニングの模擬授業の研修会を実施して、深い学び、対話的な学び、主体的な学びを促進する。

2. 【SDについて】

学務システムの開発が予定より著しく遅れており、教職員の操作の習得と日常業務での活用が進んでいない。学務システムの開発を促進し、授業や業務に必要な情報を共有して活用するシステムのスキルを修得させる。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 【FDについて】

第3回FD研修会で、アクティブラーニングをテーマとしたワークショップ形式の模擬授業を実施した。

2. 【SDについて】

SD研修会でPC技術講習会を3回実施し、学務システムの操作方法と機能の修正の意見交換を行った。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

9割以上の教員がアクティブラーニング専用の教室や器具を用いた教授法の講習会を受講することができた。

2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

8割以上の教職員が学務システムの活用法を学ぶことができ、日常業務の効率化に有益である感想を持った。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 【FDについて】

今後も、アクティブラーニングの目的である学生の深い学び、対話的な学び、主体的な学びの涵養に努めたい。

2. 【SDについて】

エンrollment・マネジメントのシスエム構築を目指して、実用的で効率的な評価指標の体系化に努めたい。

平成29年度 FD・SD委員会 年次報告

Plan 計画

1. 【FDについて】

授業でのアクティブラーニングの意義と方法が全学的に浸透しておらず、学生へ教育も効果を上げていない。アクティブラーニングの模擬授業の研修会を実施して、深い学び、対話的な学び、主体的な学びを促進する。

2. 【SDについて】

学務システムの開発が予定より著しく遅れており、教職員の操作の習得と日常業務での活用が進んでいない。学務システムの開発を促進し、授業や業務に必要な情報を共有して活用するシステムのスキルを修得させる。

Do 実行

1. 【FDについて】

第3回FD研修会で、アクティブラーニングをテーマとしたワークショップ形式の模擬授業を実施した。

2. 【SDについて】

SD研修会でPC技術講習会を3回実施し、学務システムの操作方法と機能の修正の意見交換を行った。

Act 改善

1. 9割以上の教員がアクティブラーニング専用の教室や器具を用いた教授法の講習会を受講することができた。

2. 8割以上の教職員が学務システムの活用法を学ぶことができ、日常業務の効率化に有益である感想を持った。

Check 検証

1. 【FDについて】

今後も、アクティブラーニングの目的である学生の深い学び、対話的な学び、主体的な学びの涵養に努めたい。

2. 【SDについて】

エンロールメント・マネジメントのシステム構築を目指して、実用的で効率的な評価指標の体系化に努めたい。

平成29年度 「IR推進室」年次報告書

区分： 学科コース・委員会等・**事務局等**・教職員個人・その他（ ）

氏名：森 弘行（室長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学務システム、各種調査を活用したデータ分析のためのデータ整備
2. 適用可能なデータ分析手法の調査
3. ファイルサーバーのファイルおよびフォルダ管理の推進

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 社会人基礎力調査の実施、卒業時アンケートの実施・集計し、学務システムとの連結データ作成。
2. 卒業時アンケートおよびGPAとの関連などについて統計的分析の実施。
3. 各学科・コースの委員によりファイルサーバーのファイルおよびフォルダ管理を実施。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□**・C・D」
学務システムのデータをデータ分析用に抽出する機能が十分とは言えず、統計処理用のデータを作成するために手間がかかってしまう状況。
2. 自己評価「S・A・**□**・C・D」
これまでは各種調査ごとの集計だけであったが、統計処理ソフトJMPを用い、複数の資料を基に分析ができる目途が立った。
3. 自己評価「S・A・**□**・C・D」
G:ドライブ40GBのおよそ75%を学友自治会関連が占めており、そのほとんどが過去の資料のファイルや動画、写真であり、ほとんど利用されていないと思われる。H:ドライブも95GBのうち写真や動画が70%以上を占めている。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 学務システムを含めた基礎資料の整備に努める。
2. 複数の資料を基にした統計的検定および分析結果からの考察を行う。
3. 資料の利用頻度に応じたストレージの使い分けを促す。
インターネットサーバー、学務システムサーバーの導入。
Wi-Fi環境整備。

平成29年度 IR推進室 年次報告

Plan 計画

- 学務システム、各種調査を活用したデータ分析のためのデータ整備
- 適用可能なデータ統計的分析手法の調査
- ファイルサーバーのファイルおよびフォルダ管理の推進

Do 実行

- 社会人基礎力調査の実施、卒業時アンケートの実施・集計し、学務システムのデータと連結
- 卒業時アンケートおよびGPAとの関連などについて分析
- 各学科・コースの委員によりファイルサーバーのファイルおよびフォルダ管理を実施

Act 改善

- 学務システムを含めた基礎資料の整備に努める。
- 複数の資料を基にした統計的検定および分析結果からの考察を行う。
- 資料の利用頻度に応じたストレージの使い分けを促す。

Check 検証

- 学務システムのデータをデータ分析用に抽出する機能が十分とは言えず、統計処理用のデータを作成するために手間がかかってしまう状況。
- これまでは各種調査ごとの集計だけであったが、統計処理ソフトJMPを用い、複数の資料を基に分析ができる目途がついた。
- G:ドライブ40GBのおよそ75%を学友自治会関連が占めており、そのほとんどが過去の資料のファイルや動画、写真であり、ほとんど利用されていないと思われる。H:ドライブも95GBのうち写真や動画が70%以上を占めている。

平成29年度 「募集・広報委員会」 年次報告書

区分： 学科専攻 ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他 ()

氏名：前田 功 (委員長)

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. オープンキャンパスのさらなる充実と積極的な広報活動による学生確保を図る。
2. 本学の教育内容や教育活動を学内外に発信するための効果的な広報活動について検討する。
3. 募集・広報に必要な情報の収集・整理・共有の方法・手段について検討する。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 夏のオープンキャンパス (OC) や資料請求者などに送付するなどして広報を行うとともに、短大の HP での広報・申し込みを行った。「女子短アンバサダー」とともに「撮影協力隊」を募り、学生スタッフとして協力して活動してもらった。
2. 学校案内パンフレットと募集要項を同時並行で作成し、リアルタイムの情報提供に心がけたが、パンフレットの製作が少し遅れ気味であった。学報グリッターについては、室員 (藤田) の活躍で7月と11月の2回発行できた。「女子短アンバサダー」や「撮影協力隊」がよく協力してくれた。全般に藤田中心となって、紙面や内容など精査した上で発行できた。短大 HP については情報発信をマメにおこなった。
3. 入試広報室が中心となって募集・広報に必要な情報を収集し、委員会に諮って協議した。原案が覆されることもあったが結果としてよりよいものになったのではないかと考えている。

CHECK (検証)： 成果を測定 (量的・質的データ) し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□ (囲み線) を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」
夏のOC (3回実施) について、延べ参加者は前年より若干増えたが、実参加者数はむしろ前年比マイナスであった。生徒だけではなく、保護者にも見学や参加が出来るような時間設定にするなど配慮は行った。
2. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」
事務局内入試広報室員 (藤田) の笑顔によって仕事もはかどった。何とか室長と二人の体制で、募集・広報委員会のメンバーとも協力しながら、前年度並みの広報活動は行えたのではないかと。
3. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」
入試広報室と募集広報委員会が一体となって、業務を推進できた。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 今後も入試広報室と募集・広報委員会の業務内容を整理し、役割の明確化を図り表裏一体となった広報活動を行っていく。
2. OCについて、準備計画の早期立案と役割分担の明確化をはかり、全学的な取り組み体制を強固なものとし、高3生の実参加者数を増やしていきたい。
3. 本学の教育内容や活動を学内外に発信するための効果的な広報として、SNSの活用など、さまざまな広報媒体について検討を行っていきたい。

平成29年度 募集・広報委員会 年次報告

Plan 計画

1. オープンキャンパスの充実と積極的な広報活動による集客を図る
2. 本学の教育内容や活動を学内外に発信するための、効果的な広報について検討する
3. 募集・広報に必要な情報の収集・整理・共有の方法を検討する

Do 実行

1. 夏に3回のオープンキャンパスを実施。また、3月24日(土)に春のキャンパス見学会を実施。それぞれリーフレットやチラシ・ハガキを作成して各高校や資料請求者などに送付して広報を行うとともに、短大HPでの広報・申し込みを行った。「女子短アンバサダー」と「撮影協力隊」を募り、学生スタッフとして活動してもらった。
2. 学校案内パンフレットと募集要項を同時並行で作成し、リアルタイムの情報提供に心がけた。学報グリッターについては室員(藤田)の活躍で7月と11月の2回発行した。
3. 入試広報室が中心となって募集・広報に必要な情報を収集した。

Act 改善

1. 入試広報室と募集・広報委員会の業務内容を整理し、役割の明確化を図り、表裏一体となった広報活動を行う。
2. オープンキャンパス準備計画の早期立案と役割分担の明確化を図り、全学的な取り組み体制を強固なものにする
3. 本学の教育内容や活動を学内外に発信するための効果的な広報として、SNSの活用など様々な広報媒体の活用方法について検討する

Check 検証

1. 入試広報室が中心となって、オープンキャンパス準備が行われたこともあり、運営もスムーズであった。夏のオープンキャンパスの参加者は延べ260名(実参加者数は昨年比-7名)。保護者の見学や参加にも配慮した時間設定を行った。
2. 室員(藤田)が21歳と若く、高校生と感覚の近い若い女性目線での広報資料の作成ができた。
3. 入試広報室と募集広報委員会とが一体となって、業務を推進し、募集・広報に必要な情報の収集・整理・共有を行うことができた。

平成29年度 「紀要・図書委員会」年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：田川 千秋（委員長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 図書館利用者増のため授業との関係を深化させる。そのため教職員へ協力を依頼する。
図書選定は学生、教職員共に前・後期で実施する。
2. 紀要について、掲載内容など執筆要綱と電子公開などについて平成28年度同様とする。
平成30年度に文科省による再課程認定実施の関係により紀要発行を例年より早める。投稿の締め切りを年内予定とする。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 運営委員会および教授会において、授業関係で図書館での学びも取り入れてもらうようお願いする。
・ 学内の電子掲示板で、月ごとに図書館からのお知らせや、新刊案内を掲載し利用者数増加の成果をねらう。
2. 教員へはメールにて投稿を呼びかけ、5月頃に教授会等で周知し、10月頃投稿を希望する教員を調査し、12月頃に業者へ見積もりを依頼する。
・ 12月の中旬頃に投稿1回目を締め切り、3月初旬に完成予定。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

図書選書は前期・後期それぞれ予算内でできた。学生が参考文献を選ぶ際の参考になったと思われ、積極的に選書への関わりを希望する学生もおり、結果図書入館者数増に至った。

選書数前期学生98冊 後期101冊 合計 199冊 教職員選書合計79冊

学生利用者は平成28年度の学生数364人 入館者数6,538人

平成29年（2月末）学生数384人 入館者数8,443人

4月に入館者数が確定する。

2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

投稿締め切りが早まったにも関わらず締め切りも守られ、1月末日の発行が実現できたことは、教職員協力があったことによる。本年は27件の投稿で、前年度比+7件であった。

投稿数が増加したことで予算をオーバーしたが、一過性のものと思われる。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 入館者数と在籍者数との比較で、本当に入館者数が減っているのか把握し、減じる原因を探る。
2. 投稿の呼びかけと、執筆に注意・喚起を促す。執筆要綱、電子公開については本年同様とする。

平成29年度 紀要・図書委員会 年次報告

Plan 計画

1. 利用者増のため授業との関係を深化させる。
教職員へ協力を依頼する。
 - ・ 図書選定は学生、教職員共に前・後期で実施。
2. 紀要について、掲載内容など執筆要綱と電子公開などについて平成28年度同様とする。
 - ・ 平成30年度に文科省による再課程認定実施の関係により紀要発行を例年より早める。
投稿の締め切りを年内予定とする。

Do 実行

1. 運営委員会および教授会において、授業関係で図書館での学びも取り入れてもらうようお願いする。
 - ・ 学内の電子掲示板で、月ごとに図書館からのお知らせや、新刊案内を掲載し利用者数増加の成果をねらう。
2. 教員へはメールにて投稿を呼びかけ、5月頃に教授会等で周知し、10月頃投稿を希望する教員を調査。
 - ・ 12月頃に業者へ見積もりを依頼する。
 - ・ 12月の中旬頃に投稿1回目を締め切り、3月初旬に完成予定。

Act 改善

1. 入館者数と在籍者数との比較で、本当に入館者数が減っているのか把握し、減じる原因を探る。
2. 投稿の呼びかけと、執筆に注意・喚起を促す。
執筆要綱、電子公開については本年同様とする。

Check 検証

1. 図書選書は前期・後期それぞれ予算内でできた。
学生が参考文献を選ぶ際の参考にはなったと思われ、積極的に選書への関わりを希望する学生もおり、結果図書入館者数増に至った。
 - ・ 選書数前期学生98冊 後期101冊 合計 199冊
教職員選書合計79冊
 - ・ 学生利用者は平成28年度の学生数364人 入館者数6,538人
平成29年（2月末）学生数384人 入館者数8,443人
 - ・ 4月に正確な入館者数が確定する。
2. 投稿締め切りが早まったにも関わらず締め切りも守られ、1月末日の発行実現は、教職員協力があつたことによる。
 - ・ 本年は27件の投稿で、前年度比+7件であった。

平成29年度 「教務委員会」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：山口 ゆかり（委員長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学務システムを活用した学修支援の推進

- (1) Web履修登録を実施し、問題点を改善する。
- (2) データ入力（出欠、成績、学修成果）の周知徹底を図る。
- (3) GPA1.2未満の学生に対する学修指導について、進め方を検討する。

2. 授業力の更なる向上と改善

- (1) シラバスの作成要領に記入例を追加するとともに、スケジュールに沿った業務の進行を心がける。
- (2) 相互授業参観について、早めの周知と教員の意識改革を目指す。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. (1) 1, 2年生とも、今年度前期より学科・コース別にWeb履修登録を実施した。また、発生したシステム上の不具合は、その都度業者に改善を依頼した。
 (2) 教務課より、スタッフメール（常勤教員）または文書（非常勤教員）にて、入力の依頼を行った。
 (3) GPA算出日を設定し、学修指導の進め方や学修指導報告書の様式を検討した。
2. (1) シラバスの作成要領と様式を見直し、平成30年度版を作成した。
 (2) FD研修会と教務委員会において、相互授業参観のあり方を検討した。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに口（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

- (1) 前期は、ビジネス・医療秘書コース1年生の登録からスタート（4月4日、オリエンテーション）し、第1回教務委員会（4月18日）までには、全クラスの登録が完了した（始業から約2週間で完了）。後期は、空き時間に各自で確認・登録を行い、システムの不具合もなく登録期間内に終わることができた。また、今年度のWeb登録では、登録科目と受講科目に相違が生じた事例が1件あったが、受験資格、成績とも問題はなく、単位が認められた。次年度の履修指導では、学生に登録完了後の履修届を出力させ、確認の徹底を図りたい。なお、4月末の運営委員会に提案した新入生オリエンテーション（全体会）における教務に関わる事項の説明（教務課担当）は、次年度の計画に入っておらず、学科・コース別のガイダンス、教務による掲示等で行うこととした。
- (2) 出欠の入力については、従来の出席簿を併用しているためか、一部徹底できなかった。担当教員が責任を持って入力することはもちろん、教務課による最終的な確認も必要であると思われた。
 成績の入力については、一部期限を守ることができなかった。
 学修成果については、幼稚園教諭2種免許状取得に関わる科目を除き6項目を5段階で評価しているが、評価基準が定まっておらず、FD研修会（8月29日）において評価しづらいとの意見があがった。次年度以降は、自己点検評価室等が作成した成績基準に基づき評価する運びとなった。学科・コースごとに掲げた到達目標をもとに、科目独自のルーブリックを作成し、評価していくことも必要であるとする。
- (3) 第3回（6月）教授会において提案し、承認を受けた。該当学生に対する学修指導は実施できたが、報告書の提出がなされていない事例があった。また、今年度より実施したGPAを用いた進級・卒業判定については、基準に達しない学生はいなかった。しかし、学力の二極化に伴い、次年度以降、基準に達しない学生の存在が予想されるため、規程の整備が必要となる。まずは、学科・コース別に単位認定や学修指導のあり方を見直すことから始めたい。
- (4) 次年度の学修指導に役立てるため、College Life 2017の一部見直し（pp. 21～24：履修科目の履修について）を行い、第7回（11月）教授会において承認を受けた。

2. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

- (1) 第6回(10月)教授会において提案し、承認を受けた。今年度は、幼児教育学科の再課程認定申請に向けた準備、教務課業務(教科書購入)の関係から、原稿締切を昨年度より9日間早めた。次年度以降も1月末を締切とし、2月中には第三者チェックを終わらせたい。次年度への申し送り事項として、①カリキュラムは、原則としてシラバス作成を依頼する12月までに確定し(授業科目表、カリキュラム・フローチャートの作成、科目コードの設定含む)、教務課が学務システムのシラバス一覧を整えておくこと、②原稿締切後の作業は、科目名や担当者が確定していない科目を除き、スケジュールに準じて進めることの2点を確認した。
- (2) 年度当初は実施する方向で考えていたが、第2回教務委員会とFD研修会(8月29日)での討議結果を踏まえ、第5回教務委員会において、今年度の実施を見送ることとした。理由として、①スケジュールの調整が難しい、②現状の進め方では積極的な参加が見込めないの2点を確認した。
- (3) 学生による授業評価アンケートのあり方を見直し、実施要領を作成した。次年度は原則として、全科目を対象に、Web形式で最終授業時間中に実施(15分程度)することとした。これについては、第6回(10月)教授会で承認を受けたが、その後評価基準等に変更が生じ、一部書き換えを行った。無線LANの環境を整えば、予定どおり実施できる。また、学務システムに授業評価報告書を組み込むことも必要となる。

ACT(改善): 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 引き続き、データ入力(出席状況、成績、学修成果)の周知徹底を図る。
2. GPA制度の活用について、規程を整備する(進級・卒業判定基準に達しない学生が生じた場合の対策)。
3. 学生による授業評価アンケートをWeb形式で実施し、問題点を改善する。

平成29年度 教務委員会 年次報告

Plan 計画

1. 学務システムを活用した学修支援の推進

- (1) Web履修登録を実施し、問題点を改善する。
- (2) データ入力(出欠、成績、学修成果)の周知徹底を図る。
- (3) GPA1.2未満の学生に対する学修指導について、進め方を検討する。

2. 授業力の更なる向上と改善

- (1) シラバスの作成要領に記入例を追加するとともに、スケジュールに沿った業務の進行を心がける。
- (2) 相互授業参観について、早めの周知と教員の意識改革を目指す。

Do 実行

1. (1) 1,2年生とも今年度前期よりWeb履修登録を実施し、発生した問題点は、その都度改善を依頼した。
(2) 教務課が、スタッフメールと文書で依頼を行った。
(3) GPA算出日を設定し、学修指導の進め方と学修指導報告書の様式を検討した。
2. (1) シラバスの作成要領と様式を見直した(平成30年度版)。
(2) FD研修会の討議結果を基に、相互授業参観のあり方を検討した。

Act 改善

1. データ入力の周知徹底
(早めの対応と期限厳守)
2. GPA制度の活用に関する規程の整備
(進級・卒業要件に満たない学生への対応)
3. Web形式による学生授業評価アンケートの実施と学務システムを用いた授業評価報告書の作成

Check 検証

1. (1) 前期は登録に約2週間を要したが、後期は始業から1週間以内に完了した。
 - ・登録単位と受講科目の相違:1件
 - ・H30年以降、登録後の履修届を出力、携帯させる(2) 一部の教員に入力遅れや期限遅れがあった。
 - ・学修成果6項目の5段階評価は、H30年以降、自己点検評価室等が作成した成績基準に基づき評価する(3) 第3回(6月)教授会で承認
 - ・学修指導は実施できたが、一部報告書が未提出
 - ・H29年度、進級・卒業要件に達していない学生:0名
 - ・基準に達しない学生への対応について検討が必要(4) カレッジライフの一部見直し【第7回(11月)教授会で承認】
2. (1) 第6回(10月)教授会で承認
 - ・作成スケジュールに遅れが生じた(理由:カリキュラム確定時期、人事異動、学務システム上の問題等)(2) 平成29年度の実施は見送った(理由:業務多忙、進め方に課題あり)
- (3) 平成30年度・学生授業評価アンケート実施要領の作成【第6回(10月)教授会で承認、その後一部書き換えあり】

平成29年度 「学生委員会」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：古賀 克彦（委員長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 【学生生活の支援】学生生活全般並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し支援活動を行なう
2. 【地域との関係】社会の一員として地域に貢献し、地域に愛される短大を目指す
3. 【学友自治会運営】学友自治会役員から各担当学生委員への報告・連絡・相談を徹底させる。また学友自治会への適切な教育・指導を行い学友自治会円滑な運営を支援する。
4. 【学生委員会運営】学生委員間のコミュニケーションも緊密にし、効率的な活動ができるように協力体制を確立する。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 各行事担当に分かれて学生の主体性を尊重し支援活動を行った。支援・指導は一方的にこちらの考えを押し付けるのではなく、学生の考えや希望を聞き取り話し合いを行い、どのようにしたら問題点が解決し行事が円滑に進行するか学生に考えさせながら行った。
2. バスマナー向上を目指しクラス会や各行事等で学生が集まった際にバスマナー向上について呼びかけたり、バスマナー向上に関するポスターを作成し呼びかけを繰り返し行ったりした。
3. 学友自治会役員から各担当委員への報告・連絡・相談については、年度当初に指導を行った結果、ほぼ全ての役員において円滑に行われた。最後まで学生間や教員とのコミュニケーションが苦手な学生も存在したが、学友自治会役員間で話し合い、積極的なフォローを行うことにより、学友自治会運営は円滑に行われたと思われる。
4. 定期的に学生委員会を開催し各行事の進行状況や総括を行い、教員間での情報共有に努めた。また学生委員会以外にも毎週開催されるアssenブリの時間に教員も集まり、各学友自治会行事運営について情報共有や問題点解決を行った。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・・B・C・D 」
今年度は学友自治会役員内や自治会役員と教員間でのコミュニケーションや報告・連絡・相談は円滑に行われ、また学生の自主性を尊重した学友自治会運営が行われたと思われる。これは松尾学友自治会会長のリーダーシップと学生課の栗原緑職員による学生・教職員間各種折衝や調整によるものが大きい。
2. 自己評価「 S・A・B・・D 」
バスマナーに関してはことあるごとに指導を行ったにもかかわらず、バスマナーが悪いとの指摘を外部の方からいただいた。
3. 自己評価「 S・・B・C・D 」
今年度は学友自治会役員と学生委員会教員とのコミュニケーションは円滑に行われ、学友自治会運営も問題なく行われたと思われる。来年度も今年度と同様に運営できるように指導や引継ぎ等をしっかり行ってほしい。
4. 自己評価「 S・・B・C・D 」
学生委員会やアssenブリの時間を活用し連携はうまくできていると思われる。来年度も引き続き学生委員会教職員の連携を密にしていきたい

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 今年度、学友自治会活動が円滑に進行できた点を総括し、来年の学友自治会活動に反映させる。
2. バスマナー向上の方策を学生委員会、学友自治会で考え、全学的な取り組みとして実行する。
3. 今年度の総括を踏まえた引継ぎや指導を行う。
4. 定期的な学生員会の開催とアssenブリの時間の活用

平成29年度 学生委員会 年次報告

Plan 計画

1. 【学生生活の支援】 学生生活全般並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し支援活動を行なう
2. 【地域との関係】 社会の一員として地域に貢献し、地域に愛される短大を目指す
3. 【学友自治会運営】 学友自治会役員から各担当学生委員への報告・連絡・相談を徹底させる。また学友自治会への適切な教育・指導を行い学友自治会の円滑な運営を支援する。
4. 【学生委員会運営】 学生委員間のコミュニケーションも緊密にし、効率的な活動ができるように協力体制を確立する。

Do 実行

1. 各行事担当に分かれて学生の主体性を尊重し支援活動を実施。支援は学生の考えや希望を聞き取り話し合いを行い、学生に考えさせながら実施。
2. バスマナー向上を目指しクラス会や各行事等で学生が集まった際にバスマナー向上について呼びかけたり、バスマナー向上に関するポスターを作成し呼びかけを繰り返し行ったりした。
3. 学友自治会役員から各担当委員への報告・連絡・相談については、年度当初に指導を実施
4. 定期的に学生委員会を開催したりアssenブリの際に各行事の進行状況確認や総括を行い情報共有に努めた。

Act 改善

1. 今年度、学友自治会活動が円滑に進行できた点を総括し、来年の学友自治会活動に反映させる。
2. バスマナー向上の方策を学生委員会、学友自治会で考え、全学的な取り組みとして実行する。
3. 今年度の総括を踏まえた引継ぎや指導を行う。
4. 定期的な学生員会の開催とアssenブリの時間の活用

Check 検証

1. 今年度は学友自治会役員内や自治会役員と教員間でのコミュニケーションや報告・連絡・相談は円滑に行われ、また学生の自主性を尊重した学友自治会運営が行われた。
2. バスマナーに関しては指導を行ったにもかかわらず、バスマナーが悪いとの指摘を外部の方からいただいた。
3. 最後まで学生間や教員とのコミュニケーションが苦手な学生も存在したが、学友自治会役員間で話し合い、積極的なフォローを行うことにより、学友自治会運営は円滑に行われたと思われる。
4. 学生委員会やアssenブリの時間を活用し連携はうまくできていると思われる。

平成29年度 「学生相談室」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：福井 謙一郎（室長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学生への支援体制充実のため、学生相談室としての広報を徹底する。
2. 教職員へのストレスチェックを行う。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. オリエンテーションにおける広報活動ならびに教職員へのリファーマを促した。
2. 今年度はストレスチェックが実施できなかったが、教職員への面談ならびにストレスケアに取り組んだ。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・A・**□B**・C・D 」
既存の広報はできたものの、チラシ作成やガイダンスにおける周知などが徹底できなかった。
2. 自己評価「 S・A・**□B**・C・D 」
ストレスチェックを行う時間を設けることができなかったが、一部教職員の面談が実施できた。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. チラシ作成やガイダンスにおける周知を徹底する。
2. H30年度は教職員へのストレスチェックを実施する。

平成29年度 学生相談室 年次報告

1. 学生への支援体制充実のため、学生相談室としての広報を徹底する。

2. 教職員へのストレスチェックを行う。

1. オリエンテーションにおける広報活動ならびに教職員へのリファーを促した。

2. 今年度はストレスチェックが実施できなかったが、教職員への面談ならびにストレスケアに取り組んだ。

1. チラシ作成やガイダンスにおける周知を徹底する。

2. H30年度は教職員へのストレスチェックを実施する。

1. 既存の広報はできたものの、チラシ作成やガイダンスにおける周知などが徹底できなかった。

2. ストレスチェックを行う時間を設けることができなかったが、一部教職員の面談が実施できた。

平成29年度 「食品加工研究センター」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：橋口 亮（センター長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 食品加工センターと組織との関係を検討する。
2. 卒業研究において学生と共に加工食品の研究を行う。
3. 学内の行事において加工食品を提供する機会を設ける。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 本学における食品加工センターの役割を検討する。
2. 卒業研究のテーマを加工食品の製造に絞り、長崎県の食材を用いた研究を行う。
3. オープンキャンパス、教育懇談会などの機会に加工食品を提供する。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに口（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・B・C・D」

食品加工センターのセンター長を引き受けたものの、組織の位置づけが理解出来ないまま2年目を終えた。

2. 自己評価「S・A・B・C・D」

卒業研究では、長崎県産の食材を用いた加工食品の研究をテーマとし、野菜を原料とした実験や実習を行った。残念ながら、このテーマを掘り下げて取り組む意識の差があり、あまり進んでいない。卒業研究に対する意識の差は大きいようだ。

3. 自己評価「S・A・B・C・D」

オープンキャンパス、教育懇談会に本学で製造した加工食品を提供できた。今後も可能であると考えている。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 今後も継続していくには、全学的な組織運営の観点から設置の目的と位置づけを明確にしなければならない。
2. 卒業研究のテーマとして取り組む以外に時間的、人的な余裕はない。学生の取り組む意識によるところが大きく成果につながりにくい。興味を持ち、学びの意識のある学生に期待したい。
3. 本学で製造した加工食品を提供することは、今後も可能である。

平成29年度 食品加工研究センター 年次報告

Plan 計画

1. 食品加工センターが、本学に対し何ができるかを考える
2. 卒業研究において加工食品の研究を行う
3. 学内の行事などで加工食品を提供する場を設ける

Do 実行

1. 本学における食品加工センターの役割を考える
2. 卒業研究において長崎県産の農産物を用いた加工食品の研究を行う
3. 教育懇談会、オープンキャンパスなど行事において加工食品を提供する。

Act 改善

1. 食品加工センター設置の目的と位置づけを明らかにしたい
2. 学生と共に取組む際は、意識の差を意識しながら実践する
3. 引き続き、行事などで本学で製造した加工食品を提供する

Check 検証

1. 食品加工センターの位置づけが不明である
2. 卒業研究で学生と共に加工食品に関する実験、実習を実施したが、意識のズレにより中途半端な取組となった
3. 本学で製造した加工食品は、行事などで提供できた

平成29年度 「地域連携推進センター」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：長尾 久美子（センター長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 組織改正に伴うセンターの在り方を検討する。
2. 各学科・コースにおける地域連携の活動の推進を図る。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 組織改正に伴うセンターの在り方を検討する。
 - ①地域連携推進センター規定を見直した。
 - ②生涯学習推進室の公開講座について、集客増及び運営経費の適正化を図るため、実施要項の制定及び経費に関する内規を改正し、H30.4.1 から適用するように見直した。
2. 各学科・コースにおける地域連携の活動の推進を図る。
 - ①各学科・コースでそれぞれの特色を生かした地域連携活動が行われた。
 - ②公開講座は各学科コースで分担し、年間16講座開催された。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・B・**□**・D」
規定は見直したが、会議の開催なく、センターとしての活動は行われなかった。
2. 自己評価「S・A・**□**・C・D」
 - ①公開講座は、各学科コースが特色を生かした活動を行ったが、参加者が少ない講座が散見された。また、開催中止の講座もあった。講座内容の工夫やターゲットを絞った呼びかけなど、講座内容や集客方法の改善が必要である。
 - ②各学科・コースにおいては、授業などの一環として、学生による地域活動の取り組みも行われた。
 - ③タイプ5（プラットフォーム形成）への参加など、学内全体としての取組があり、次年度の地域活動につながる成果があった。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 公開講座については、地域のニーズを把握し、講座内容や広報の改善を図り、参加者増につなげる。
2. 各学科・コースの特色を生かした地域連携活動やプラットフォーム事業における地域活動が円滑に実施されるよう学内全体としての取り組みを推進する。

平成29年度 地域連携推進センター 年次報告

Plan 計画

1. 組織改正に伴うセンターの在り方を検討する。
2. 各学科・コースにおける地域連携の活動の推進を図る。

Do 実行

1. ① 地域連携推進センター規定を見直した。
② 生涯学習推進室の公開講座について、集客増及び運営経費の適正化を図るため、実施要項の制定及び経費に関する内規を改正し、H30.4.1から適用するよう見直した。
2. ① 各学科・コースで特色を生かした地域連携活動が行われた。
② 公開講座は各学科コースで分担し、年間16講座開催された。

Act 改善

1. 公開講座については、地域のニーズを把握し、講座内容や広報の改善を図り、参加者増につなげる。
2. 各学科・コースの特色を生かした地域連携活動やプラットフォーム事業における地域活動が円滑に実施されるよう学内全体としての取り組みを推進する。

Check 検証

1. 規定は見直したが、会議の開催なく、センターとしての活動は行われなかった。
2. ① 公開講座は、各学科コースが特色を生かした活動を行ったが、参加者が少ない講座が散見された。また、開催中止の講座もあった。講座内容の工夫や広報などの改善が必要である。
② 各学科・コースにおいては、授業などの一環として、学生による地域活動の取り組みも行われた。
③ タイプ5（プラットフォーム形成）への参加など、学内全体としての取組があり、次年度の地域活動につながる成果があった。

平成29年度 「地域子育て支援センター」年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：本村 弥寿子（室長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 地域連携推進室との連携を密に取り、子育て支援に関する情報を地域に多く提供する。
2. 他学科・コースとの連携を取りながら、多面的に地域の子育て家庭への支援に努める。
3. 南島原市における「親育ち講座」の充実を図る。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 公開講座として子育て支援に関わる内容の講座を長崎幼稚園で2度行った。
2. 食育や子どものマナーについての講座を栄養士コースや医療事務・ビジネスコースの教員と開講する計画を立てる予定だった。
3. 親子の愛着形成や子どもへの関わり方について10回の講座を行った。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに口（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S ・ **A** ・ B ・ C ・ D 」

初めて試みた長崎幼稚園での講座は、1回目が6組であったが2回目は20組の参加があり、大変盛り上がった。長崎幼稚園の職員が地域への声かけを熱心に行ったことが、参加者数が増えた要因であると考えられる。また、子育て支援を独自で行っている「かたり音」と共に行ったことで、参加者が興味を持ちやすい講座になったとも考えられる。

2. 自己評価「 S ・ A ・ B ・ **C** ・ D 」

開講する長崎幼稚園とのスケジュール合わせや活動場所の確保ができず実現には至らなかった。また、長崎幼稚園での参加者の要望がつかめず、手を広げきれなかった。

3. 自己評価「 **S** ・ A ・ B ・ C ・ D 」

毎回約30名の受講者であった。今年度で3年目となり、講座が地域に知られるようになったことがうかがえた。今年度は特に、夫婦で受講する人が目についた。母親ばかりではなく父親も子育てに関心をもっている人が増えていることを感じた。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 今年度の取り組みで長崎幼稚園と良いつながりができた。講座内容をより練り直し、参加親子が仲間を誘って何度も足を運びたいよう努力したい。
2. 講座内容に幅を持たせられるよう、参加者の要望を探り、幼児教育学科以外の学科・コースと共に行う講座を考え、実行に移したい。
3. 講座内容は、毎回好評である。受講者がより理解しやすい事例や実技等を取り入れていくようにしたい。

平成29年度 地域子育て支援センター 年次報告

Plan 計画

- 1 地域連携推進室との連携を密に取り、子育て支援に関する情報を地域に多く提供する。
- 2 他学科・コースとの連携を取りながら、多面的に地域の子育て家庭への支援に努める。
- 3 南島原市における「親育ち講座」の充実を図る。

Do 実行

- 1 公開講座として、子育て支援に関わる内容の講座を長崎幼稚園で2度行った。
- 2 食育や子どものマナーについての講座を、栄養士コースや医療事務・ビジネス秘書コースの教員と開講する計画を立てる予定だった。
- 3 親子の愛着形成や子どもの関わり方について10回の講座を行った。

Act 改善

- 1 今年度の取り組みで長崎幼稚園との良いつながりができた。講座内容をより練り直し、参加親子が仲間を誘って何度も足を運びたいよう努力したい。
- 2 講座内容に幅を持たせられるよう、参加者の要望を探り、幼児教育学科以外の学科・コースと共に行う講座を考え、実行に移したい。
- 3 毎回約30名の受講者であった。今年度で3年目となり、講座が地域に知られるようになったことがうかがえた。今年度は特に、夫婦で受講する人が目についた。母親ばかりではなく父親も子育てに関心をもっている人が増えていると感じた。

Check 検証

- 1 初めて試みた長崎幼稚園での講座は、1回目が6組であったが2回目は20組の参加があり、大変盛り上がった。長崎幼稚園の職員が地域への声かけを熱心に行ったことが、参加者数が増えた要因であると考えられる。また、子育て支援活動を独自に行っている「かたり音」と共に行ったことで、参加者が興味を持ちやすい講座になったとも考えられる。
- 2 開講する長崎幼稚園とのスケジュール合わせや活動場所の確保ができず、実現には至らなかった。また、長崎幼稚園での参加者の要望がつかめず、手を広げきれなかった。
- 3 講座内容は、毎回好評である。受講者がより理解しやすい事例や実技等を取り入れていくようにしたい。

平成29年度 「寮務委員会」年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：植木 明子（委員長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 寮生がルールに沿って安全に気持ちよく過ごせるようにし、対応が必要な学生へも個別に支援する。
2. 短大と高校が情報を共有し、寮運営をサポートする。
3. 火災発生時の避難マニュアル・地震避難マニュアル・不審者対策マニュアルの充実

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. ①個別の学生指導の実施・・・S学生、寮生活がなじめない。点呼掃除に出ない。Y学生持病のための点呼に出ない、その他、寮生同士のトラブル、2年生が飲酒 ②寮役員会議を月に1回開催し、役員への助言をおこなった。計6回 ③前年度、要望に上がっていたアルバイト生の食事時間の見直しを行い、アルバイト生を限定として時間を早めるなど配慮を行った。 ④寮生集会の実施・・・計7回 ⑤規則違反者と飲酒・喫煙に関する細かな規則を平成30年度の若竹寮細則に追加した。 ⑥春の新生生の歓迎行事、冬の新年会など学生による行事を行う事においては、安全面の確保の助言や、施設の使用におけるサポートを行った。
2. ①高校生増加に伴い、洗濯機の使い方について再検討し、高校生と短大生のトラブルを防止した。②高校生の欠席や緊急時の連絡についての連絡先の確認を行った。 ③避難訓練実施に当たっては、日程調整をして実施した。 ④個別対応が必要な高校生への対応を協議した。短大生で起こった問題を報告し、寮生の抱える課題を入寮前に把握する方法の重要性を確認した。そのためには高校へ情報提供を依頼するとともに、他大学の障害学生への合理的配慮の資料を参考にして寮生カードを見直した。 ⑤食事や施設設備についての問題点を共有した。食事のアンケートをとり本部に提出した。入学者が増えることで必要な設備箇所を確認した。
3. 学生に不審者対策マニュアルの中の防犯時に鳴る非常ベルの音を実際に聞いてもらい、防犯ベルと火災報知機の違いを確認してもらった。今後も引き続き、年度初めの訓練時に音の確認をしていく必要がある。さらに防犯講座を開き、今年度は一人暮らしの一般学生にも呼びかけ1名受講してもらった。学生への動機付けにはなった。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

1. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

①ルール違反においてはなかなか徹底できなかった一年であった。個人の抱える問題もあり、問題解決のため、学生相談室にも入ってもらい、結果的には退寮となった。また、別のケースにおいてはもっと早期に厳しい判断（退寮）をし、本人・保護者と話し合う必要もあったかもしれない。来年度から障害を持った学生に対しては合理的配慮を考えていくことが強化され障害学生支援委員会も設置される予定である。今後、配慮の必要なことも増えていくことも予想されるが、委員会間での連携を図り、寮職員の業務に支障をきたすような状況にならないよう、集団生活の秩序を守れるよう寮務委員会も機能していくことが必要である。そのためには、各コースから寮務委員が選出され、コースとの連携を図る必要がある。②集団での飲酒の違反をしたり、引継ぎ後2年生がルールを守らないなど学生のリーダーシップやモラルも低下してきていると感じる。次年度は引継ぎ時期を11月から1月にしたことが功をなすとよいが、引き続き役員会議の指導は必要である。但し、教員の夜間の会議出席には負担があるため、助言の形を変えることも検討してよいと思われる。寮長・副寮長のリーダーシップ研修会参加も一案になる。

2. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

高校の先生方がは行った会議により、寮生の問題行動に対して、お互いの対策を考える機会になっている。その一例として、寮生カードの見直しができた。また、食事のことや施設設備の整備については課題を挙げた。今後は、入寮者数もさらに増加するため、それに伴う施設設備の不足（特に洗濯機）も考えられる。具体的に計画が進められるよう寮務委員会としても学校にお願いしたい。

3. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

ある程度、マニュアルは整備された。火災に対しては、避難訓練時にあがったドアノブカバーの交換をする必要がある。昨年より避難訓練が1回しかできていないため、次年度より短大全体でおこなう避難訓練においても寮生も積極的に参加するよう、強化していきたい。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 寮生がルールに沿って安全に気持ちよく過ごせる。
2. 個別に対応が必要な学生へ支援ができる。
3. 短大と高校が情報を共有し、寮運営をサポートする（寮生指導・施設整備）

平成29年度 寮務委員会 年次報告

Plan 計画

1. 寮生がルールに沿って安全に気持ちよく過ごせるようにし、対応が必要な学生へも個別に支援する。
2. 短大と高校が情報を共有し、寮運営をサポートする。
3. 火災発生時の避難マニュアル・地震避難マニュアル・不審者対策マニュアルの充実

Do 実施

1. ①個別の学生指導の実施。②寮役員会議を月1回開催、寮生集会の実施・・・計7回 ③アルバイト生を限定として夕食時間を早めるなど配慮④規則違反者と飲酒・喫煙に関しての若竹寮細則に追加
2. ①高校生増加に伴い、高校生と短大生のトラブルの防止した。②高校生の欠席や緊急時の連絡についての連絡先の確認③個別対応が必要な寮生への対応を協議した。短大生で起こった問題の共有④食事や施設設備についての問題点の共有
3. 不審者対策マニュアルのベル音の確認、防犯講座実施

Act 改善

1. 寮生がルールに沿って安全に気持ちよく過ごせる。
2. 委員会・コースとも連携し、個別に対応が必要な学生へ支援ができる。
3. 短大と高校が情報を共有し、寮運営をサポートする（寮生指導・施設整備）

Check 検証

1. ①集団生活になじめない学生、ルールが守れない学生、持病がある学生など個別に関わる問題が多かった。②集団での飲酒の違反をしたり、引継ぎ後2年生がルールを守らないなど学生のリーダーシップやモラルも低下してきている。次年度は引継ぎ時期を11月から1月に変更した。2. 高校との連携した会議により、寮生の問題行動に対して、お互いの対策を考える機会になった。3. 不審者対策におけるマニュアルが整備できた。

平成29年度 「事務局」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ **事務局等** ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：三藤 英文（事務局長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 教務システムの構築
2. 施設設備の充実
3. 個々の事務習得とレベル向上

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. システム開発企業との連携を強化して、常に情報交換を行いながら年度末までに構築できるよう遂行する。
2. 年度の当初に、設備の状況を把握し計画的に見直しを進めて行く。
3. FD, SD研修の計画的な実施を図る。事務職個々の知識習得と一人二役体制作り。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・A・B・**□**C・D 」
システム開発先のノウハウが乏しく、開発が後手になり計画通りに進んでいない。今後は、学校側サイド主導で対応する必要がある。
2. 自己評価「 **□**S・A・B・C・D 」
執行計画計上分については、計画通りに実行が図れた。
・ 校舎雨漏り工事、若竹寮冷蔵庫と空調機の更新
・ タイプ1ならびにタイプ5に選定され教室の整備を行うことができた。
3. 自己評価「 S・A・B・**□**C・D 」
危機管理マニュアル個々についての細かな研修未実施の課題を解決することができなかった。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 早急なシステム構築に向けた方向性の再検討を行う。
2. 計画通りに執行できた。
3. 事務職員のレベル向上が緊急の課題からSD研修会の強化ならびに一人二役体制の構築を目指す。

平成29年度 事務局 年次報告

Plan 計画

1. 教務システムの構築
2. 施設設備の充実
3. 危機管理マニュアルを踏まえた研修の実施

Do 実行

1. システム開発企業との連携を強化して、常に情報交換を行いながら年度末までに構築できるよう遂行する。
2. 年度の当初に設備の状況を把握し計画的に見直しを進めていく。
3. F D、S D研修の計画的な実施を図る。事務職個々の知識習得と一人二役体制づくり。

Act 改善

1. 早急なシステム構築に向けた方向性の再検討を行う。
2. 計画通りに執行できた。
今後は、老朽化の設備を見直しを行い執行を進めていきたい。
3. 事務職員のレベル向上が緊急の課題からS D研修会の強化並びに一人二役体制の構築を行う必要がある。

Check 検証

1. システム開発先のノウハウが乏しく、開発が後手になり計画通りに進んでいない。今後は、学校側サイド主導で対応する必要がある。
2. 執行計画計上分については、計画通りに実行が図れた。
 - ・ 校舎雨漏り工事、若竹寮冷蔵庫と空調機の更新
 - ・ タイプ1ならびにタイプ5に選定され教室の整備を行うことができた。
3. 危機管理マニュアル個々についての細かな研修未実施の解決することができなかった。

**平成29年度
「個人別報告書」**

平成29年度 「玉島 健二」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名：大学運営

職名：学長

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 平成29年度学長運営方針における4項目（努力目標）の実現
特に、入試委員会及び運営委員会における協議を通じて、上記努力目標の実現を図る。
2. 「現代社会と女性」の授業を通して、初年次教育を実践する。また、「生涯学習論」の授業を通して、学生の社会人基礎力を養う。
3. 学生募集につながる業務等に積極的にに関わり、平成30年度入学生200名を目指す。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 4項目の努力目標の実現
運営委員会及び入試委員会における協議の徹底、教授会における情報共有により、努力目標の実現を図る。
2. 「現代社会と女性」においては、学科・コースの担当者との協議、共通理解を図りながら、初年次教育の充実を図る。「生涯学習論」においては、長崎新聞社の協力による「新聞を活用した取組」を実施する。
3. 高校生に対する進路ガイダンス、オープンキャンパス等に積極的かつ先導的に取り組む。

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□**B・C・D」
雨漏り対策、シロアリ対策等の施設改修、私立大学等改革総合支援事業（タイプ1・タイプ5）に採択され、教室等の環境整備など目に見える形で実現できた項目もあるが、学生募集についてはかなり苦戦した。
2. 自己評価「S・A・**□**B・C・D」
「現代社会と女性」における初年次教育（基礎学力の把握）及び「生涯学習論」における長崎新聞社からの出前講座（3回）は実施できた。社会人基礎力が身についたかどうかは各種調査結果を待つ必要がある。
3. 自己評価「S・A・**□**B・C・D」
進学ガイダンスやオープンキャンパス等には積極的に関わったが、学生募集は定員の81%程度に止まっている。（3月9日現在）

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. ほとんど進展しなかった項目について、再度チェックを行い、原因や理由の把握に努める。
2. 「現代社会と女性」については、すでに30年度のシラバスを作成した。そのシラバスの変更を受けて、「生涯学習論」のシラバスも作成を完了した。
3. 幼児教育学科は定員の120%程度を確保できたのに対し、生活創造学科が約50%に止まってしまっている。生活創造学科のテコ入れを早急に検討する。

平成29年度 「長尾 久美子」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名：介護福祉士コース

職名：教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 国家試験 100%合格のために全力を尽くす。
2. 授業内容をより工夫する。
3. 学生への個別支援をより丁寧に行う。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 国家試験 100%合格のために全力を尽くす。
 - ①2年生は、キャリアアップセミナーで毎回データ分析と学生への戻しなど、正解率アップに努めた。
 - ②夏期講習を実施し、支援した。
2. 授業内容をより工夫する。
 - ①わかりやすい資料による説明やDVDの活用、小テストによる問題解決力の強化に努めた。
 - ②「社会福祉概論」(2S)・「社会福祉」(2Y)の授業の最初に社会に対する意識についての調査を行い、研究し、授業の展開に反映させるよう取り組んだ。
3. 学生への個別支援をより丁寧に行う。
 - ①小テスト結果を個人別に分析し、そのつど、返して、各自の課題を明確に示した。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」
 - ①介護福祉士国家試験結果は3月末に発表のため確実な把握はできないが、学生の自己採点によると合格が不確かな学生もいた。11月末の介護協主催の学力評価試験では全員合格レベルにはあったが、一般学生の点数は低位であった。
 - ②過去問のマンネリ化や、一般学生の基礎的理解が十分できないままであったことや、自主的学習の習慣化ができなかったなど、年間を通じた試験対策の進め方やモチベーションの高めかたに課題があった。
2. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」
 - ①社会福祉・社会保障制度などについて、関心を高めることが十分でなかった。
 - ②講義形式の授業において、アクティブラーニングの進め方に工夫が必要。
3. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」
 - ①個人別の評価をし各人に返すことを行ったが、個別に指導したり、再確認をしたりなどが不十分であった。
 - ②学生の積極的な質問や相談に結びつけることができなかった。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 国家試験対策の改善
 - ①国試に照準を合わせた年間計画と授業展開の工夫を行う。
 - ②学生自身が自ら計画的・継続的に取り組み、段階的に理解力・問題解決力をつけていくように支援する。
2. 学生への個別支援をより丁寧に行う。
 - ①各学生に個別に関わり。それぞれの課題に取り組むよう、継続的に支援する。
 - ②一部の成績低位学生にはよりきめ細かな指導を行う。

平成29年度 「白石 景一」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 長崎女子高校との連携強化について抜本的に考え直し、体験学習との兼ね合いも考慮しながら、女子校応援プランについても、検討する。
2. ピアノ個人レッスンサポート講座（入学前教育）はテキストも含め更に充実を図りたい。また、春休みの課題や、テキストの準備などの周知についても、スムーズに入学後の授業に入っていけるよう配慮したい。
3. 31年度の幼稚園教員養成課程の再課程認定が滞りなく認可されるべく、カリキュラムのスリム化と整備を進めたい。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 本年度も8月23日～25日に長崎女子高応援プランとして、3年生の幼児教育志望者に対して実施した。昨年度から、入試広報室と女子高の進路とで調整して進めて頂いて助かった。
2. サポートレッスンも例年通り実施し、入学前の課題への取り組み方や、入学までのピアノの練習方法などを、個人レッスンを主に実施した。
3. 学長の元、教職課程委員会特に、三藤事務局長、山本委員、との協力体制により31年度からのカリキュラムのスリム化と再課程認定のための、必要なカリキュラム、シラバス、業績書、履歴書、就任承諾書などの準備が整い4月初めに文科省へ提出の運びとなった。

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに口（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**(A)**・B・C・D」

学科としても高大連携は大事な課題であるが多忙が重なり、ピアノのレッスンとなるとどうしても音楽担当で担当することにならざるを得ない。時期的に、免許更新講習、キャリアアップ講座、特例措置講座オ、オープンキャンパスなどでスケジュールが過密な中ではあるが、女子校の進路指導部と本学入試広報室とが連携して上手くセッティングできて良かった。

2. 自己評価「S・**(A)**・B・C・D」

学科として取り組むまことについては、十分とは言えないが、今回初めて「ピアノ個人レッスンサポート講座」第1回目記念ホールでの実施の様子をホームページにアップすることができた。

3. 自己評価「S・**(A)**・B・C・D」

2月の文科省への問い合わせなどのための出張については当初、事務局長、学科長、山本委員3名の予定であったが、学科長は本年度までであるためか、事務局長、山本委員2名での問い合わせとなった。多少心配な面もあるが、事務局長、及び山本委員が綿密に打ち合わせを行っており、認定を受けることは間違いないと確信している。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 「幼児音楽指導法」では新生入生が定員100名のところ、120名と20名も多く入ってくる為、授業の内容及び方法について、更に改善していきたいと考える。
2. 「保育と音楽表現」ではレッスンカルテの記入チェックを心がけ一人ひとりに合った指導を心がけたい。
3. 特別専任になるため効率的な学生対応を心がけたい。

| 平成29年度 「草野 洋介」年次報告書 | |
|--|--------|
| 区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ） | |
| 部署名： 栄養士コース | 職名： 教授 |
| PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。 | |
| <ol style="list-style-type: none"> 1 「長崎食育学の推進」「大量調理技術の取得」の認知度向上に努め学生募集につなげる・栄養士実力試験の成績向上を図るためにより試験を意識した講義と担当教員の連携を図る。 2 担当している理系の知識が必要な科目において講義プリントと講義内容の充実に努める。 3. 卒業研究メンバーの全員の協働と卒業研究内容の深化を図る。 | |
| DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。 | |
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 本コースの特徴としての「長崎食育学の推進」「大量調理技術の取得」の認知度を高校生に浸透することに努める。栄養士実力認定試験に準じた講義を行うとともに、入学時から学生に対し栄養士実力認定試験の意識を高めるよう努める。 2. 栄養士として持つべきスキルを涵養できるよう講義プリントと講義内容の充実に努めた。「健康管理概論」「公衆衛生学」「食品衛生学」「公衆栄養学」「栄養学Ⅰ・Ⅱ」において栄養士の職務において栄養面に加え健康面の重要性を認識できるよう努める。 3. 卒業研究においては全員で協働し長崎県健康・栄養調査をもとに問題点を抽出、改善を図るための健康食の開発を行う。 | |
| CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。 | |
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 自己評価「S・□A・B・C・D」 ガイダンスやオープンキャンパスを通じ長崎食育学の推進「大量調理技術の取得」高校生に浸透することに努めた。栄養士実力認定試験の結果はほぼ昨年並みであった。 2. 自己評価「S・□A・B・C・D」 当科目の授業評価はおおむね良好だったが、栄養士実力認定試験の「公衆衛生学」が平均点を下回っていたが他の科目で改善がみられた。 3. 自己評価「S・□A・B・C・D」 卒業研究生が長崎県健康・栄養調査において若い女性の野菜摂取量が所要量を大きく下回っていることに着目し、野菜補充のための健康食を分担・協働し作成した。栄養士の職務において栄養面に加え健康面の重要性を認識向上はできた。 | |
| ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。 | |
| <ol style="list-style-type: none"> 1 さらなる、「長崎食育学の推進」「大量調理技術の取得」の認知度向上に努め学生募集につなげる・栄養士実力試験の成績向上を図るためにより試験を意識した講義と担当教員の連携を図る。 2. さらなる講義プリントと講義内容の充実に努める。 3. 卒業研究メンバーの協働と内容の深化を図る。 | |

平成29年度 「中澤 伸元」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 年々ピアノはじめ入学時の、音楽の知識レベルが落ちているため、基礎訓練であるコールユーブンゲンを取り入れ基礎知識と実技力を共存させ、一人一人の実技能力を高める。
2. 歌うこと、表現することへの興味、関心度を高める指導に心掛ける。そのため言葉表現、思考、感情についての具体的な実技指導を行い結果を出したい。
3. 演奏に対する実践的指導を行いながら、指導の心構え、姿勢態度、意識イメージ作り、実せん表的表現を他の学生に前で行い実技能力を高める。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 繰り返しの訓練による指導。
2. 自分の存在について自信を持たせる。周波数を高める。繰り返しの授業。
3. 表現することの素晴らしさを感じ取る訓練指導。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「 S・A・**ⓑ**・C・D 」
音楽基礎学習に対するコンプレックスがあるため敬遠してしまう。
2. 自己評価「 S・**Ⓐ**・B・C・D 」
言葉表現、思考、感情の指導において、自己否定という過去の評価データが邪魔をしている。
3. 自己評価「 S・**Ⓐ**・B・C・D 」
人の目が気になり、思い道理の表現ができない。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 繰り返しの訓練しかない。
2. 人数が多いため、いろいろな価値の波動が飛び交うためバランスを取るのが大変で、一人一人に目がいかない。
3. 卒研の人数であれば、信頼関係が生まれ統一指導しやすい。

平成29年度 「松尾 公則」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 教授 特専教授 松尾公則

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 「環境」「ヒトと生物」「栄養士の科学」などの講義は、現場で役立つ内容とし、興味関心を持たせる。
2. 卒研では環境教育ができるような人材の育成を目指す。
3. 中庭庭園の池の管理を行なう。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 毎時間、講義内容に関する資料やプリントを準備し、90分間学生が集中できるような内容とした。特に、ヒトと生物においては、毎時間、本物やDVD・標本など興味関心が深まるものを持参した。
2. 毎時間の卒研時間に自然と触れ合う内容を盛り込み、野外に出でのゼミを多くし、野外に対する恐怖感をなくすようにした。
3. 池内に生息する多くの動物を調べ、学生たちが覗き込みたくなるような状況に保つようにした。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「・A・B・C・D」
学生の関心も高く十分に達成できたと思う。毎時間、まとめとふりかえりの時間を設定したため、試験のためのノート作りや疑問点などの整理ができたようだ。その結果、試験でもすべての学生が合格点を確保できた。
2. 自己評価「S・・B・C・D」
身の回りの自然や多くの動物たちに興味関心を持って接することのできる人材の育成を目指したが、一部の学生は苦手意識を持ったまま卒業してしまった。しかし、程度の差こそあれ1年間の成長は十分に見られたと思う。
3. 自己評価「S・A・B・・D」
水草の繁茂が著しいためなかなか美しい池を維持するには至らなかった。ビニールや紙くずなどの撤去ぐらいしかなかったので、ゼミ生全員での作業も考えていきたい。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 講義内容のしぼり込みを行い、羅列的に何でもかんでも話すのではなく、関連付けた内容としたい。
2. 卒研の時間だけでなく、普段から自然に親しむ態度を養っていきたい。そのためには、卒研の時間だけに研究室を訪れるのではなく、空き時間に研究室を訪問させ、研究室の動物たちと触れ合わせていきたい。
3. 今年度は一人での作業となったので、次年度はゼミ生全員での作業を考えていきたい。

平成29年度 「武藤 玲路」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： ビジネス・医療秘書コース

職名： 准教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 【学修支援について】

担当科目の学生の到達度と満足度が、80%以上「4と5」の評価になることを目標とする。

2. 【進路支援について】

Lの就職率が90%以上になることを目標とする。

3. 【研究活動について】

短期大学のキャリア教育に関して、紀要や学会等で3本以上発表することを目標とする。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 【学修支援について】

アクティブラーニングを目的として、心理学の講義科目では授業の冒頭に前回の授業に関する質問をし、エクセルの演習科目では応用問題や自由課題を与えて、主体性や問題解決能力、学修意欲の育成に努めた。

2. 【進路支援について】

1・2年生合同の就活ピュアサポート活動を年3回実施し、就職未決定者に対する個別指導を強化した。

3. 【研究活動について】

職業・キャリア教育における学修成果の可視化と体系化をテーマとした研究活動を行った。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

学生による授業評価アンケートの結果は、全体的に5段階評価の4前後であり、満足度は高い方ではあるが、アクティブラーニングによる、深い学び、対話的な学び、主体的な学びの修得は、十分であるとは言えない。

2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

卒業生26名中1名だけが未就職で、残り25名は全員正社員として内定し、95%以上の高い就職率を収めた。

3. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

研究の本数は4本で妥当であると言えるが、研究のレベルが研究報告やノートであり、学術性に欠けている。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 【学修支援について】

今後は、アクティブラーニングの教授法や学修成果のフィードバックの手法を用いた授業を展開したい。

2. 【進路支援について】

今後は、就職状況の量的な面に留まらず、質的な面でも学生の満足度が高まるように支援していきたい。

3. 【研究活動について】

今後は、職業・キャリア教育に関する先行研究や多次元の統計処理を踏まえた学術論文を執筆していきたい。

平成29年度 「島田 幸一郎」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 准教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 児童福祉に関する時事問題の積極的活用を図り、アクティブ・ラーニングを推進して授業の充実に努める。
2. 保育実習指導Ⅰ、保育実習指導Ⅲの内容を検証して実習の改善と充実に努めるとともに、保育者としての資質向上に繋げる。
3. 幼稚園における統合保育・教育の現況を研究し、「合理的配慮」を主眼にしたインクルーシブ保育・教育の道筋を探る。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 授業内容に関する視聴覚教材を活用するとともに、新聞記事やテレビ放映の内容を積極的に紹介する。その内容についてのグループ学習や発表に取り組み、最終的なまとめをA4プリント1枚に記入させ授業後に提出させる。
2. 資質保育士としての意識強化と実習負担軽減のため、昨年度の保育実習Ⅲ受講学生の実習後反省と学生全体の進路動向を確認する。併せて、17Yの7月の実習前アンケートを細かく分析する。
3. 幼稚園の障害児や気になる子どもの通園状況や障害種別また特別な配慮の有無とその具体的内容について、過去3年間の実習後の学生アンケートや県教委の調査結果をもとにして分析する。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**Ⓐ**・B・C・D」

提出プリントを学生自身の考えやグループ内の意見を記入する内容に改善したため、前年度に比べより主体的な学習活動を行うことができたが、障がい児保育については講義時間が長くなりアクティブ・ラーニングがやや消化不良気味であった。

2. 自己評価「S・**Ⓐ**・B・C・D」

保育実習Ⅰの施設実習で学生の進路希望を重視した配置を行い、従前の保育実習Ⅱ必修から施設保育士を目指す学生については保育実習Ⅲのみで可とし学生の負担軽減に繋げた。

3. 自己評価「S・**Ⓐ**・B・C・D」

幼稚園における障害児や気になる子どもの通園状況や「合理的配慮」「基礎的環境整備」に繋がる特別な配慮の有無や配慮内容について、研究を進め紀要に掲載することができた。学生アンケートや県教委調査結果を主にしたが、今後は保育・教育現場での具体的な実践について研究を深めたい。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 障がい児保育について、講義内容を精選し学生自身の主体的な学びの時間を広げる。
2. 学生の進路希望に即した保育実習Ⅲの進路先の選定と実習指導に努める。
3. 卒業研究と連動しながら保育・教育現場における「合理的配慮」の実践研究に取り組む。

平成29年度 「濱口 なぎさ」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： ビジネス・医療秘書コース

職名： 准教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 地域と交流できる場を設け、学生の実践力強化につなげる
2. 日商PC 検定試験の3級全員合格を目指すと共に、2級の合格者を出す
3. 学生とのコミュニケーション強化に努める

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 学生の実践力強化
主にゼミナールにおいて、学外の方々と交流し活動するよう指導した。
2. 日商PC 検定
日商PC 検定（文書作成）について、2年生は3級を4回、2級を1回、1年生は3級を1回実施した。また、2年生についてはMOS 試験も1回実施した。検定試験前には対策講座も実施した。
3. 学生とのコミュニケーション強化
オフィスアワーとして設定した時間以外に、研究室を訪ねてくる学生が多く、チューター生以外の学生とも積極的にコミュニケーションを取るよう努めた。

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに○（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・**○A**・B・C・D 」
ゼミナールでの学外活動では、リーフレット配布後に学外の方々と交流の機会があったが、学生達が対応できず、教員が対応せざるを得ない場面が多々あった。
2. 自己評価「 **○S**・A・B・C・D 」
2年生は、日商PC 検定2級・3級とも受験者全員合格できた。1年生は残念ながら1名が不合格となったが、実力は合格レベルには達しているため、次回の受験での合格が見込まれる。また、1年ぶりにMOSの合格者を2名出すことができた。
3. 自己評価「 S・**○A**・B・C・D 」
後期中盤以降、オフィスアワー記録簿への記録が疎かになってしまった。1・2年生とも、授業以外でも積極的な声掛けを行った。特に就職がなかなか決まらない学生については、個別に状況を確認したり、ハローワークの求人状況を知らせるなど、きめ細かな対応を心掛けた。1年生で心身に問題を抱えている学生については、授業内外でのフォローを心掛けた

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. アクティブラーニングへの取り組み
担当授業において、アクティブラーニングの手法を積極的に取り入れ、学生の実践力の強化を図る。
2. 日商PC 検定・MOS 試験への合格対策と登録販売者試験への対応
上記検定試験の受験者を増やし、受験者全員合格を目指す。登録販売者試験については、受験対策講座の充実を図る。
3. 問題を抱える学生への対応
心身に問題を抱える学生や基礎学力の低い学生に対し、可能な限りきめ細かな対応を行うと共に、コース内での情報共有を図る。

平成29年度 「山口 ゆかり」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 栄養士コース

職名： 准教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 引き続き、栄養士実力認定試験において、担当科目（給食管理論）の正解率が短大平均を上回るよう支援する。
2. 学務システム等を用いて学生情報の収集に努め、栄養士コース内の連携強化に協力する。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 前期授業（給食経営管理論実習Ⅱ、学外実習総合演習）において、出題率の高い分野の練習問題を解かせ、意識付けを行った。また、卒業研究の実験項目に復習を兼ねた内容を盛り込んだ。
2. データ入力（出席状況、面談結果）の習慣化を目指した。また、学務システムの運用に関する気づきを事務局に連絡し、システムの改善に協力した。

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに口（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

今年度の栄養士実力認定試験における「給食管理論」の結果は、学内平均が短大平均と全国平均をわずかに上回ったが、昨年度より全国平均を越えた学生が減少（平成28年度5点以上52.5%→平成29年度4点以上46.6%）し、正解率が3割に達していない学生（2点以下）は増加（平成28年度5%→平成29年度23.3%）した。これには推奨科目（給食経営管理論実習Ⅱ）の受講率の低下（平成28年度80.0%→平成29年度受講率65.1%）、一般就職希望者の増加、個人の理解力などが影響していると思われる。この分野では毎年、満点を取る学生が若干名存在し、授業レベルを含む講義内容は特に問題ないと思えるが、学びのチャンスを自ら逃す学生が増えており、主体性を育むことが課題の1つにあがった。

表1 本学学生の「給食管理論」における得点分布

| | | 7点 | 6点 | 5点 | 4点 | 3点 | 2点 | 1点 | 0点 |
|----------------------|-------|-----|------|------|------|------|------|-----|-----|
| 平成29年度 本学受験者数：43名 | 人数(名) | 2 | 8 | 6 | 4 | 13 | 6 | 3 | 1 |
| | 割合(%) | 4.7 | 18.6 | 14.0 | 9.3 | 30.2 | 14.0 | 7.0 | 2.3 |
| 平成28年度 本学受験者数：40名 | 人数(名) | 3 | 6 | 12 | 13 | 4 | 2 | 0 | 0 |
| | 割合(%) | 7.5 | 15.0 | 30.0 | 32.5 | 10.0 | 5.0 | 0 | 0 |

表2 「給食管理論」の平均点および正解率

| | 本学 | | 短期大学 | | 全国 | |
|--------|-----|--------|------|--------|-----|--------|
| | 平均 | 正解率(%) | 平均 | 正解率(%) | 平均 | 正解率(%) |
| 平成29年度 | 3.8 | 53.8 | 3.4 | 48.9 | 3.7 | 53.4 |
| 平成28年度 | 4.6 | 66.1 | 4.1 | 58.6 | 4.4 | 62.6 |

2. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

必要なデータは早めに入力できたが、全体のデータが揃わず、情報を口頭で共有することが多かった。毎年、後期は時間が取れず、1年生との面談ができていない。データ入力やチューター生との関わりは、時間に余裕がないと滞ってしまうため、次年度は時間を確保していきたい。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 給食経営管理論実習Ⅱにおいて、重点事項を繰り返し学べるような授業の展開方法を考える。
2. 1年チューター生との面談は、前・後期とも必ず実施する。

平成29年度 「植木 明子」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名：介護福祉士コース

職名：講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. ころとからだのしくみ関連の科目の基本事項の理解が全員できる。
2. 授業の中に学生の積極的取り組みをはかる。(2年生は事例研究、1年生はからだのしくみに興味を持つこと)
3. 課題を抱えた学生へ、傾聴の姿勢でかかわる。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 2年生に関しては基本問題の理解を夏季休暇中に確認したり、医療的ケア・生活支援技術 D・発達と老化の理解Ⅱの中で行った。特にころとからだのしくみⅢに関しては能動的学習ということで自分で課題を決めて臓器を模型や絵を描くことで表現することも行った。楽しく学べたという声も聞かれた。1年生に関しては前期、からだのしくみに関しての難しいといった声も聞かれ、教える内容を減らし確認問題を解かせることなどで、理解を深めた。前期、一部に授業内容に満足していない学生もいたため、できるだけ後期は学生の声を授業に反映するよう、授業感想を書いてもらった。
2. 2年生はできるだけ事例関係者の話を授業に取り上げ、全員で学びを共有できるようにした。1年生は基本的なからだの部位の名前・骨や・筋肉の名称心臓の名称など繰り返し行った。
3. 学生間のトラブルにがあったとき、できるだけ話を聴き、学生間で解決できるよう助言した。ただし、介入に関してはやや先走ったところがあり、全員の学生に不満がない状況をつくれなかった。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・・C・D」

11月模擬試験においては、全体的なころとからだ関連の試験結果は全国平均 66.75%に対して70%であった医療的ケアについては全国平均よりやや低い値であったため、授業内容が11月の試験前にはおおよそ終わるような事業設定が必要と思われる。模擬テストでころとからだのしくみが他の学生より低い学生がおり、本番前までに十分フォローができなかったが、結果的に国家試験では全員が合格できた。

2. 自己評価「S・A・・C・D」

1年次に事例研究発表会を全員が聞き、多くの学生が自分もできるのか不安を持ったようであるが、2年になって発表が終わった後の学生の達成感は大いようである。事例内容を通して学習の理解も図れ、学生の興味関心も高まるので、授業とあわせて連動させることは効果的である。

3. 自己評価「S・A・・C・D」

トラブルがあったときにもう一步踏み込めなかった部分もあり、結果的にトラブルの解消が図れなかった部分がある。問題解決が図れるよう、今後とも教員間で連携して対応していく必要がある。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. ころとからだのしくみ関連の基本事項が全員理解できる。
2. 全授業においてアクティブラーニングを展開させ、学生が意欲的に授業に取り組める。
3. 課題を抱えた学生に傾聴の姿勢で関わる。

平成29年度 「古賀 克彦」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名：栄養士コース

職名：講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 栄養士養成施設協会が実施する栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上
2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上
 - ・ 毎回授業前に栄養士実力認定試験問題出題し、解説を実施
 - ・ 授業において頻出分野の解説強化
 - ・ 定期試験に栄養士実力認定試験を一部採用
2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上
 - ・ 学外実習総合演習での指導強化
 - ・ 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱの直前指導および事後指導強化
 - ・ 学外実習担当助手との連携強化

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・**ⓑ**・C・D」

平成28年度の栄養士実力認定試験において、臨床栄養学は平成28年度と同様に短大平均を上回ったが、4年制大学の学生を含む全国平均を下回る結果となったが、栄養指導論は短大平均を下回る結果となった。今後、成績を向上させ、学生の質を向上させるためには、授業内容の見直しや、授業内容の取捨選択が必要だと思われる。

| 科目名 | 本学(正答率) | 短大平均(正答率) | 全国平均(正答率) |
|-----------|-------------|-------------|-------------|
| 臨床栄養学(6点) | 2.8点(46.5%) | 2.5点(42.3%) | 2.9点(48.3%) |
| 栄養指導論(6点) | 3.0点(50.4%) | 3.5点(57.8%) | 3.8点(63.0%) |

2. 自己評価「S・A・**ⓑ**・C・D」

今年度の学外実習Ⅰ及び学外実習Ⅱの評価は以下のとおりとなった。学外実習Ⅰでは実習先からの評価はA評価が産駒年度と比較しても少なかったが、学外実習ⅡではA評価は増加し、B評価が減少した。学外実習ⅡでB評価が減少した理由としては、マナーに関する学外実習Ⅱの事前指導を繰り返し行った点、学外実習課題指導を積極的に行った点が考えられる。

| 科目名 | A評価 | B評価 | C評価 |
|-------|------------|------------|----------|
| 学外実習Ⅰ | 27名(61.4%) | 26名(59.1%) | 1名(2.3%) |
| 学外実習Ⅱ | 31名(70.4%) | 12名(27.3%) | 1名(2.3%) |

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 平成30年度は担当科目の得点を可能な限り全国平均に近づけるため、授業内容の見直しを行うと同時に、教えている内容の取捨選択を行い、重要な部分は確実に正徳させていきたい。
2. 平成30年度の学外実習Ⅰ及び学外実習ⅡではC評価を減らしA評価を増やすため、学生にはなぜ学外実習を行うのか理由や目的納得するまで説明していきたい。また、学外実習直前指導を密に行えるように各教員を支援していきたい。

平成29年度 「中村 浩美」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. ピアノ・弾き歌いに於いての初心者や基本レベルに達していない学生の達せ度を高める。
2. 声や歌唱にコンプレックスを持っている学生、また声の出し方に疑問を持ち自信がない学生への指導を行う。
3. 保育者になる自覚と意識向上を常に持たせるために、学生が自ら積極的に授業に取り組める指導を行う。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 緊張感をほぐし信頼関係を築きながら、個人の性格を早く把握してレベルに沿った指導した。試験前にはグループで発表会をしながら、それぞれの良い点・課題点を述べながらグループでも協力し合って上達するための方法も促すようにした。
2. 声にも個性があつて当たり前であることを気付かせ人前で声を出す羞恥心を少しずつ取り除くためのレッスンを試みた。声を出す事・歌う事に必要な要素を個々に見合った方法を工夫した。特にチェンジの声がそれぞれ違うため一音一音丁寧に直接体に触れながらの指導を強化した。
3. 「先生」と言われる立場上人前に出ると言うことに対して何を意識してどう振舞うかを考えさせそれぞれに実践させた。学生オリジナルの手あそび歌をグループ活動で完成できるようポイント・アドバイスをを行った。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに口(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「 S・A・**B**・C・D 」
初心者が8割だったため、例年よりさらに緊張感をほぐしながらピアノへの抵抗を少しずつ除去していく指導に神経をかなり使った。授業外でも教員と学生間のスケジュールを検討しながらレッスンを行ったが到達する進度が遅かった。進捗状況を優先するより基本的な技術を重点的に指導した事は今後の上達に繋がると感じている。
2. 自己評価「 **S**・A・B・C・D 」
楽器も当たり前だが、歌を上達させるためには、コンスタントなレッスンとかなりの時間を要すること、また、個人での練習ではその発声法が正しいかを見極めることが難しいのだが、ゼミで特に一人ひとりがコンプレックスを打破しようと努力し、その結果が堂々と歌い、歌うことへの喜びを感じさせることができた。子どもの歌を歌うためにはミックスボイスや地声からチェンジして自然にファルセットに移行できる声、地声のまま子どもの歌の音域を歌える声、またはファルセットでもぶれない声が理想的ではあるが、地声で歌っていた声をもとの音からファルセットに移行すれば良いのか、またファルセットを安定させるにはどうしたら良いのか難しい事ではあるが、学生個人の癖を早く知ることができその指導方法を研究できた。
3. 自己評価「 **S**・A・B・C・D 」
人の前に出て話す機会がない学生に、「先生」に成りきる授業に取り組んだことで、学生達も何が必要なかを次第に感じるようになり消極的な学生もすこずつ積極的に取り組めるようになってきた。オリジナルの手あそび歌はグループが一丸となり、基礎コードの復習から調や拍子の変化にもアドバイスを加える事で、その楽しみを感じながらの授業ができ発表も学生が達成感と喜びが持てた授業となった。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 研究室でのレッスンはマンツーマンで行うため、緊張している学生が殆どなので、緊張感を緩和させながらこれからも一層の丁寧なレッスン指導をし、学生と共に達成感や成長を喜んでいきたい。
2. 学生が自分の声に未知の発見や成長が少しずつでもあること、コンプレックスを解消できて楽しむ歌になる学生が増えるよう、今までの指導の在り方を生かしつつ学生によつての工夫を強化したい。
3. 保育者になるための意識改革や実践に力をいれてきたが、授業内容や人の前にでることには何が大切かを理解しながらも消極的で実践でき難い学生への配慮や積極的な受講に早く取り組ませたい。
グループ活動のオリジナル手あそび歌では一人ひとりの達成感と喜びが感じられ、独自のアンケートでは100%の満足度を得られたため、次年度も学生の個性を見極めながら続ける予定である。

| 平成29年度 「田川 千秋」 年次報告書 | |
|---|--------------|
| 区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ） | |
| 部署名： 介護福祉士コース | 職名： 講師 田川 千秋 |
| PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。 | |
| 1. 卒業年度を迎え専門科目の知識、技術の習得の確認をすることにより、国家試験対策に結びつける。 そのために考える力と応用力が求められる。介護過程、生活支援技術には習得すべき専門知識の幅広い知識が求められるためノートの整理、根拠のある生活支援技術のマニュアルづくりとそのチェックのより知識と技術の習得の更なる徹底を図る | |
| DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。 | |
| 1. ノートの整理と提出日を遵守させる。未熟なノートの再提出やミニテスト、演習等により知識と技術習得の確認を行なう 2. 専門用語を確実に読み、意味を理解することができるため授業の中で質問と解説を行なう。 | |
| CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。 | |
| 1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 質問に答えられない、専門用語を正しく理解していない、レポート提出を守ることができない学生もいるが、生活支援技術Bの平均点数77点、S・Aで95%、介護過程IIでは平均点数92点、S・Aで100%とテストの素点は高い点数が取れており、満足度も高い。それは丸暗記で試験を受けた結果、テストの成績が全てと思っている学生がほとんどであると思われること、意味を理解した応用力を育成できていない、などが原因と思われる。 | |
| ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。 | |
| 1.事例研究とマニュアル作成において、自分の考えではなく、参考文献の読み込みによる根拠探しを徹底させる。 | |

平成29年度 「本村 弥寿子」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 保育現場で生かせる知識や技能を習得できる授業内容の工夫を行う。
2. 学生の学びの連続性や深まりを捉え、授業内容改善に生かす。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 5年間の本学での授業の取り組みから、現場での実習指導の様子がおおよそ把握できるようになり、それを踏まえて指導案作成や教材作成のポイントを授業の内容として取り入れるよう工夫した。
2. 昨年度、附属幼稚園での体験学習の内容の改善を図った。そこで学びを深めたうえで学外実習を行った学生が、保育者養成校での学びの最終段階において知識・技能の更なる修得を目指すため、保育・教職実践演習の授業内容を見直した。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

短大で学んだ指導案作成における約束事が、実習先ではかなり異なる場合が多いことを学生が理解して実習に臨んでいたのか、過去5年間は短大で学んだことと現場での指導内容の差に戸惑う学生が7割ほど存在していたが、今年度は戸惑ったという学生は1割にも満たなかった。実習先でどのような指導があるのか、授業からおおよそ察することができ、落ち着いて実習に取り組めたものと思われる。

2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

学外実習前にのみ行っていた現職の園長の講話を就職前に再度設けた。また学生自身が自分の課題を見つけて自分のペースで課題克服できるようアクティブラーニングを取り入れた授業を試みた。授業内容のアンケートでは9割の学生が「非常に良かった」「よかった」を選んだ。これは、学生に任せたままにするのではなく、経過報告の時間を必ず設けて確実に課題克服に向けて学習を自ら進めるよう工夫したことで着実に学びを進められたからと考えられる。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 押さえるべき学習内容を明確に打ち出してしっかりと理解を図ることが現場での指導に臨機応変に対応できる力につながると考えられる。基本を重視した授業実践を行うよう努力する。
2. アクティブラーニングの取り組み方を十分に理解できていない学生でも自分のペースで学習を確実に進められるよう、教員の丁寧な対応について模索したい。

平成29年度 「荒木 正平」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名：介護福祉士コース

職名：講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 担当授業（「障害の理解」「コミュニケーション関連科目」、「社会的養護」）の内容充実と、学習成果の向上
2. 国家試験対策指導の強化・充実
3. 学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1.
各科目、教科書を中心に講義形式で知識の定着を図りつつも、学生が興味を持って取り組めるよう工夫した。具体的には、介護現場におけるケアの場面や、社会的養護の現場を具体的に想定しつつ、実践力を身につけることが出来るよう、資料配付やDVDなどの教材を効果的に活用し、より能動的に考える授業となるよう、レポートなども課しながら授業を行った。
2.
コミュニケーション関連各科目や、障害の理解においては、教科書中心の知識定着を重点目標とし、過去問や模擬試験問題を活用したミニテストを定期的に実施した。特に、難科目である障害の理解については、頻出するテーマや問題傾向を把握することで、類似問題への対応が可能となるよう工夫した。実際の国試と同様の形式でのミニテストを繰り返し、出題形式にも慣れることができるよう配慮した。
3.
5月には自身の研究の関連分野における日本社会福祉学会九州部会において口頭発表を行った。発表前後に交流した他大学や研究機関の研究者との情報交換は、有意義なものであった。成果の一部については、紀要においてまとめ、報告を行っている。また今年度は、幼児教育学科における社会的養護の授業における学生レポート分析の結果についても、簡単にまとめて授業研究の成果として報告した。

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

まず「障害の理解」においては、昨年に引き続き、テーマごとに当事者の生の声や思いを聞けるよう映像資料を可能なかぎり用いることで、意欲的な取り組みにつなげることができた。このことは、事例研究報告と発表内容の充実にもつながったと考える。「コミュニケーション関連各科目」でも、演習形式での実践のほか、時事課題についてのテーマ学習の実施により、学生自ら考える姿勢を促すことが出来た。「介護総合演習」では、事例研究発表の準備における個人指導を徹底的に密に行ない、根拠のある介護実践を意識出来るような支援を行った。地域交流企画は、学生主導で行えるよう進行することができた。

2. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

自身の担当科目については、取り組み方法など摸索しながら一定の成果をあげられたと考えている。一方、国試対策全般については、学生間での競争意識、高め合いの意識を醸成するには至らなかったと考えており、この点次年度の課題となる。

3. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

学会での報告については、その後の意見交換等も含めて大変有意義なものであった。また、研究成果の報告についても、当初計画していた介護コミュニケーション場面の分析に加えて、社会的養護をテーマとした報告もまとめることができた。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 幼児教育学科、介護福祉士コースにおける各担当授業の内容充実と、学習成果の向上
2. 幼児教育学科における実習指導体制の確立と内容の充実
3. 学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う

平成29年度 「福井 謙一郎」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. ICT を取り入れた授業改善を行う。
2. 学生支援的要素を取り入れた研究活動を行う。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1.

(1)学生の基礎コミュニケーション力（保護者への言語的・非言語的支援）を高めるためには、セルフモニタリング（自己観察）による内省が必要であると考え、学生108名（54ペア）のロールプレイ（保護者役、保育者役に分かれての擬似面談）を撮影した。また、それらをロールプレイ撮影後に上映し、保護者への言葉遣いや姿勢などについて教員の解説と指導を加えることによって、学生自身が普段行っているコミュニケーションを客観的に見直すきっかけを与える実践に取り組んだ。

(2)上記で示したロールプレイを行う際には、タブレットだけでなく、小型カメラGoProを用いる事によって、学生の死角をなくすような取り組みを行った。

従来は図2のように、一方の席に座る演者の表情は見えるが、学生に背を向けている演者については、非言語的なサインがほとんど得られなかった。そこで図3のように、死角側にカメラを設置し、またそれをリアルタイムでスクリーンに投影しながら観察することによって、観察者側の学生も、「同時にふたりの演者を観察できる」ように環境改善を行った。
2. 「保育者養成課程に在籍する学生の子ども観と養育態度認知に関する研究」というテーマで研究を行い、『保育者養成教育学会（全国誌）』に投稿し、掲載決定した。

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
より実践的なICT活用ができたのではないかと考えられる。
2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
より現場重視の研究に取り組めた。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. より実践的なICT活用方法を模索する。
2. 上記研究を引き続き行い、事例研究に着手する。

平成29年度 「光武 きよみ」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 保育者に必要な知識や技術について、興味や意欲を持ち、自主的に学べるような授業を展開する。
2. 学生自らが考え、発言できるような授業の工夫を行う。
3. 学生支援では、良好な人間関係の構築に努め、学生が相談しやすい環境を作る。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. パワーポイントやDVDなどの視聴覚教材に加え、赤ちゃん用品に触れさせてからデモンストレーションを行い、演習を実施した。またイメージを持ちにくい発達障害などは、当事者が書かれた本やDVDを使用して、障がい児・者の気持ちを理解できるよう努めた。
2. グループワークを通して他者との意見交換を促し、発表する機会を多く作った。また演習では、人形1体に対して学生2名の割り振りを行い、共に評価・協力しながら演習を進めていけるように配慮した。
3. 授業終了時には質問タイムを設けた。理解が不十分な学生には、授業外で質問や演習指導を行う事を伝え、相談しやすい環境を作ってきた。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

資料は、昨年同様にポイントの書き込みを行い、理解はしやすかったと考える。口頭で伝えたことは、各個人で追記してもらった。それができない学生には、試験前に再度説明をして書き込みの再確認を行わせた。乳児関連商品に触れ、デモンストレーションを実施したあと演習に入っていたため、学生の興味や関心は大きく演習はスムーズに行えた。障がいの部分は、他教科でも学ぶため、視聴覚教材や書物の内容紹介などを通して、本人や家族の気持ちが学べたのではないかと思う。

2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

グループワーク、実技演習を通して、意見交換を行い、発表に繋がっていったものと思われる。発表は個人を指名して行うが、その周囲からの助けを借りながら意見を述べていくようにした。社会人となった時に、各専門職と協働する基礎を学べたのではないかと考える。

3. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

授業終了時の質問タイムや時間外の個別対応は、わからないことをうやむやにしないという事も含めて、人間関係の構築にも良い影響が出ている。また、演習ではベッド毎に巡回指導を行い、試験前には研究室の来訪者も増えている点では、質問しやすい環境を作っていたのではないかと考える。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 学生それぞれの能力も関わってくるが、資料にはない重要部分の書き取りができるよう、言葉かけを行う必要がある。
2. 自ら考え、たくさんの人の前で発言できる機会をもっと増やすことが大切である。
3. 今後も質問しやすい環境づくりを行う必要がある。

平成29年度 「江頭 万里子」年次報告書

区分： 学科コース・委員会等・事務局等・**教職員個人**・その他（ ）

部署名：ビジネス・医療秘書コース

職名：特別専任講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 授業改善：動機づけを工夫し、学習意欲の向上を図る。
2. 授業改善：実践力の向上を図る。
3. 学生支援：自主的な学習活動の支援のため、引き続き、研究室を訪問しやすい環境作りに努める。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 入学時点における学びに対するモチベーションを維持させるために、1年生に対してキャリアプランの作成と見直し、卒業生の検定実績の紹介を実施し、併せて、検定の上位級を取得した2年生の体験談を聞く機会を作った。
2. 授業で学んだマナー項目の中から、教員が指定した5項目と学生が選定した項目を日常生活において実践させ、4段階（4点～1点）の自己評価によって振り返りを行わせた。
3. 疑問点などがあれば研究室を気軽に訪問するように日常的に声かけをし、訪問しやすい環境づくりに努めた。

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S □A・B・C・D」

入学直後に、キャリアプランを作成させ、在学中に取得したい検定（級）を確認し、取得に向けての意欲を喚起することができた。この意欲を継続させるため、後期の初めと最後に振り返りをさせることで、検定合格への意欲の維持を図ることができた。また、上位の級を取得した2年生の体験談は、上位級の取得を実現可能なこととして認識することに繋がった。

2. 自己評価「S □A・B・C・D」

教員が指定した5つのマナー項目と学生が選定し実践したマナー項目についての最終授業時における自己評価で、全項目が4点中3点を超えており、学生は実践したマナー項目が大体身に付いていると感じていることが分かった。また、振り返りの自由記述から意識して続けることの大切さや自身の成長を感じていることが分かった。

3. 自己評価「S □A・B・C・D」

学生の訪問目的は、授業内容に関する質問及び就職活動についての相談がほとんどであった。卒業時に履歴書の添削等に感謝の言葉を述べる学生もあり、一定の評価をしてくれたのではないかと考える。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 授業改善：実践力の向上を図る。引き続き、授業外での実践を行わせ、授業内容の定着を図る。
2. 授業改善：講義科目においてアクティブラーニングを実施する。
3. 学生支援：研究室を気軽に訪問するように授業時など日常的に声かけをし、引き続き研究室を訪問しやすい環境作りに努める。

平成29年度 「樋口 誠」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 特別専任講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 体育実技については、運動の実践を通して幼児体育の指導法を学び、理解させ実践活用出来るよう指導する。
(運動の意義を理解し、健康の保持増進を考え、生涯を通して運動に親しみ、社会生活を送る。)
2. 体育講義については、運動と発育発達との関係を理解させ、実践活用出来るよう指導する。
(運動の特殊性、発育発達と運動の関係を理解し、運動による障害及びその予防を学ぶ。)
3. 卒業研究については、実践腹話術の取り組みを目標に、年間授業内容のモジュールを高め、充実した内容にしたい。
4. 部活動 (バレーボール部) 目標九州ベスト8
昨年の大会で、上位チームとのレベルの差が少しあったように思えるので、チーム一丸となり目標達成に挑戦する。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 体育実技では、運動の実践を等して体育実技の指導法を学ばせることが出来た。
体育種目の特殊性・ルール・運営の理解を促すよう心掛けた。
2. 体育講義では、パワーポイントを使用して、学生の理解を促すよう心掛け実施した。
学生の理解度を確認するため、指名質問・講義内容の小テストを実施した。
3. 卒業研究はパペット人形作成に時間がかかり、授業進行が遅れたため技術指導に大変苦労した。
なんとか無事に卒業研究発表まで修了したが、来年度は最と充実した内容のある卒業研究に取り組みたい。
4. 学生同士のコミュニケーションを大切に活動した。九州インカレ (7月開催) については台風接近のため、大会が中止となった。今年度は県内大会だけの参加となった。

CHECK (検証)： 成果を測定 (量的・質的データ) し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに口 (囲み線) を付ける。

1. 自己評価「 S・A・**ⓑ**・C・D 」

学生すべてが同じ運動能力かというところかなり能力は違う。最終目標は同じだが最後までついて行けるか心配の学生もいる。

2. 自己評価「 S・A・**ⓑ**・C・D 」

講義内容のプリント・資料を提供したが十分とはいえない。学生に学んでほしい分野を選択しているので、充実した内容にしたい。

3. 自己評価「 S・A・**ⓑ**・C・D 」

パペット人形の作成に多くの時間がかかり、実践腹話術の技術指導の日程調整が大変だった。
個々に応じた授業内容・技術指導は、時間も根気もいることを改めて再確認した。

4. 自己評価「 S・A・**ⓑ**・C・D 」

練習時間の確保が難しく、目標達成には至らなかった。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 学生一人ひとりの運動能力に応じた個人指導まではいかなかったので、授業時間内での配分を考慮して技術指導もやっていくように心掛ける。
2. 学生一人ひとりの理解度をもっと把握し、講義内容を再度見直し実践に活かしてもらえるような内容に検討する。また、講義資料についても検討しなければいけない。
3. 学外での発表会をもっと多く取り入れて、実践腹話術についての取り組みを充実させ、研究成果を論文発表出来るよう努力する。
4. 新入生の入部を確保する。(6名)

平成29年度 「昆 正子」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 助教

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

- 1Y必修「子どもと美術」で制作した自己紹介教材を実習現場で発表することのできた2年生に対し授業で制作したもの・ことが実際にどのように役立っているのか確認し、保育実践力を身につけることのできる授業づくりを進める。専門科目から実習指導へとつながりを持たせた授業展開を意識したい。
2. 絵画表現に対し苦手意識のある学生への絵画療法的アプローチ
3. 短大生の一般教養科目としての美術鑑賞活動について、教員と学生が双方向的、共同的に意味を生成し合うことを促すような指導形態を心がける。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 実習報告会資料の2年生の記述内容から取り組み状況を確認した。
また1Y必修「子どもと美術」授業計画を見直し、一枚の紙からなるミニ自己紹介絵本作りを取り入れた。
2. 1Y必修「子どもと美術」において、オイルパステルを用いた心の開放体験を取り入れた。
3. 一般教養としての美術に関する知識を西洋美術史中心にポイントを押さえ、作品写真をスライドで示したり、ビデオ視聴したりしながら解説した。多くの受講者数に対応するため、毎回のミニツツペーパースタンプやコメントを残すことで、学生との意思疎通を図った。また対話による鑑賞活動をできるだけ取り入れるよう心がけた。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□**B・C・D」
多くの学生が絵本・ペーパーサート・名札等、自己紹介用の教材を制作していた。また子どもの年齢・発達に合わせた自己紹介の事例を授業でも伝えていたため、その点を意識して制作したという学生も以前より増えた印象がある。細かな分析までは至らなかったため、今後の課題としたい。
今年度は「子どもと美術」全体の内容・バランスを見直し、より短時間で製作できる「ミニ自己紹介絵本」を実施した。学生は従来のスケッチブックよりも気軽に制作ができ、紙の新たな活用法について知ることとなった。
2. 自己評価「S・**□**A・B・C・D」
取り組み内容、学生の反応についての詳細は平成29年度本学紀要第42号に掲載。
学生が主体となり、体験的に造形表現の意味をとらえなおす機会として意味ある活動となった。
3. 自己評価「S・A・**□**B・C・D」
学生の感想文からは、作品や美術への見方が変わったとの記述が多く見られた。またミニツツペーパーの様式を工夫したことで、学生の集中力を高め、教員も学生の学びや思考の過程を把握しやすくなり、フィードバックがしやすくなる等の利点があった。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 引き続き、短大生の一般教養科目としての美術鑑賞活動について、教員と学生が双方向的、共同的に意味を生成し合うことを促すような指導形態を心がける。
2. 実習で活かせる製作物の紹介について、内容を充実させる。

平成29年度 「山本 尚史」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 助教

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 1、2年合同フィールドワーク等、保育者としての自分を見つめる機会の創出
2. 保育現場への聞き取り調査の実施等を踏まえた教材研究
3. 長崎の保育史に関する研究

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 教育原理、保育原理、保育者論、保育・教職実践演習において、異学年交流を行った。その中で保育者とはどのような存在かを、ディスカッションを交えて学びを深めた。
2. 市内幼稚園において保育者との意見交換を行った。
3. 戦後復興期の長崎の幼児教育の復興に関して、資料調査を実施した。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・B・C・D」

異学年交流は、学生間で保育者という存在を見つめ直す機会となった。積極的に学生同士が交流する様子、議論する様子が見られた。成果をどのように客観的に可視化するか課題である。

2. 自己評価「S・A・B・C・D」

保育者との意見交換において、保育現場の課題等が浮かび上がってきた。今後は課題について現場と連携しながら取り組みたい。

3. 自己評価「S・A・B・C・D」

未発見の資料を含む、従来の研究史に貢献できる調査を行うことができた。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 異学年交流を今後も進めるとともに、学生間のディスカッションを報告書にまとめ、2年間の学びに位置づけたい。
2. 現場との連携を進め、課題の掘り起しに努めるとともに、参与観察等の方法を取り研究を進める。
3. 資料調査を継続する。

平成29年度 「蛸原 正貴」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 助教

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 実習を含め、より現場に近い環境下での保育を経験するため、模擬保育を取り入れた授業を行い、学生の実践的な保育力を高める。
2. 幼児の運動遊びに関する教材、教具、取り扱い、援助の方法について理解を深めながら、運動の基礎的技能を身につける。
3. 生涯にわたる健康の基礎となる乳幼児の心身の発育・発達について、穴埋め形式の問題を用いながら理解を深める。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 「運動遊びの実践」及び「保育内容『健康』」の授業において、模擬授業を中心とした実践形式の保育を取り入れた。そのため、学生同士で授業を進めていく形式の授業を実行することができた。
2. 「幼児体育」及び「動きのリズム」の授業において、昔遊びや表現運動の発表を技能テストとして実施した。昔遊びは個人技能、表現運動は集団による創作という形で基礎的技能の向上を図った。
3. 保育内容「健康」の授業において、乳幼児の心身の発育・発達について、穴埋め形式のワークシートを作成し、パワーポイントをいながらワークシートに沿って授業を進めた。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに口(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**Ⓐ**・B・C・D」

模擬授業を中心とした授業形式は、学生の取り組み方に差が出るものの、実習に向けての実践的な素地を育てる良い機会になったと感じている。学生主体で授業を進めていたため、学生自身が考え、行動する力が身についたと考えられた。

2. 自己評価「S・**Ⓐ**・B・C・D」

個人の技能テストに加え、集団での創作活動を取り入れたことにより、技能の習得だけでなく、意見や考えを抽出、集約する力も養うことができたと感じている。また、習得した技能を他の人に教えることで、さらに技能を洗練させることができたと考えられた。

3. 自己評価「S・A・**Ⓑ**・C・D」

穴埋め式のワークシートを作成しながら授業を行ったが、授業中は穴埋めさえすればよいという学生が見られ、授業への取り組みに問題が見られたため、授業形態の見直しが必要である。しかしながら、アクティブラーニングを取り入れたことにより、学生主体で授業を進めることができた。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 取り組み方に差を出さないためにも、模擬保育の重要性、必要性等に関して説明を詳しく行う必要があり、模擬保育行った際の指導案についてもフィードバックをする必要がある。
2. 技能テストに関しては、ただ技能を身につけるだけでなく、技能習得のポイントを口頭で説明できるよう昇華させる必要がある。そのため、技能を身につけた上でその技能の要点をまとめ、レポート等にまとめることを検討したい。
3. アクティブラーニング形式の授業回数を増やし、学びを実践へとつなげられる授業内容を検討する必要がある。

平成29年度 「太田 智子」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名：栄養士コース

職名：実習助手

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 助手間の連携を密にし、学生の状況を細かに把握した上で臨機応変に対応する。
2. 学生の衛生管理に対する意識を高めさせる。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 授業での様子や学生との会話から、気になることがある学生について随時報告し合った。その上で対応が必要になりそうな案件については早めにコース長へ報告し、チューター先生方には面談等を実施して頂いた。
2. 調理実習時や学外実習前などに指導を行なった。調理実習では学生自身に毎回チェックリストを記入させ、衛生管理への意識を常に持つようにした。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**□**A・B・C・D」
学生生活に対して改善が見られた学生もいたが休退学という選択をした学生もおり、結果としてはやや残念であった。学生の変化に対応できるよう、より学生との信頼関係を築いていく必要性を感じた。
2. 自己評価「S・A・B・**□**C・D」
チェックリストに関しては、自己記入としたために、ただ記入すればよいという姿勢が多く見られた。衛生管理の意義を理解させるとともに、栄養士として働くという意識も高める必要があると感じた。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 従来通り助手間での情報共有を行ないながら、学生の様子を把握できる体制を整える。特に人数の多い新2年生は、個人個人と全体像の両方を把握できるよう努める。
2. 衛生管理が不十分な箇所を見つけた場合は、その都度指導をする。チェックリストは基本的に自己記入の体制を続けるが不定期で教員によるチェックが入る日などを設定し、常に衛生管理について意識させるよう心がける。

平成29年度 「桑原 真美」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 栄養士コース

職名： 実習助手

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. レポート提出遅れ、未提出者がでないようにする。
2. 1年生の1クラスの数が多いので、実験実習の授業がスムーズに進むようにする。
3. 助手間での情報共有を確実に行う。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. レポート締切日に提出しなかった学生に対して、声掛けを行う。授業担当の先生と未提出者の情報交換を行う。
2. 授業中にできるだけ無駄な時間が発生しないように、試薬の分注や器具の準備を行っておく。
3. 共有しなければならない情報は時間を置かずすぐ伝えるようにし、助手室内のカレンダーに書き込む等する。

CHECK (検証)： 成果を測定 (量的・質的データ) し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□ (囲み線) を付ける。

1. 自己評価「 S・A・**□**・C・D 」

レポート締切日に提出をしない学生に対してはその都度声を掛けることができたが、そのまま何週間も未提出のままの学生が数人いた。最終的にはすべての学生がレポートを提出したが、何周分も貯めたレポートを一気に提出していたため、内容が薄いものが多いように感じた。

2. 自己評価「 S・**□**・B・C・D 」

授業中に無駄な時間が発生しないようにするための試薬の分注や器具の準備はできたが、数に限りがある器具や機械に関しては、全12班で実験を行っているため、待ち時間が長く、授業終了の時間を大幅に過ぎてしまうことが数回あった。

3. 自己評価「 **□**・A・B・C・D 」

情報共有に関しては、何かあればその都度、情報交換を行うことができた。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 声かけだけではレポートを提出してくれない学生もいたので、なぜ提出できないのかまで聞き取り、アドバイスを行う。
2. 次年度は学生数が30名程度であるので、数に限りのある器具・機械に関する待ち時間は減少すると思われるが、場合によっては担当の先生と相談し、対策を取る必要がある。
3. 来年度も引き続き情報共有を行っていく。

平成29年度 「桑原 倫子」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名： 栄養士コース

職名： 実習助手

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 教員や学生が円滑に授業を進められるよう、授業の内容を把握・理解し行動する。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 授業の予習や事前準備には十分に時間をかけ、不明な点は担当教員や助手に確認する。
授業中は次の流れを予想し、教員や学生の動きの補助をする。

CHECK (検証)： 成果を測定 (量的・質的データ) し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに (囲み線) を付ける。

1. 自己評価「 S・A・B・ C・D 」

資料の読み込みや準備に十分時間をかけられたので、大きく混乱することはなく授業を進められた。
しかし突発的な事態での対応力や、自身の思い込みによる担当教員への確認不足など、反省する場面も
多々あった。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 本年度気づいた注意点や反省点を整理し、次年度以降に生かせるマニュアルを作成するなど明文化して、
記録に残す。
担当教員との確認や相談を、綿密に行う

平成29年度 「三藤 英文」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名：事務局

職名：事務局長

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 教務システムの構築
2. 「タイプ1 教育の質的転換」の取組の推進
3. SD研修の計画的実施

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. システム開発先と連携を強化し、常に情報交換を行い年度末までに構築できるよう進めていく。
2. タイプ1に選定できるよう内容の精査等を進めていく。
3. 計画的に課題に向けたSD研修会を実施し、個々の事務職員のレベルアップにつなげる。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・A・B・C・D 」
システム開発先のノウハウが乏しく、本学の修正事項等に対応できず後手に回っている。
2. 自己評価「 S・A・B・C・D 」
相応の点数を確保して文科省への申請を実施。
その後、選考が決定して次の4教室について備品等を導入して、アクティブラーニング教室としての活用が可能となった。
231、232、131、LL教室に教員機器備品を設置した。
3. 自己評価「 S・A・B・C・D 」
事務職の補充ならびに早期離職等で体制が構築できないことからSD研修の計画的な実施ができなかった。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 早急なシステム構築に向けた体制等を協議して本格的な運用を行うこととする。
2. 大学として教育に係る学生の能動的な学修ができる環境を今後も構築することとする。
3. 事務職員のレベル向上が緊急の課題からSD研修会の強化ならびに一人二役体制の構築を目指す。

平成29年度 「前田 功」年次報告書

区分： 学科コース・委員会等・**事務局等**・教職員個人・その他（ ）

部署名：事務局

職名：入試広報室長

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 入試広報室としての業務をより明確化するとともに、「組織」として機能する室を目指す。
2. 学長をはじめとする本学教職員及び事務局メンバーとの連携を図り、円滑な業務運営を目指す。
3. 各種取組を通して、前年度を上回る入学生（200名以上）の確保に努める。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. ガイダンス・学校見学会・オープンキャンパス、高校訪問など早めに計画を立て、昨年の反省を生かした実施に努めるとともに全職員参加による体制構築を図っていく。
2. 運営委員会・教授会・募集広報委員会等を通して、的確な情報提供を行い、全学体制で広報活動に取り組んでいくように計画立案を行う。
3. 地道に足で回って昨年度以上の入学生を確保する。

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□**・C・D」

すべての取組において実施要領を作成して取り組むことができた。特に「オープンキャンパス」・「入試業務」については、すべての教職員で対応し大過なくやり遂げることができた。

- (1)オープンキャンパス：高校生260名、保護者81名が参加（高校生とのべ参加者数は前年比+24名、実参加者数+7名）、推薦入試にはOC参加の高校3年生の76%が出願した。」
- (2)進路ガイダンス：会場型に16会場、校内型に48会場、のべ面談参加者数は420名（2月末現在）
- (3)高校訪問：のべ約180校を訪問。

2. 自己評価「S・A・**□**・C・D」

ほぼ毎週開催された運営委員会では情報提供と協議を通じて、考え方の統一を図った。そして月に一度開催される教授会でも、資料を元に丁寧に説明し、意識の上でも全学的な体制が構築された。

3. 自己評価「S・A・**□**・C・D」

11月の推薦入試において、154名の志願（前年比-20名）という結果に終わった。要因はいくつかあるが、特に長崎女子高校からの志願がS7名、L2名、Y33名とY（幼児教育学科）に偏った志願になったために、S（栄養士）L（ビジネス）の大幅な減少を招いたことが大きかった。S、Lの数が伸びなかったのはそれぞれのコースを卒業した後の働き方などがイメージしにくかった、という意見もあり、今後そのために取れる方策などを考えていかなければと思う。最終的な入学予定者数は一般入試、自己推薦2期入試などの合格者数を加味すると162名+αとなる見込みであり、前年度比-25名というところか。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 高校訪問計画、募集要項作成、オープンキャンパスの内容など、次年度に向けて手直しを加えていく必要がある。特に学科・コース卒業後の姿が可視化できるような工夫をしていかなければならない。また、進路ガイダンスについては県内のあらゆる地区を回りたい。県外は沖縄県と天草（熊本）地区を対象を絞りたい。
2. 運営委員会では必要事項に対して、懇切丁寧に説明を加えることで、学生募集の効率化・活性化につなげていきたい。
3. HPを含めた広報については、フェイスブックやインスタグラムなどSNSを利用した新たな広報活動を導入するなどさらなる改善をはかり、200名に近い入学者数の確保に努めていきたい。

平成29年度 「原田 実輝」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ **事務局等** ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名：キャリア支援センター

職名：キャリア支援センター長

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学生が利用しやすいようキャリア支援センターの環境作りに努め、就職活動を支援する。
2. 他部署との連携や、学務システムの運用による業務の効率化を図る。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 学生が相談しやすい雰囲気を作り、積極的に話しかけ、一人ひとりの学生とのコミュニケーションを取るよう心がけた。
2. 各キャリア支援委員とこまめにコミュニケーションをとり、情報を共有するよう心がけた。
学務システムの運用により学生の情報を的確に把握し、支援するよう努めた。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに口(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**Ⓐ**・B・C・D」

概ね学生が利用しやすい雰囲気作りはできたのではないかと感じている。

しかし、幼児教育学科の内定のピークが1ヶ月早まり、幼稚園実習後の10月後半に一気に大勢の学生が訪れた時は、丁寧に対応する余裕がなかった。

2. 自己評価「S・A・**Ⓑ**・C・D」

学務システムにより、学生の成績、奨学金、面談記録等の学生状況は瞬時に把握できるようになった。

しかし、科目履修予定者や、実習評価の低かった学生、特別な配慮が必要な学生の状況把握には課題が残った。

就職状況に関する部分の学務システムの開発が大幅に遅れ、業務の効率化までには至らなかった。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. キャリア支援センター内の資料の整備を行う。
2. 学務システムを活用し、業務の効率化を図る。
3. きめ細やかな個別対応を心がけ、就職に関する学生の満足度を上げる。

| 平成29年度 「宮崎 伸一郎」 年次報告書 | |
|---|-----------|
| 区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他 () | |
| 部署名：事務局 | 職名：事務(会計) |
| PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。 | |
| 1. 会計業務の遂行及び効率化 ・ 学外実習、実験実習費など今回初めて担当する業務であるため内容の理解、滞りなく処理ができるよう努力する。 2. 事務室内の連携 ・ 事務室スタッフが3名新人のためお互い協力し合い業務を行う。 3. 体調管理 | |
| DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。 | |
| 1. 会計業務の遂行及び効率化 ・ 業務を早めに取り掛かったことで、特に問題なく処理ができたと思う。 2. 事務室内の連携 ・ 今年度は年度途中で3名退職、1名産休等、途中で職員の採用はあったものの、年度末は例年と比べて2名減の状態それぞれ業務に追われていた感じがあまりうまく連携がとれたかは疑問である。 | |
| CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。 | |
| 1. 自己評価「S・ Ⓐ ・C・D」 ・ 会計業務については特に問題なく滞りないよう対応ができたと思う。また他会計課員との連携もお互いに取れ、スムーズに業務が行われたと思う。 2. 自己評価「S・A・ Ⓑ ・C・D」 ・ 年度途中で退職、採用と職員が入れ替わったためなかなか状況が安定しなかった。しかし直接仕事にかかわりがある新任職員とはお互いに連携が取れたと感じている。 | |
| ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。 | |
| 1. 今年度は特に問題なく対応、処理ができたが、まだまだ改善点があり、効率化ができると思われ、今後の課題と考えている。 | |

| 平成29年度 「一瀬 章子」年次報告書 | |
|--|-----------|
| 区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ） | |
| 部署名：事務局 | 職名：事務（会計） |
| PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。 | |
| 1. 通常業務、給与計算、月末締め効率化、わかりやすいファイル作成に取り組む 2. 監査(年2回)、年末調整、決算などで日常業務中に準備ができる資料についてのとりまとめを行う 3. 会計業務の知識を深める | |
| DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。 | |
| 1. 1日、月間のスケジュール把握と業務遂行の具体的手順を理解できた 2. 毎月業務を見直し、効率化を図った 3. 現在の業務に従事し2年目、1年間を通した具体的な事務手順資料を作成しそれを基に業務を実施した | |
| CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。 | |
| 1. 自己評価「 S・ Ⓐ ・B・C・D 」 過年度に作成した事務手順(ファイル)に基づき実施できた 2. 自己評価「 S・A・ Ⓑ ・C・D 」 業務知識の理解を深め資料作成等について簡略化できるものがないか検討する 3. 自己評価「 S・ Ⓐ ・B・C・D 」 業務に係る前年資料等の保管(ファイリング)管理について検討する | |
| ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。 | |
| 1. 会計業務について簡略化、データ化、マニュアル化できるものがないか検討する 2. 学校行事については個々の役割を明確にし、全体で協力する態勢を作る 3. 事務局の環境整備に努める | |

平成29年度 「林田 翔太郎」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ **事務局等** ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名：事務局

職名：事務（教務）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 教務課の業務内容の把握・理解
2. 業務の分担による効率化
3. 新任者および他部署へのフォロー

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 不明点は業務分担者に逐一相談することを心がけた。
2. 通常（2人）体制時はどちらがどの部分の業務を担当するのかの棲み分けを相談しながら行った。また、1人体制に移行後は一部の単純作業等について他部署に分担依頼を行うことで業務の負担をある程度分散することを目指した。
3. 学生課の奨学金業務について一部担当した。新任者へのフォローとしては業務上の不明点等には逐一对応するよう心がけた。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

年度途中より1人での業務遂行となり、ある程度引き継ぎは受けており、漠然とではあったが業務内容のイメージはできているつもりでいた。しかしながら、実際の業務遂行においては、1人では気づかない点や把握していなかった業務も多くみられ、想定外の事態が発生した際の対応に手間取ることが多かった。あらゆる業務において当初予定していたスケジュールより大幅に遅れることがあった。

2. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

通常（2人）体制での業務分担はある程度行えていたので業務の進行は比較的スムーズだったのではないかと思う。1人体制に移行してからは他部署に業務分担を依頼することも必要だと感じてはいたものの、他部署も新任者が配属されたという状況もあり、業務分担の依頼をうまく行うことができなかった。他部署への協力依頼も今後の課題である。教務課1人体制での業務遂行は不可能だと強く感じた。

3. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

奨学金業務の一部を担当することができたので、微力ながら学生課の業務負担減に貢献できたのではないかと考える。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 今年度1年間の業務経験を参考に、よりスムーズな業務遂行を目指す。
2. 他部署への業務分担依頼も視野に入れつつ業務を遂行する。
3. 学務システム活用について業者との窓口となり更なるシステムの改善と業務の効率化を図る。

| 平成29年度 「栗原 縁」年次報告書 | |
|---|-----------|
| 区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ） | |
| 部署名：事務局 | 職名：事務（学生） |
| PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。 | |
| 1. 職場の環境に慣れ、自らの判断で仕事を進められるようにする 2. 学生課業務に関する書類等の整理を行い、効率的に業務遂行できるように努める | |
| DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。 | |
| 1. 関係職員の名前や職位を把握することができた。 2. 学生課フォルダ内の一部ファイルをエクセルの数式等を使って改善し、簡単に作業ができる環境を整えた | |
| CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。 | |
| 1. 自己評価「 S・A・B・ □ ・D 」 職員の名前等は覚えることができたが、コミュニケーションをうまく取れなかった。 わからないことばかりだったが、それを誰に聞けばいいのかわからないことが多くあった。 | |
| 2. 自己評価「 S・A・ □ ・C・D 」 作業自体は早く進めることができたが、周りの人に指摘されて初めて、やらなければならない仕事に気づくことがあった。 | |
| ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。 | |
| 1. 周囲の状況に目を配る余裕をもって仕事をし、周囲との積極的なコミュニケーションを図る 2. やった仕事に関して、引継書に載っていないことも多かったので、逐一引継ファイルを更新し、来年度以降の仕事に活かせるようにする。 | |

| 平成29年度 「藤田 紫織」年次報告書 | |
|---|-------------|
| 区分： 学科コース・委員会等・ 事務局等 ・教職員個人・その他（ ） | |
| 部署名：事務局 | 職名：事務（入試広報） |
| PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。 | |
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 優先順位の高い業務から、迅速かつ効率的に処理するように努める。 2. 学生募集に係る最新情報を収集し、資料として整理する。より充実した広報活動、募集活動を行う。 3. 計画性を持って業務を遂行する。 | |
| DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。 | |
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 事前に予測できる業務は、早めに準備しておく。 業務に遅れが出ないように、年間スケジュールをこまめにチェックする。 2. 学内の情報を資料としてだけでなく、本学 HP などに最新情報を掲載する。 3. 学内行事前（オープンキャンパス等）は、昨年度のデータを参考にチェックリストを作成し、業務を計画的に行う。 | |
| CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。 | |
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 自己評価「 S・A・ⓑ・C・D 」 入試広報室の業務と庶務課の業務の繁忙期が重なり、事前に準備をしても慌しく業務を行い、例年通りとなってしまった。 2. 自己評価「 S・A・ⓑ・C・D 」 本学 HP には、入試広報を中心とした最新情報を掲載することができたが、ガイダンス等で配布する資料が、デザインはそのままで内容を見直すだけで終わってしまい、資料の見た目の変化をつけることが出来なかった。 3. 自己評価「 S・Ⓐ・B・C・D 」 学内行事など、昨年のデータを参考に計画を立て、入試広報室長と協力して大きなトラブルなく終えることができた。 | |
| ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。 | |
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 繁忙期における業務の効率化を図る。 2. 配布資料・本学 HP への最新情報の掲載とともに、インスタグラムなどの SNS を活用し、より充実した広報活動、学生募集活動を行う。 3. 計画的に業務を進めるよう努める。 | |

| 平成29年度 「伊藤 理恵子」年次報告書 | |
|---|-------|
| 区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ） | |
| 部署名：図書館 | 職名：司書 |
| PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。 | |
| 1. 学生・教職員の読書活動及び学習(実習)活動の支援 2. 学生・教職員の図書館利用促進 3. 学生・教員図書選定の実施 | |
| DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。 | |
| 1. 学内電子掲示板及び図書館ブログにて、イベント告知・新着推薦図書などを掲示 2. 長崎県大学図書館協議会 合同企画の参加型ゲームの実施。 季節ごとのテーマに沿った図書の展示・館内の飾りつけ 3. 前期・後期 各1回ずつ、学生に直接書店に出向いてもらっての学生選定図書の実施 | |
| CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。 | |
| 1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 学内掲示板及び図書館ブログ以外にも、スタッフメールなどで教員の先生方にも改めて告知し、授業などで図書館を利用していただけようにする。 | |
| 2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 イベント実施や季節に合わせたテーマや館内飾りつけなど、居心地の良い整備された環境で行えるようにする。 | |
| 3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 学生選定図書の実施により、学生が読みたい図書・興味のある図書が購入でき、蔵書のジャンルの幅が広がった。 | |
| ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。 | |
| 1. 教員の先生方と連携し、授業で図書館を利用していただいたり、学習に役立つ図書を選定図書で購入する。 2. 学生・教職員が来館しやすい図書館にするため、不要図書の除籍などの館内整備を行う 3. 引き続き学生選定図書を年2回実施して、学生・教職員に必要な図書を購入する | |

平成 29 年度 「海保 佐知子」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ **事務局等** ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名：寮

職名：寮監長 海保 佐知子

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 集団生活に於いての規則の重要性・自治能力の育成。
2. 役員へのリーダーシップの育成。
3. 短大・高校との情報共有

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

2. 教員と連携を図りながら共同生活の見直しをさせ、自ら改善していく力を育成する為、数回のミーティングを実施。
2. 月1回の代表者会議を実施。
3. 逐一問題発生時に於いての各部署への報告。

CHECK (検証)： 成果を測定 (量的・質的データ) し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□ (囲み線) を付ける。

1. 自己評価「 S・A・B・**□**C・D 」
数回のミーティングを実施したが、残念ながら持続しなかったので根気強い指導が必要だ。
2. 自己評価「 S・A・B・**□**C・D 」
リーダーとしての自覚がなかったので機械があれば研修会等へ参加させたい。
3. 自己評価「 S・**□**A・B・C・D 」
相互の情報を得る事で様々な判断材料になり問題解決へと続かった。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 共同生活に於いての規則の重要性と意識の向上、自治能力の育成。
2. 役員と常に連携を取りながらリーダーとしての自治能力の育成。
3. 今後も密な情報共有を図りたい。

平成 29 年度 「海保 都恵子」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ **事務局等** ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名：寮

職名：副寮監 海保 都恵子

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 寮内及び周辺環境の美化。
2. 共同生活に於ける規則遵守の意識の育成。
3. 環境に馴染めない寮生を把握し積極的にコミュニケーションを図る。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 環境美化に対する意識の向上を育成。
 - ・掃除の徹底
 - ・周りに花がある生活 (女子寮なので玄関に小花を植え、ロビー、洗面所等)
2. 共同生活に於ける規則の重要性を意識させる為教員の助言を頂き数回に渡りミーティングを実施。
3. 教員と連携を取りながらのサポート。
 - ・精神的疾患又家庭的にも問題を抱えている学生だったので、注意深く見守り少しでも自立できるよう働きかけを行った。

CHECK (検証)： 成果を測定 (量的・質的データ) し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□ (囲み線) を付ける。

1. 自己評価「 S・A・B・・D 」
家庭環境の違いからか、整理整頓能力に欠ける子が多いが根気強く指導していきたい。
2. 自己評価「 S・A・B・・D 」
ミーティング後は少しの間は守られるが持続しなかった。
3. 自己評価「 S・A・B・・D 」
・精神的疾患を持っており、食事が摂れない状態になった為、残念ながら退寮となった。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 共同生活に於ける個々の
2. 規則の重要遵守の意識の向上。
3. 寮生 1 人、1 人を把握して

平成29年度 「大場 恵美」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ **事務局等** ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名：寮

職名：副寮監

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 寮生の支援
2. 寮職員の情報共有

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

2. 寮生の支援については、規則を元に指導と、学生部長や寮務委員会の先生方に規則などを守らない寮生に面談等、指導をしてもらい、寮生が自ら変わって行くように持って行く。
2. 引継書、メモ等に必ず、記入し、口頭でも連絡するようにした。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・A・**□B**・C・D 」
注意をしても、全く聞いてくれない子がいて、対応に苦慮したので、もっと最初から、厳しくした方がよかったですのではないかと思います。
2. 自己評価「 S・**□A**・B・C・D 」
多忙な時は口頭のみになりがちなので、必ず、メモを残すようにしたい。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 最初が肝心なので、規則等をしっかりと理解するよう努める。
2. 寮行事等、自主的にかかわらせることによって、責任感を持たせる。
3. 教職員、寮職員との情報共有の強化をする。

**平成29年度
「研究活動報告書」**

平成27年度～29年度 専任教員の研究活動状況表

| 氏名 | 職位 | 研究業績 | | | | 国際的活動の有無 | 社会的活動の有無 | 頁 |
|-----------|-----|------|-----|--------|-----|----------|----------|-----|
| | | 著作数 | 論文数 | 学会等発表数 | その他 | | | |
| 橋口 亮(S) | 教授 | 0 | 3 | 0 | 5 | 無 | 有 | 87 |
| 森 弘行(L) | 教授 | 0 | 5 | 0 | 0 | 無 | 有 | 88 |
| 長尾 久美子(F) | 教授 | 0 | 2 | 0 | 3 | 無 | 有 | 89 |
| 白石 景一(Y) | 教授 | 0 | 3 | 0 | 3 | 無 | 有 | 90 |
| 草野 洋介(S) | 教授 | 1 | 5 | 12 | 15 | 有 | 有 | 91 |
| 中澤 伸元(Y) | 教授 | 0 | 0 | 15 | 5 | 無 | 有 | 92 |
| 松尾 公則(Y) | 教授 | 0 | 3 | 2 | 0 | 無 | 有 | 93 |
| 武藤 玲路(L) | 准教授 | 0 | 9 | 1 | 1 | 無 | 有 | 94 |
| 島田 幸一郎(Y) | 准教授 | 0 | 3 | 0 | 1 | 無 | 有 | 95 |
| 濱口 なぎさ(L) | 准教授 | 0 | 4 | 0 | 2 | 無 | 有 | 96 |
| 山口 ゆかり(S) | 准教授 | 0 | 5 | 0 | 0 | 無 | 有 | 97 |
| 植木 明子(F) | 講師 | 0 | 2 | 0 | 0 | 無 | 有 | 98 |
| 古賀 克彦(S) | 講師 | 0 | 4 | 0 | 3 | 無 | 有 | 99 |
| 中村 浩美(Y) | 講師 | 0 | 1 | 14 | 0 | 無 | 有 | 100 |
| 田川 千秋(F) | 講師 | 0 | 2 | 0 | 0 | 無 | 有 | 101 |
| 本村 弥寿子(Y) | 講師 | 0 | 5 | 2 | 0 | 無 | 有 | 102 |
| 荒木 正平(F) | 講師 | 0 | 8 | 4 | 0 | 無 | 有 | 103 |
| 福井 謙一郎(Y) | 講師 | 0 | 4 | 1 | 1 | 無 | 有 | 104 |
| 光武 きよみ(Y) | 講師 | 0 | 7 | 2 | 3 | 無 | 有 | 105 |
| 江頭 万里子(L) | 講師 | 1 | 5 | 1 | 0 | 無 | 有 | 106 |
| 樋口 誠(Y) | 講師 | 0 | 1 | 3 | 0 | 無 | 有 | 107 |
| 昆 正子(Y) | 助教 | 0 | 5 | 3 | 0 | 無 | 有 | 108 |
| 山本 尚史(Y) | 助教 | 0 | 9 | 3 | 12 | 無 | 有 | 109 |
| 蛸原 正貴(Y) | 助教 | 0 | 7 | 2 | 0 | 無 | 有 | 110 |

平成 29 年度 (2017 年度) 研究活動報告書

【学科名またはコース名】生活創造学科 栄養士コース 【職名】 教授 【氏名】 橋口 亮

【研究の題目】トランスグルタミナーゼを用いたクジラソーセージの研究

【研究の概要】

すでに、5種類のトランスグルタミナーゼ製剤を配合してクジラのソーセージを試作している。これまでの結果では、トランスグルタミナーゼの配合が多い2種類のトランスグルタミナーゼ製剤に結着性を高める効果がみられている。そこで今年度は、2種類のトランスグルタミナーゼ製剤の至適温度、時間、加熱温度など条件を求める実験を行った。実験方法と結果は、下記のとおりである。

1. 実験方法

原料のクジラ肉は、冷凍した胸筋付近の赤身肉である。クジラ肉は、5°Cの流水で解凍後、0°Cの水中に12時間放置し血液を含むドリップを除去し、亜硝酸塩を含む塩漬剤をすりこみ、5°Cの冷蔵庫で3日間塩漬した。塩漬後のクジラ肉は、トランスグルタミナーゼ製剤を添加し、ソーセージパテを調製した。ソーセージパテは、トランスグルタミナーゼの至適温度である40°Cで60分および90分放置した後、75°Cの温湯に30分入れ殺菌を行った。

殺菌後のソーセージパテは、テクスチャーアナライザー、測色色差計などを用いて硬さ、弾力性、色などを測定し、トランスグルタミナーゼの効果を検討した。

2. 結果

表1と2にソーセージパテの食感と色を示す。加熱後のソーセージパテの硬さは、水晒ししていない試料が水

表1 加熱後のソーセージパテの食感

| 測定項目 | 試料 | 水晒し 有 | | 水晒し 無 | |
|--------|----|-------|------|-------|------|
| | | 60分 | 90分 | 60分 | 90分 |
| 硬さ (N) | | 46.6 | 47.3 | 77.9 | 80.5 |
| 弾力性 | | 16.4 | 16.4 | 16.2 | 16.4 |
| 脆さ | | 6.2 | 6.1 | 5.9 | 6.2 |

表2 クジラ肉の塩漬肉および加熱後のソーセージパテの色

| 測定項目 | 試料 | 水晒し 有 | | 水晒し 無 | | | |
|------|------|-------|------|-------|------|------|-----|
| | | 塩漬肉 | 加熱後 | | 塩漬肉 | 加熱後 | |
| | | | 60分 | 90分 | | 60分 | 90分 |
| L* | 24.9 | 50.2 | 52.6 | 30.3 | 43.0 | 44.3 | |
| a* | 11.3 | 17.8 | 15.6 | 2.8 | 16.7 | 16.4 | |
| b* | 3.7 | 8.1 | 6.8 | 0.5 | 6.3 | 6.1 | |

晒した試料よりかなり高い値を示した。そして、両試料とも、トランスグルタミナーゼを反応させるための放置した時間が長いほど硬くなった。次に、ソーセージパテの色の変化を見ると、加熱後は、水晒した試料が水晒ししていない試料より赤く発色していることがわかった。なお、加熱後のソーセージパテの風味は、水晒した試料が明らかにクジラ特有の臭いが少なく、官能的に優れていた。以上の結果より、トランスグルタミナーゼの効果は若干弱くなるが、クジラの赤身肉は、塩漬する前に低温で水晒しを行い、血液を含むドリップを除いた後、トランスグルタミナーゼの反応時間を60分以上とることが加工の条件になると考えられた。今後は、ソーセージに加工し商品化について検討したい。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】生活創造学科ビジネス・医療秘書コース 【職名】教授 【氏名】森 弘行

【研究の題目】

1. 情報処理教育に関する研究
2. 毛髪ミネラルを用いたアトピー性皮膚炎発症予測モデルの改良

【研究の概要】

1. 情報処理教育に関する研究

学生の学修支援のためのデータベース構築を継続している。同時に全学的な学務システムの整備も行われているが、データや機能が未整備のものもあり、相互のデータ移行作業を行うことで、業務を補完するような形態で利用されている。学務システムでは、学生は履修登録のみで、学生ポートフォリオは利用できず、自分の成績の確認ができない。一方、本データベースでは学生が自身の成績を閲覧することはできるが、学内の端末からのみに制限されている。そのため、定期試験後長期休暇となる学生にとって、特に遠方から試験結果の確認のために学内の掲示板を見に来なければいけないことに不満もあった。

学務システムの開発を待たずに、このような不便さを解消するため、学外からでも学生が成績を確認できるシステムを急遽開発した。できる限り最新の状態で検索できるよう、学務システムからダウンロードできる Excel 形式の成績データをできる限り操作を加えることなく利用することにし、機能もユーザー認証後すぐに成績と平均、GPA、取得単位数が表示されるだけにとどめた。当初は 17L の学生のみを対象としていたが、現在は全学生利用可能である。

2. 毛髪ミネラルを用いたアトピー性皮膚炎発症予測モデルの改良

大阪大学山田知美准教授、他との共同研究。平成 17 年 11 月からの 1 年間に福岡市で出産した母子をコホートとして、毛髪中のミネラル 32 種類（体内ミネラル量を推定する代替指標）とアトピー性皮膚炎との関連を調査し、産後および生後 1 か月の母子の毛髪から、生後 10 か月時点でのアトピー性皮膚炎発症を予測するモデルを構築している。毛髪サンプルは本学で保管しており、ミネラル量測定のための標本作成、岩手医科大学で測定したミネラル量データを統計処理用に加工およびそのプログラム開発を担当。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 生活創造学科介護福祉士コース 【職名】 教授 【氏名】 長尾久美子

【研究の題目】 1 介護福祉士国家試験全員合格と実践力の修得に向けた教育方法・対策について

【研究の概要】

目的

介護福祉士国家試験への全員合格に向け、介養協主催学力評価試験の成績やキャリアアップセミナーの成績データ等を基に課題や効果的な方策を検証し、国試に向けた授業方法の構築に役立てる。

方法

- 1 「キャリアアップセミナー」の授業の成績、学力評価試験（11月28日）の成績を基に検証した。
- 2 成績低位学生の年間の学習進捗状況や課題の把握を行った。

結果 H29 年度 学力評価試験成績（H29. 11. 28 実施 介護福祉士養成施設協会主催）

| 得点（125 点満点） | | ランク | 本学 人数（%） | 全国（%） |
|-------------|--------------|-----------|-------------|--------------|
| 本学平均 | 89.14 点 | A（80 点以上） | 6 名（85.71%） | 74.15% |
| 全国平均 | 87.34 点 | B（60 点以上） | 1 名（14.29%） | 22.24% |
| 本学順位 | 131 位/ 383 校 | C（59 点以下） | 0 名（0%） | 3.61% |
| | | 計 | 7 名（100%） | 5234 名（100%） |

H28 年度 卒業時共通試験成績（H29. 2. 15 実施 介護福祉士養成施設協会主催）

| 得点（125 点満点） | | ランク | 本学 人数（%） | 全国（%） |
|-------------|-------------|-----------|--------------|--------|
| 本学平均 | 92.80 点 | A（80 点以上） | 13 名（86.67%） | 70.39% |
| 全国平均 | 86.67 点 | B（60 点以上） | 2 名（13.33%） | 25.94% |
| 本学順位 | 89 位/ 383 校 | C（59 点以下） | 0 名（0%） | 3.68% |
| | | 計 | 15 名（100%） | 100% |

①昨年度より平均点が 3.66 点下がり、順位も落ちた。一般学生 4 名全員の得点が低かった。

②最低点は 76 点で、全員合格基準（75 点）に達していたが、一般学生 4 名とも 90 点以下であった。

まとめ

- ①全体の進め方として、過去問のマンネリ化が見られたので、基礎的項目徹底理解を図ることが必要。
- ②年間を通じて学生の自主性・達成意欲を引き出すことができず、理解力が高い社会人と基礎的理解ができていない一般学生のずれを解消できないままであった。
- ③自学の習慣化（特に、一般学生）が十分でなく、計画的な学習ができなかった。
- ④今後に向けては、①徹底した基礎的理解を深める授業の実施、②自主学習の習慣化の支援、③成績低位学生への年間を通じた個別支援の継続、④傾向と対策の徹底分析と学生への還元に取り組む。

【研究の題目】 2 「社会福祉」受講生の「暮らしに関する意識」についての一考察

【研究の概要】

《目的》 社会福祉は、社会生活における生活課題に対応する支援の仕組みとして位置付けられている。

学生は、日頃の暮らしや社会状況との関わりのなかで、社会福祉の法制度の理念、しくみ、援助方法・技術、動向などを学ぶことが求められる。本研究は、学生の「暮らしに関する意識」について調査し、「社会福祉」受講生の現状と課題を明確にして、今後の社会福祉の教育の推進に資することを目的とした。

《方法》 「社会福祉概論」受講生（栄養士コース 2 年生 40 名）と「社会福祉」受講生（幼児教育学科 2 年生 102 名）を対象に、後期授業の初回に同様のアンケート調査を行った。

《結果》 今回の調査では、「Q1 暮らしやすい社会だと思いますか」に対して、S の学生と Y の学生間で、Yes・No の回答率が大きく異なり、S の学生は、Yes の回答が高く、Y の学生は No の回答が高いことが分かった。その理由について、自由記述のカテゴリー分類をしたところ、Yes と答えた学生は、「自分が不自由なく、普通の生活ができている」ことや「戦争がなく、自由で、社会のルールがあり安定している」など、ごく身近な自分の生活や、一般的な社会状況を基準に「暮らしやすい社会」という判断をしていることがわかった。Yes と答えた学生の判断理由は、S・Y の学生とも同様の傾向が見られた。この結果、社会への関心や認識レベルが授業展開に大きく影響するため、各学科コースの学生に求められる内容を、学生の状況に合わせながら、関心を持てるような授業を行うことが必要であることが把握できた。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 幼児教育学科 【職名】 教授 【氏名】 白石 景一

【研究の題目】

1. 音楽表現における感性・知性・理性・思想等などの運動・呼吸・音色感などとの関係について
2. 保育者養成校の音楽教育における教材研究および指導法について

【研究の概要】

研究題目 1. の概要→チェロ奏法・指導法およびアンサンブル法などによる

研究題目 2. の概要→(1) 音楽教育における DTM などの利用について

研究題目 2. の概要→(2) 保育者養成校における音楽初心者への基礎能力教育について

※長崎女子短期大学 中村浩美 講師（研究題目 2 (2) について）

【研究活動の報告】

研究題目 1. のテーマについては、チェロ奏法・指導法およびアンサンブル法などによる取組である。昨年度も、引き続き J. S. Bach 作曲 無伴奏チェロ組曲に取り組みながら、様々な小品などについても取り組んだ。

平成 29 年 10 月 1 日、学園創立記念日での記念演奏会に於いて同第 1 番ト長調 (BWV1007) より「プレリュード」を演奏発表した。

来年度も、引き続きバッハの無伴奏チェロ組曲の奏法などについて取り組みたいが、年齢的な要因もあるかと思うが、無伴奏チェロ組曲は、四六時中、特に左手指を酷使するため今年度 12 月頃から左手中指がいわゆるバネ指となり、整形外科に於いて治療中である。経過を見て場合によっては手術をすることになるかもしれないとのことであるが、左手が微妙な音程に重要な関わりをするため、術後の可能性をよく調べた上で判断する必要がある。

また、アンサンブル法については、30 年以上にわたり、卒業研究ゼミを通じ研究を重ねた経験を元に、平成 30 年 3 月 24 日の本学「春のキャンパス見学会」において、ヨナーソン作曲「カッコウワルツ」を幼児教育学科教員全員と参加の高校生とのアンサンブルで体験授業を楽しむことができた。「カッコウワルツ」の編曲にはノーテーターソフト「スコアメーカー」(KAWAI)を使用した。

研究題目 2. のテーマについては、(1) 音楽教育における DTM などの利用について、(2) 保育者養成校における音楽初心者への基礎能力教育についてであるが、本年度は(2)について昨年度に続いて本学紀要第 42 号に、「保育者養成校における音楽指導法の研究—第 10 報—保育内容 領域「表現」の専門的事項に関する科目「子どもと表現」の指導に向けて～」のテーマで投稿した。「幼児音楽指導法」が「子どもと表現」に改定されるため、再度当該科目の授業内容・構成について検討し、「授業の目的」、「到達目標」、保育内容領域「表現」の捉え方、子どもの表現と音楽表現活動の意義、シラバスの作成について、保育内容領域「表現」と他領域とのかかわり、音楽づくり（小学校の教科とのつながり）簡易楽器の取り扱い方や楽器の活用と指導などについて、第 9 報に続き考察。

(1) の DTM などを利用したマルチメディアによる教育システムについてはハード、ソフトの両面において刻々と進化し続けており、何年かするとまた、格段と優れたシステムが開発され、システムごと変更しなくては追いつかないような状況になる可能性が高いため、導入は、非常に難しいようである。ノーテーターソフトの「シベリウス」(AVID)「フィナーレ」(Make Music)「スコアメーカー」(KAWAI)の利用についてそれぞれの汎用性、特徴、スキャン機能、DAWソフトとの相性などについて、実際に使用しながら、引き続き簡単な方法を探っていきたい。

以上

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 栄養士コース 【職名】 教授 【氏名】 草野洋介

【研究の題目】 1) 長崎県島嶼地区におけるアロスタティック老化指数の全身的協関

2) 長崎県民の健康寿命の延伸の研究

【研究の概要】

- 1) 本年度は主として平成 27 年度に下崎山地区で 5 年前に行った対象者に対するアロスタティック老化指数の全身的協関を探るための健診の結果解析を行っている。今後解析結果をもとに 5 年前の健診から個々の老化の進行度の要因の解析を行っていく。

- 2) 男性 45 位女性 39 位である長崎県の健康寿命順位がなぜ低いかについて、長崎県健康栄養調査、長崎県生活習慣調査などの調査結果および文献の解析により、ロコモティブシンドロームの関与、その要因として運動量の少なさがあることを明らかにし、九州農村医学会総会会長講演、日本人口学会九州地域部会や各種研修会で発表を行った。

- 3) 九州農村医学会学会長を務めた。

- 4) 英国ラフバラーで開催された国際生理人類学会議において共同研究者の福岡女子大小崎智照准教授と発表した。

- 5) 九州農村医学会研究奨励費を獲得した。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 幼児教育学科 【職名】 教授 【氏名】 中澤伸元

【研究の題目】 学生の願望を叶えるために

【研究の概要】

こうなりたい学生の願望

「もっと歌が上手になりたい。ピアノが上手になりたい。」

「園児に好かれる表情豊かな保育者になりたい。」

「カリスマ保育者になりたい。」など希望がなかなか実現しないのはなぜか？についての研究

学生は、現状の意識をどの次元と繋がっているか？が問題。

過去思考、現在思考、未来思考のどの次元につなげているかで結果は違ってくる。

過去思考、現在思考学生の思考行動を変えるプログラム。

現状のコンフォートゾーンからゴールを叶えるコンフォートゾーン移行させる方法と技術。

思考は現実化する！」ことの誤解と正解について。

問題に興味関心を持ち取り組む。まずは自己イメージ、自己信頼の確立。感情の使い方。

自己信頼を失う材料について

自己否定、他者否定、現状否定、未来否定、無価値観、比較、犠牲者意識、恐れ、執着、後悔、不安、など否定的な意識を学生の内側から取り除く作業。

学生の否定的意識取り除くためには？

想い心と体、高い波動の作り方。量子力学の理解。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 幼児教育学科 【職名】 特別専任教授 【氏名】 松尾公則

【研究の題目】

1. 特別支援学校での生きもの授業
2. 長崎県における両生類の分布

【研究の概要】

1. 特別支援学校での生きもの授業
長崎特別支援学校の小学部 4 年生 4 名と 3・4・5 年生の 4 名に対し、動物の授業を実施した。

1 回目

日時：平成 29 年 7 月 3 日 3・4 限目（10：30～12：10）

対象生徒：小学部 4 年生 4 名（男 2・女 2）

2 回目

日時：平成 29 年 10 月 22 日 3・4 限目（10：30～12：10）

対象生徒：小学部 3・4・5 年生 4 名

比較的重度の障害を持つ児童に対して、多くの本物の動物を持参し、本物に触らせるという授業を展開した。1 回目は一人で担当したためかなり困難を感じたが、2 回目はゼミ生 5 人に手伝ってもらったので、スムーズに進行した。内容については紀要に報告しているが、次年度以降も更に工夫を凝らしながら実施していきたい。

2. 長崎県における両生類の分布

長崎県に生息する両生類 16 種について分布状況と毎年の推移を調べている。今年は、対馬だけに生息するチョウセンヤマアカガエルの状況について報告したい。チョウセンヤマアカガエルは環境省でも絶滅危惧種に指定しており、長崎県でも高いランクで指定している。

チョウセンヤマアカガエル *Rana uenoi*

環境省：準絶滅危惧種

長崎県：絶滅危惧 I B 類

《減少の理由（絶滅危惧に指定される理由）》

成体は山林で生活するが、産卵は山際の水田や湿地で行なわれる。対馬は放棄される水田が多く、また、現在耕作されていても圃場整備がすすみ乾田化が進んでいる。産卵は冬季に行われるが、冬季の水場が極端に減少しているため幼生の生息場所がなくなり減少の一途をたどっている状況である。

《産卵状況の調査》

産卵期である 2 月に対馬を訪問し湿地や水田の産卵状況を調査した。また、10 月に 2 回訪問し、成体の分布状況を調査した。

卵塊調査

上対馬の 10ヶ所で卵塊を確認したが、ほとんどが 10 数個の卵塊であった。100 個以上の卵塊がある場所は 2ヶ所しか確認できなかった。多くの産卵場所が、永続的な産卵が不可能と思われる状況である。下対馬でも調査を実施したが、卵塊は確認できなかった。

成体調査

夜間、車で走りながら道路上の成体確認を実施したが、同所的にすむツシマアカガエルしか確認できなかった。

考察

対馬だけに生息するチョウセンヤマアカガエルは産卵場である水場の減少により、絶滅に瀕している。地元や環境省との連絡を取りながら調査を継続し、今後何らかの対策を講じたいと考えている。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 ビジネス・医療秘書コース 【職名】 准教授 【氏名】 武藤 玲路

【研究の題目】 女子短大生のジェネリックスキルと学修意欲に関する報告

【研究の概要】

今年度は、「短期大学のビジネス系分野」について、「ジェネリックスキル」に関する標準化された外部検査と、「学修意欲」に関する行動を自己評価する学生調査を実施し、ビジネス系分野の学修の成果と課題、強みと弱み、対策と展望について検討することとした。具体的には、学生の職業適性と社会人基礎力、基礎能力、職業興味、就職活動、および学修時間と学修行動を測定し、経年変化や全国平均と比較検討することを目的とした。以下に各種検査・調査の結果について述べる。

(1) ビジネス系分野の特色と成果・強み

①職業適性は2年次にやや増加しており、その中でも比較的高い職業分類は、「サービス系 2.9」、「セールス系 2.6」、「オフィス系 2.5」である。

②また、社会人基礎力で能力要素が比較的高いのは、「働きかけ力 3.2」、「傾聴力 3.1」、「情報把握力 3.1」である。従って、ビジネス系分野の教育内容が職業適性や社会人基礎力の学修成果に現れていることが分かる。

③さらに、基礎能力も2年次にやや増加しており、全国平均よりある程度高いことから、短大教育による学修成果が顕著に現われている。基礎能力が比較的高いのは、「表現 3.7」、「知覚 3.3」、「言語 3.2」であり、言語能力の学修支援は十分成果を上げているようである。

④また、職業興味が比較的高い志向や分野は、「ヒト志向 3.2」、「データ志向 3.1」、「対人 3.2」、「事務 3.1」で、ここでもビジネス系の教育内容の成果がある程度現れていると言える。

⑤さらに、就職活動の到達度を示す充電レベルは、入学後1年半で大幅に増加しており、キャリアアップのセミナーや二者面談などの就職支援の成果が十分現れている。比較的高い項目は、「希望職種の決定」、「友だちと就職の話をする」、「就活マナーの理解 1.8」、「友だちと就活の話をする こと 1.6」である。

(2) ビジネス系分野の課題・弱みと対策

①職業適性には入学後1年半の間に顕著な変化はなく、全国平均より低いレベルであることから、全体的な学修支援のレベルアップが必要であると言える。

②また、社会人基礎力も入学後1年半であり変化はなく、全国平均より低い。特に低い能力要素は、「創造力 2.6」、「主体性 2.7」、「課題発見力 2.7」、「計画力 2.7」、「ストレスコントロール力 2.7」で、アクティブラーニングに関する能力の育成が課題である。従って、アクティブラーニングの積極的な導入や多様な教授法の研究を進める必要がある。

③さらに、基礎能力が低い能力は「計算 2.8」であり数的能力に関する更なる学修支援も必要である。

④また、職業興味は入学後1年半の間にあまり変化はなく、2年次の自己評価も全国平均より低い。

⑤さらに、就職活動のレベルが低い項目は、「筆記試験対策 0.1」、「新聞を読むこと 0.6」、「インターンシップ参加 0.6」、「自己分析 0.8」、「業界研究 0.8」である。従って、受験対策や自己分析、業界研究などの就職試験前の準備学修の強化が必要であると言える。

⑥一方、授業と授業以外の家庭学修の学修時間には、学生間でかなりの差があり明らかに二極分化していると言えるが、授業以外の勉強や宿題の時間については全体的に2年次になって著しく減少している。

⑦さらに、授業の課題などの受動的な学修は全体的に実施しているが、その他の能動的・主体的な学修に取り組んでいる学生の割合は極端に少ない。今後はアクティブラーニングなどの授業の質的転換に積極的に取り組み、学生の自主的学修の習慣を促進していく必要があると思う。

(3) 今後の展望

①職業適性と職業興味、就職活動が全国平均よりも低く、授業外学修と能動的学修を行う学生の割合が特に少ないのは、カリキュラム編成とアクティブラーニングの運用方法に要因があると考えられる。今後は、問題解決学習法（PSL、Problem-Solving-Learning）や課題解決型学習（PBL、Project-Based Learning）を取り入れた1年次からのプレ・ゼミナールの導入などのカリキュラムを再検討するとともに、ディスカッションやプレゼンテーション、オフィスアワー、FD研修会等を活用して、教育の質的転換に取り組み、学生の生きる力と社会貢献力を身につけさせる必要がある。

②また、3つのポリシーの策定と運用のガイドライン、当該短大の教育システムの具体的な学修成果に基づいて、入試問題の観点と尺度、入学前課題、初年次教育、教養教育、職業教育について、より明確な整合性・一体化と、到達目標・査定方法・実施方法を検討していく必要があると思う。 以上

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 幼児教育学科 【職名】 准教授 【氏名】 島田 幸一郎

【研究の題目】 幼稚園におけるインクルーシブ教育の課題 ～教育実習からみた「特別な配慮」～

【研究の概要】

1. 目的

平成 19 年度(2007 年度)の特別支援教育の制度化以降、幼稚園においては一人ひとりの教育的ニーズに応じたインクルーシブ教育が進展しつつある。本学学生が教育実習した幼稚園において、どのような障害児や気になる子どもがどの程度通園し、また今後の大きな課題となる「合理的配慮」に繋がる特別な配慮がどのように行われているかを、「身体・知的障害」「発達障害」「気になる子ども」に区分し、それぞれについて特別な配慮の内容や課題を実習後の学生のアンケート（3 年間）をもとに、長崎県教育委員会の特別支援教育体制整備状況調査資料を参考にして考察する。

2. 方法と内容及び留意点

(1) 方法

平成 26・27・28 年度の本学幼児教育学科 2 年生の教育実習後アンケート調査の分析をとおして、インクルーシブ教育の現状と合理的配慮に繋がる特別な配慮を考察する。

(2) 内容

アンケート調査にあたっては、「身体・知的障害」「発達障害」「気になる子ども」の 3 カテゴリーに区分し、それぞれ通園状況や配慮の有無と内容について集計する。

なお、配慮事項の内容については、「人的な配慮」「特性に対応した配慮」「物理的な配慮」「連携による配慮」の 4 点に大別する。

(3) 留意点

複数名が実習した幼稚園があり、全ての項目において集計が重複している。また、学生個々の障害に対する理解に差があり、各回答が事実を適切に反映しているのか判断できない。学生が直接関わった子どもの事例がある一方で、実習先での伝聞に基づく回答がある。

3. 結果

- (1) 「身体・知的障害」「発達障害」「気になる子ども」の割合については各年度とも大きな変化はないが、全体的な在園数が年度毎に増加してきており併せて障害の種別も多様化していることから、幼稚園が障害児を積極的に受け入れていることが分かる。
- (2) 発達障害である ASD や ADHD と診断されている子どもが少なからず存在する。また、気になる子どもの中には発達障害と考えられる子どもが多数存在していることが、アンケートの主な行動内容から窺い知ることができる。
- (3) ほとんどの幼稚園で障害の特性や行動の特性に応じた配慮がなされている。「身体・知的障害」に関しては「人的な配慮」が、「発達障害」「気になる子ども」に関しては視覚情報の優位性に着目した支援や自己効力感を高める支援など「特性に応じた配慮」が主となっている。
- (4) 学生アンケートや県教委の特別支援教育体制整備状況調査結果から、幼稚園において特別な配慮を必要とする子どもに対する理解や支援が徐々に進んできていることが分かる。反面、施設・設備に関わる「物理的な配慮」については低率に止まっており、基礎的環境整備が今後の大きな課題である。

4. まとめ

「共に生きる社会」の実現のためには、すべての子どもを地域の保育・教育の場に包み込むインクルーシブ保育・教育が重要な役割を果たすと考える。そのためにも、保育者は子ども一人ひとりの基本的人権の保障を基盤に子どもと関わるのが大事であり、その理念や核となる「合理的配慮」や「基礎的環境整備」の理解と推進に向け尽力することが求められる。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 ビジネス・医療秘書コース 【職名】 准教授 【氏名】 濱口なぎさ

【研究の題目】

1. 能動的学修の実践に関する研究
2. e-ラーニング教材に関する研究

【研究の概要】

1. 能動的学修の実践に関する研究

(1) 目的

担当する授業において、学生が受け身ではなく能動的に参加し、学んだ知識を実践できるための教材と指導法を研究している。

(2) 方法

①「オフィス情報演習」では平成 27 年度から平成 28 年度にかけて本学紀要で報告した内容を基に、グループ課題を模擬店の企画書作成の 1 つに絞って実施した。グループ編成は 2 人または 3 人であれば自由とし、「企画書の作成」「ポスターの作成（5W1H で必要な情報を含む）」「プレゼンテーションと質疑応答」「自己評価」を実施した。最終的に提出する企画書の様式（Word）を指定し、企画の目的や目標、収支予定など必ず記入する項目を定めた。また、グループ内で具体的な準備物や予算編成を話し合う際のツールとして使用するために、「学園祭準備管理票」というテンプレート（Excel）を教材として準備した。

②「ゼミナール」では平成 28 年度から引き続き「長崎と猫」をテーマとし、調査研究した結果をリーフレットとしてまとめるよう指導した。具体的には、「基礎的な情報収集」「現地調査・アンケート調査」「取材・掲載依頼」→「外部団体への校正依頼」「配布・意見収集」などの活動を行うよう指導した。

(3) 結果

①「自己評価」では「企画書作成」「プレゼンテーション」「チーム内貢献度」「他者評価」の 4 点を行った。「企画書作成」を例にとると、ほとんどの学生が「利益を出すことの大変さに気がついた」と回答していた。また、グループで話し合うことで「自分とは違う意見に気づいた」、「協力しながら取り組む力が付いた」という回答も多数みられた。模擬店の企画書作成という課題を通して、さまざまなことを「想像する」「予測する」「気がつく」きっかけが生まれており、その過程で Word や Excel、Internet Explorer 等のブラウザソフトを活用し、使いこなせるようになったことが伺える内容が多かった。また、今年度新たに使用した教材については、学生達の企画書作成において効果的に使用されていたようである。

「貢献度」については 2～3 人と少人数のグループ編成だったこともあり、それぞれに役割分担を決めて活動しており、巡回した際にも明らかに手を抜いている学生は見受けられなかった。「プレゼンテーション」と「他者評価」については、当日欠席した学生のグループが発表できず、翌週にずれ込んだため、他者との比較がしにくかったのが残念であった。

②今年度のゼミナールでは、昨年度の先輩から継続したテーマと言うこともあり、配属された学生達のモチベーションの維持に力を入れ、リーフレットという目に見える成果物を作ることを目標とした。作成したリーフレット「にゃがさきまっぷ」は、追加配布を希望されるなど取材先での評価も高く、長崎新聞にも掲載された。学生達は、自分たちで話し合い、取材先を選定し、現地に赴き、見聞きしたことをまとめ、十分すぎるほど時間をかけてリーフレットを作成することができたことから、自己評価でも達成感は高かった。しかしながらリーフレットの完成が 1 月になったことで、発表会の後に取材先に配布することになり、また、その際、情報の訂正が発覚するなど、2 月末まで対応に追われることになった。

さらに、3 月に行われた「ヒトとネコの共生をめざす地域猫セミナー」への参加依頼があったが、卒業式後の開催であったことから教員のみ参加となったのは残念であった。

今年度の課題としては、早め早めの活動計画の立案と、取材方法と記録、事後評価の収集が挙げられる。

- (2) e-ラーニング教材に関する研究については、今年度実施しなかった。

以上

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】生活創造学科 栄養士コース 【職名】准教授 【氏名】山口 ゆかり
 【研究の題目】トランスグルタミナーゼ製剤の添加がクジラ肉のソーセージパテに及ぼす効果について
 【研究の概要】

≪ 目的 ≫

私たちは、クジラ肉で加工したソーセージの製品化を目標として、実験を重ねている。クジラ肉は、結着力が弱く、独特の臭みがあるため、ソーセージに加工する場合は、弾力性の向上と食味の改善が求められる。すでに、5種類のトランスグルタミナーゼ製剤を配合したクジラ肉のソーセージを試作し、トランスグルタミナーゼの配合が多いものに結着性を高める効果がみられている。また、トランスグルタミナーゼの反応時間について実験したところ、ソーセージのゲル強度を高めるには、50分以上の反応時間を要することが明らかとなった。そこで今年度は、反応時間を60分と90分に延長した場合のトランスグルタミナーゼの効果と、クジラ肉特有の臭みを除去するための方法について検討するため、水晒しの工程を加えたソーセージパテを調製し、実験を行った。

≪ 方法 ≫

原料のクジラ肉は、冷凍した胸ひれ付近の赤身肉である。クジラ肉は、5℃の冷蔵庫で12時間解凍した後、3cm角に切り、2通りの前処理（1つは、ドリップを除き、3.7%の塩漬剤を振り込み、もう一方は、氷水に60分晒す操作を3回繰り返した後、同濃度の塩漬剤を振り込んだ）を行った。これを5℃の冷蔵庫で3日間塩漬した後、0.3%のトランスグルタミナーゼ製剤を添加してソーセージパテを調製した。ソーセージパテは、40℃で60分および90分放置した後、75℃の温湯に20分入れ、殺菌を行った。ソーセージパテの品質試験として、pH、水分率、水分活性を測定するとともに、加熱後のゲル化肉の水分率、水分活性、食感および断面の色を測定した。

≪ 結果 ≫

- (1) 水晒したクジラ肉と水晒していないクジラ肉で調製したソーセージパテのpHは、両者とも5.7程度を示し、トランスグルタミナーゼの活性に適した値（至適pH5.0~7.0）であった。
- (2) 加熱後のソーセージパテの水分率は、水晒したクジラ肉、水晒していないクジラ肉とも、トランスグルタミナーゼの反応時間が長いほど低下（水晒し有：69.9%→64.6%、水晒し無：70.8%→65.3%）したが、水分活性は、変化しなかった（水晒し有：0.89→0.89、水晒し無：0.90→0.92）。
- (3) 加熱後のソーセージパテの硬さは、水晒していないクジラ肉が水晒しているクジラ肉よりかなり高い値を示し、両者とも反応時間が長いほど硬くなった（表1）。

表1 加熱後のソーセージパテの硬さ

| 測定項目 | 試料 | 水晒し 有 | | 水晒し 無 | |
|--------|----|-------|------|-------|------|
| | | 60分 | 90分 | 60分 | 90分 |
| 硬さ (N) | | 46.6 | 47.3 | 77.9 | 80.5 |

- (4) 加熱後のソーセージパテの色は、水晒したクジラ肉が水晒していないクジラ肉より赤く発色した（表2）。

表2 クジラ肉の塩漬肉および加熱後のソーセージパテの色

| 測定項目 | 試料 | 水晒し 有 | | | 水晒し 無 | | |
|------|----|-------|------|------|-------|------|------|
| | | 塩漬肉 | 加熱後 | | 塩漬肉 | 加熱後 | |
| | | | 60分 | 90分 | | 60分 | 90分 |
| L* | | 24.9 | 50.2 | 52.6 | 30.3 | 43.0 | 44.3 |
| a* | | 11.3 | 17.8 | 15.6 | 2.8 | 16.7 | 16.4 |
| b* | | 3.7 | 8.1 | 6.8 | 0.5 | 6.3 | 6.1 |

- (5) 加熱後のソーセージパテの風味は、水晒したクジラ肉が水晒していないクジラ肉より臭みが薄く、嗜好的に優れていた。

今後は、水晒したクジラ肉をソーセージに加工し、品質に関する検討を重ねたい。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【コース】 介護福祉士コース 【職名】 講師 【氏名】 植木明子

【研究の題目】 地域交流活動を通しての学生の学びと課題 (4)

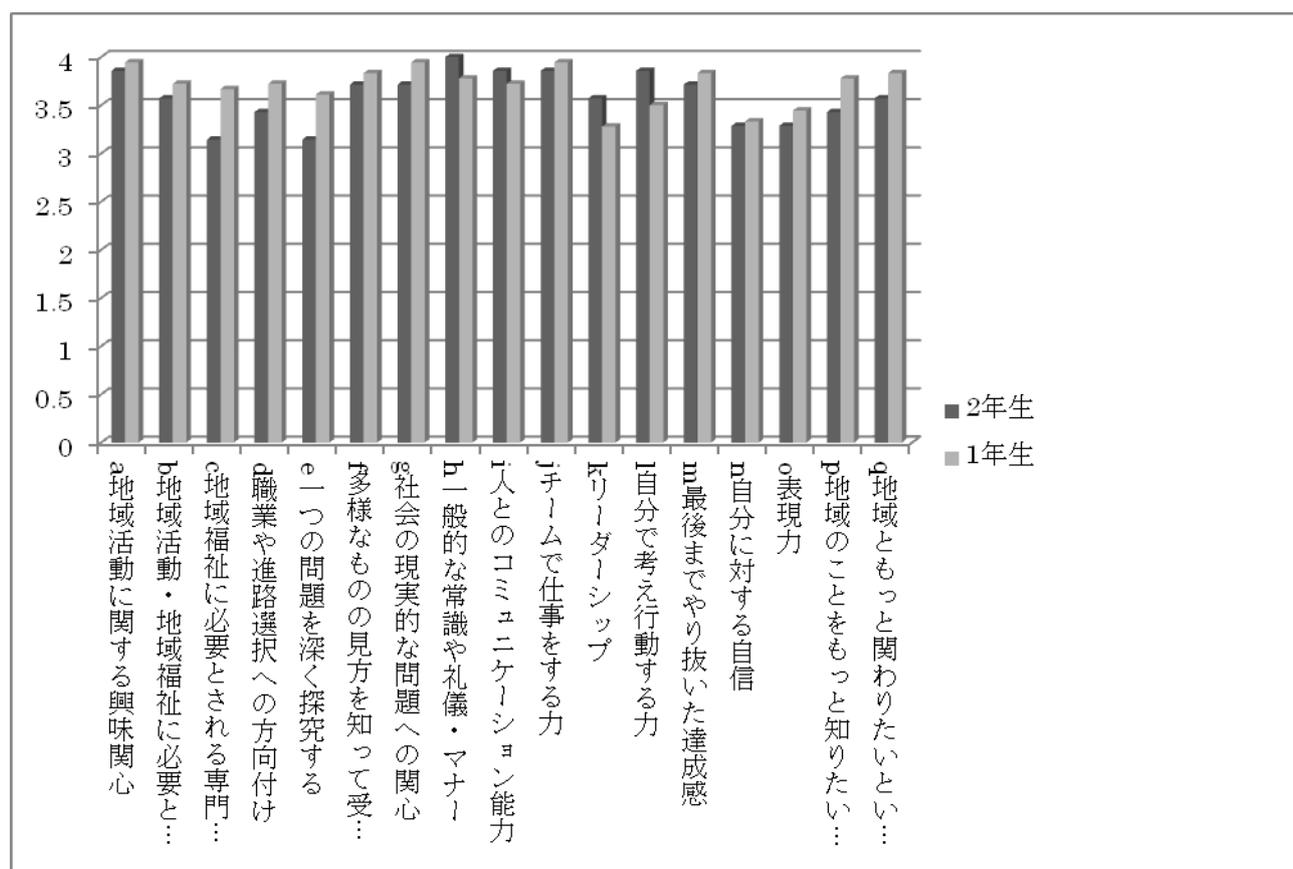
【研究の概要】 地域貢献活動として行っている介護福祉士コースの活動も今回を含め 4 回目となる。今年度は 1・2 年全学生の、社会人基礎力のスキルアップ、地域包括ケアシステムの理解を深めるつつ、地域住民の方々に喜んでもらえるよう、学生が責任を持って、なおかつ自主的・継続的な取り組みが行えるよう環境整備を行い、地域住民と協力体制を確保し実施する。あわせて、今年度は例年と違い、1・2 年の学生同士の協働が図れるような環境設定を検討する。

①本学近隣の自治会におけるサロン活動の内容を事前に伺い、活動の概要や実際、利用者の状況などについて把握を行う。・10月26日 小島・茂木地域包括センター・白木自治会長講話、リーダー学生と白木自治会長との打ち合わせ、1・2年学生との合同での打ち合わせ

②サロン活動内容を学生が検討・準備し交流活動を行う。楽し交流の中で参加者のリフレッシュを図り、地域住民のニーズなどについてお話を伺う。12月15日 白木公民館にて実施

③実施後の振り返り・学生アンケートを活用し、学びの意識化・定着を図る。・12月15日実施後のまとめ、1月30日まとめ、2月1日合同にて地域交流での学び発表会実施。最後にの社会人基礎力のアンケート実施。

【結果】 実施内容：体操・レクリエーション（フラワーホッケー）・手話うた（ふるさと／上を向いて歩こう）・アロママッサージ・茶話会・アンケート以上の内容を役割り分担しリーダー記録・ポスタープログラム・司会進行に別れ計画を実施した。地域の方が 16 名参加され、13 名にその日の活動の感想に合わせて日常生活の状況や困りごとなどアンケートに答えてもらった。参加者は大変喜ばれていた。その後、実施したことの振り返り、地域活動のまとめをおこない、2 月にまとめ発表会を実施した。ジェネリックスキルについては、5 ととても高まった、4 高まった、3 変わらない、2 低下した



1 ひどく低下したの評価で、17 項目について質問した。全体の平均値は 3.6 で平成 27 年度の値と変わりなかった。今年度は 1・2 年合同で行ったことで、1 年生が高い項目、2 年生が高い項目があり、全体では地域活動に関する興味関心 (3.92)、チームで仕事をする力 (3.92) がいずれも高かった。これからも地域活動したいという意見も多くあり、今後、活動の場を考えたい。今後、詳細をまとめ、発表する予定。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 生活創造学科栄養士コース 【職名】 講師 【氏名】 古賀克彦

【研究の題目】 ・間食が血糖値に及ぼす影響について ・長崎の正月料理に関する研究

【研究の概要】

●間食が血糖値に及ぼす影響について

・目的

間食が食後血糖値に及ぼす影響を調査を行った。

・調査の概要

健全な女子学生 5 名（19～20 歳）を調査対象とし、間食を食べた後の血糖値の変化について調査を行った。なお、対象者には事前に研究内容について説明を行い、同意を得て実施した。対象者は午前 9 時までに朝食を摂取し 4 時間以上絶食し、13 時より採血を行い空腹時の血糖値を測定し間食を摂取した。間食の分量は 200kcal を目安とし、1 回の喫食量を決定した。これらの食品の栄養価を表 1 に示す。血糖値の測定条件として、食事前と食後 30 分、食後 60 分、食後 90 分の血糖値を測定した。

・結果

各間食摂取前と摂取後 30 分、60 分、90 分後の血糖値の推移を以下に示す。空腹時の血糖値は平均 93.7 ± 10.0 mg/dl であり、どの間食でも同じほぼ同じ値であった。各間食摂取後の血糖値および標準偏差の推移は次のとおりである。今川焼食後 30 分の血糖値は 132.2 ± 11.8 mg/dl、60 分後は 153.2 ± 11.8 mg/dl、90 分後は 133.0 ± 14.6 mg/dl であった。シュークリーム食後 30 分の血糖値は 111.3 ± 6.4 mg/dl、60 分後は 118.8 ± 13.1 mg/dl、90 分後は 97.0 ± 11.2 mg/dl であった。カステラ食後 30 分後の血糖値は 138.5 ± 20.5 mg/dl、60 分後は 147.5 ± 19.3 mg/dl、90 分後は 130.8 ± 15.5 mg/dl であった。アイスクリーム食後 30 分の血糖値は 123.6 ± 11.3 mg/dl、60 分後は 109.6 ± 4.0 mg/dl、90 分後は 101.2 ± 5.0 mg/dl であった。ポテトチップス食後 30 分後の血糖値は 122.8 ± 11.7 mg/dl、60 分後は 126.4 ± 1.1 mg/dl、90 分後は 102.6 ± 8.5 mg/dl であった。プリン食後 30 分の血糖値は 125.0 ± 15.5 mg/dl、60 分後は 110.4 ± 10.4 mg/dl、90 分後は 105.2 ± 8.2 mg/dl であった。

・考察・まとめ

今回、間食が食後血糖値に及ぼす影響を調査した結果、①同エネルギーの間食でも炭水化物エネルギー比が高い食品で食後高血糖が起きやすいこと、②同エネルギーの食品でも脂肪エネルギー比が高い食品では食後高血糖が起きにくいこと、③同じ高脂肪エネルギー比の食品においても脂肪の乳化状態等、食品性状の違いにより、血糖値のピーク値や血糖値上昇速度に影響が見られることが判明した。

糖尿病の食事療法は多くの要因が血糖値に影響を及ぼすため、間食の見直しや、脂肪摂取方法の改善だけでは血糖値に及ぼす影響は小さいと考えられる。しかし、脂肪を状上手に食事に取り入れることにより、血糖コントロールが良好に行われる可能性も高く、今後も検討を続けていく必要があると思われる。

●長崎の正月料理に関する研究

・目的

長崎は独特な文化を有し、この独特の文化は日本特有の行事にも影響を与え、長崎特有の文化や風習を形成した。この長崎の伝統は様々なものが受け継がれているが、食に関しても長崎特有のものが多い。しかし第二次世界大戦後、出版物やテレビ放送、インターネットの普及により、日本の食は均一化してきている。各地に伝わる伝統的食文化が途切れつつあり、長崎もこの例外ではない。今回は長崎の正月料理に注目し書籍や文献を用いて調査を行った。

・考察・まとめ

長崎の正月料理は多種多様な料理があり、昔の長崎の食文化や豊かさを知ることが出来る。今回は長崎の郷土料理について書籍や文献を用いて調査を行ったが、長崎の正月料理は資料によって微妙に差異があった。これは正月料理が各家庭に伝わる料理であり、時代や家庭ごとに独自の正月料理が存在するためだと思われる。また今回、正月料理を調査して、現在では失われたり、ほとんど見られなくなったりした料理や習慣も多くあった。現在の長崎の食文化は簡略化や外部化や、核家族化が進むことにより、これまで先達が伝承してきた食文化の断絶を生んでいるのではないかと思われた。

平成 29 年度 (2017 年度) 研究活動報告書

【学科名またはコース名】 幼児教育学科 【職名】 講師 【氏名】 中村 浩美

【研究の題目】

1. ソプラノ音域からメゾ・ソプラノへの移行をもとに、オペラを含むクラシック楽曲とミュージカルの発声法を基盤とした歌唱法の同一点と相違点、及び音楽表現、演技法について
2. 保育者養成校の音楽教育における教材研究と指導法について

【研究の概要】

1. ここ数年の研究であるソプラノからメゾ・ソプラノへの移行はまだ課題点が多く、頭では理解しつつも、あらゆる筋肉の使い方や力の抜き方、響きのポジション、また、息の流れが苦手な音域や母音によってスムーズに流れず遠くに声が飛ばず、声帯を締め付けたような声になる場合も多々あった。

今年度も前年度に引き続き、初心に戻ってオペラのアリアからの研究を、歌曲からの研究とし、以前舞台にも上げたことのある歌い慣れていた軽めのアリアにも改めて挑戦した。ソプラノで勉強していた歌曲を中声用に換えてみることで、曲によっては高声用のままで今の年齢も含めた上での声質を考えながらレッスンを何回か受けたことは非常に勉強になった。

息の流れが自然である理想の声でフォーレや日本歌曲の真髄に触れて演奏したいと言う気持ちが焦りに変わっていった。勿論その理想の無理のない息の流れが緩やかに見えて感じられる声で、自分の声質や個性にあったアリアにも挑戦したい。

以前と違って中間音域には安定が見られ、特に高音域に入る二点D・E・Fの響きは通る声になってきて自然になってもきたとの評価があった。ところが、高音域での発声に悩みを多く抱えていることは曲のレパートリーを広げられず、発声勉強も含めた曲を選曲するのが難しかった。歌いやすい中間音域から2点Gまではメゾ・ソプラノとしてのある意味の声の太さや響きに相当しているようだが、2点Aから上の音域になると、頭声だけを感じる声や、または声帯が付いてない状態でのかすれ声や、全く出ないことが今年度も頻繁にあり、研究課題としては大きくとらえている。重たい響きには、深く掘ったような声になる時があるため、下顎の力を取り上顎部への意識と筋肉の使い方、そして体をほぐしながら筋肉の使い方を学んでいきたい。しかしながら一番の課題となっているのは息の流れがコンスタントに回ることではないかと今年度は自らレッスン受けた事と、聴講レッスンを受けた事で新たにその重要性を実感した。

授業ではどうしてもミックスボイス、つまり、地声とファルセットの混じりでの歌声となり(ミュージカル奏法的にも精通する)、その歌声を継続することと、学生への指導する声の出し方で、クラシック発声であるメゾ・ソプラノの響きとは違う重い声、そして高音域が声帯に負担をかけているため出なくなることをクリアできるよう声を大切にしたい。

オペラでもその発声法の課題点、問題点が影響しており、アリアでは役になりきっていても、その役に見合った声の出し方に疑問を感じ、根本的な発声法の見直しをしながらメゾ・ソプラノの響きと音域の幅を広げていくことを今後も研究したい。それによってミュージカル発声法の同一点と相違点の考え方、演奏法にも新たな発見ができるように思う。

2. ピアノ初心者が今年度は特に多く、音楽基礎知識の理解も約8割がない現状でどのようなレッスンが学生の力を伸ばすのかかなり悩んだ。

個人レッスンは研究室で対一の演習のため、まずは緊張状態を緩和させる事、学生の性格を早く把握するように努めている。性格を早く知ることその学生のピアノ技術の進捗や音楽的な感受性をどのようにして引き出せるかとても重要である。これまでの経験によって今年度も性格を早く知ること、学生の初歩的な技術を少しずつ高められたが進捗が遅くなってしまった。

また、学生の性格を知ることだけではなく、学生と教員との信頼関係もとても大切である。ピアノも歌もメンタル面はかなり左右されるため、その学生に見合った声掛け、指導の仕方は異なる。

ただ練習をするのではなく、練習の仕方のノウハウを丁寧に時に厳しく、繰り返し繰り返し指導していくことで、今まで積み重ねて努力することが少ない学生には苦痛でもあるが、確実に上達していることを学生自身も感じるようになってきたと感じているようだ。

どんなに厳しくとも、愛情を持って心から応援する気持ちで指導することで、学生もなぜ厳しく指導されたのか、なぜ上達したのかを理解してくれた。今後もさらに学生に愛情ある指導をしていきたい。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 介護福祉士コース 【職名】 講師 【氏名】 田川 千秋

【研究の題目】 高齢者施設の職員のケアに対する悩み

【研究の概要】 認知症の人のケアについて施設・在宅ケア事例を収集し課題解決の方法を探る
長崎県内 4 事業者の職員 105 名をを対象としてアンケート調査を行なった。しかし現場の職員不足からの多忙により回答を得られたのは 63 件である。

| | | | | | |
|-------|--------------|----------|-------------|-----------|-----------|
| 性別 | 男 24 | 女 39 | | | |
| 年齢 | 10代 3人 | 40代 6人 | 平均勤務年数 | 8.98年 | |
| | 20代 18人 | 50代 0 | 最高勤務年数 | 20年 | |
| | 30代 33人 | 60代 3人 | 最低勤務年数 | 9ヶ月 | |
| 有する資格 | 介護福祉士 24人 | 社会福祉士 3人 | 社会福祉主事 2 | ヘルパー2級 14 | ガイドヘルパー 1 |
| | 介護基礎研修修了 13人 | | ケアマネージャー 4人 | | 看護師 2人 |

1. 施設でまたは在宅生活を支援するとき

主に食事・排泄・入浴・体位変換・移乗など ADL と認知症の方との関わりで周辺症状（行動・心理症状）などに困っていること、相談相手・相談場所の有無などについて。

相談相手・相談場所については 95% の人が有と回答する。

困っていない 1・2・3・4・5 困っている。5 段階で評価してもらった。

1) 主に ADL などの技術面への不安については

排泄「3」40% 「4」55% 入浴「3」55% 「4」30% 食事「2」40% 「3」30%

体位変換「2」40% 「3」40% 移乗・移動「1」20% 「2」20% 「3」30% 「5」20%

その他「衣服の着脱」・「着席と立位」「会話」「レクリエーション」に困っていると上がっていた。

2) 周辺症状など認知症症状への対応について

物盗られ「3」30% 「4」60% 介護拒否「2」30% 「3」30% 「4」30%

暴言・暴力「3」40% 「4」40% 外出・帰宅欲求「2」20% 「3」40% 「4」20%

徘徊「3」40% 「4」30% 過食・拒食「2」30% 「3」30% 「4」40%

幻覚・妄想「2」30% 「3」40% 「4」10% 虐待「2」20% 「3」20% 「4」30%

これまでではあまり困っていないと思われるが、経験年数 2 年程度の職員が困っていないと回答している項目が多く、6 年以上の職員は ADL では入浴、体位変換、周辺症状では物盗られ、介護拒否で悩んでいる職員が多くあった。

3) どのような研修を希望するか

麻痺のある方の入浴介助、シャワーチェアを使った入浴、実践に使える介護技術、移乗・移動の技術、体重が重い、体格が大きい方の体位の変換、レクリエーション、会話、徘徊、帰宅願望、介護拒否、幻覚・妄想、拒食のある方への接し方などが上がった。

4) 直接話すことができた職員の中には、職場内研修のあり方、どうしても時間外研修が多くなる、介助・介護の方法について「なぜ」と聞いても納得できない、回答がないなど不満も聞かれた。新人への指導に悩んでいる職員の姿もあり、そのことがストレスとなって、身体的症状が出現していることも聞かれた。

管理者からも施設内研修では研修に望む職員に「聴く」姿勢が足りない、子育て中の職員の研修参加のあり方に苦慮しているなどが聞かれ、双方が問題を抱えていると思われる。

施設内に精神疾患を持つ利用者への対応問題、現場で家族へ説明し納得してもらうなど、コミュニケーション能力、根拠に基づいた技術の向上などは必須であろうとおもわれる。

1) では問題なしと解答しているにもかかわらず、研修希望では困っていないはずの内容が上がり、スキルアップを希望しているとも思われる。まだまだ不十分なアンケート調査である。これからも継続し問題を明らかにし、先ず利用者にとって管理者側と職員双方にとってよりよき現場であるための問題解決の道を探す。

これは途中経過報告である。

以上

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 幼児教育学科 【職名】 講師 【氏名】 本村 弥寿子

【研究の題目】 保育者養成校における学びの定着を図る「保育・教職実践演習」の模索

【研究の概要】

(1) 研究の目的

「保育・教職実践演習」は、幼児教育学科 2 年の後期に開講される科目である。本学で受講した講義や演習、学外実習を学生が自ら振り返って保育に関する知識・技能をさらに修得し、就職に向けての準備を行うことを目的としている。本科目は、平成 28 年度まで、幼児教育学科教員がオムニバス形式で専門分野の振り返りを行ってきた。この方法は、学生全体に対して講義・演習を行うことが主となり、学生一人一人が自分の課題に向き合う時間が確保できなかった。

学生は、一人一人授業や学外実習での学びの深まりが異なる。自分の良さや課題に気付き、学生自身が向上心を持って保育の知識や技能をさらに身に付けようという意欲をもって授業に取り組むことをめざし、「保育・教職実践演習」の授業内容を見直すことにした。

(2) 研究の方法と内容

①研究の方法

全ての実習を終えた時点での授業であることから、学生自身が自分なりの保育観・子ども観を持ってきているものと考えられる。それらをより広い視野で見つめなおし、目指す保育者像を明確に持てるよう、2 種の方法を取り入れた。1 つは講話であり、もう 1 つはアクティブラーニングを取り入れた授業である。

②研究の内容

授業計画は表 1 のとおりである。

表 1

| | 授業内容 | | 授業内容 |
|-------|---------------------------|--------|--------------------------------------|
| 第 1 回 | 学外実習の振り返り | 第 9 回 | 実習指導教員とのグループディスカッション |
| 第 2 回 | 保育実践記録から学ぶ①倉橋惣三の理念 | 第 10 回 | 自己課題報告書に基づく実習の振り返りと実習経験をもとにした実習記録の考案 |
| 第 3 回 | 保育実践記録から学ぶ②具体的な子どもの姿から考える | 第 11 回 | 保育実践記録から学ぶ③実践記録の作成 |
| 第 4 回 | 自己課題の発見 | 第 12 回 | 保育実践記録から学ぶ④実習指導教員との事例の掘り下げ |
| 第 5 回 | 自己課題への取り組み方法の探求 | 第 13 回 | 園長講話：保育者としての心構え・期待 |
| 第 6 回 | 自分の保育観に気付く | 第 14 回 | 実践記録の発表（ポスターセッション） |
| 第 7 回 | 自己課題解決への取り組み（資料収集・学外調査） | 第 15 回 | 自分の保育者像を描く |
| 第 8 回 | 自己課題の進捗状況の報告 | | |

第 6 回及び第 13 回は、本学教員及び現職の幼稚園長によるものである。

アクティブラーニングを取り入れた活動は、まず第 4・5・7・8・9 回で自己課題の克服を目指した取り組みを行い、次に第 10・11・12・13 回において実習中の子どもとのかかわりで学んだことを保育エピソードとして書き起こし発表する機会を設けた。活動はできるだけスモールステップで進めることと、学生に任せたままにせず教員に進捗状況を報告する機会を設けることを配慮した。また、保育エピソードは、例を教員が示したり学生の経験談を文章化するために助言を細やかに行ったりした。

(3) 研究の成果と今後の課題

今年度の「保育・教職実践演習」の内容を問う授業後アンケートで、109 名の受講生のうち 99 名が「非常によかった」又は「よかった」にチェックを付けていた。理由としては「自分の課題が明らかになった」「就職に向けて何をすればいいか分かった」「就職直前に園長先生の話が聞けてためになった」等であった。これらから、今年度の授業内容の見直しが効果を奏したように思われる。ただ、学生によってはアクティブラーニングの理解が十分でないまま授業に取り組み、学びを実感できていないものがいたので、アクティブラーニングの進め方についてより丁寧に説明することが必要である。さらに、今年度の取り組みでは、授業担当者に負担がかかる傾向があったので、学科教員全員で学生の学びを一層丁寧に見ていくことが課題である。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 介護福祉士コース 【職名】 講師 【氏名】 荒木 正平

【研究の題目】

さまざまなケア場面におけるコミュニケーションに関する研究

【研究の概要】

(1) さまざまなケア場面と題目に設定したが、そのうち特に介護実践現場におけるコミュニケーションのあり方については、昨年5月の日本社会福祉学会九州部会において口頭発表の形で研究報告を行った。また今年度の研究についても、前年度までに得られた知見を生かしつつ新たなデータも加えるかたちで実施した。成果の一部については、本年度紀要において報告しており、以下その概要を示す。

表題は『認知症高齢者とのコミュニケーション場面における「ゆらぎ」ーパッシング・ケアの意義に関する学生アンケートからー』とした。前年度までの研究との継続性は保ちつつも、調査対象については、今回本学学生とした点においてこれまでと異なるものとなっている。

そのような調査対象者設定の理由として、まず「教育的側面」の要請にこたえる必要から、というものが第一の理由としてあげられる。近年積極的に取り組みが進められている「アクティブ・ラーニング」については、教員から学生への一方的ではない、主体的かつ能動的で参加的な学習法であるとされ、その導入による教育的効果の向上が期待されている。介護福祉士養成課程におけるさまざまな学びの場においては、このような主体的な関わりの姿勢が強く求められる。とりわけ「介護実習」は、狭義の介護技術すなわち直接介助面での学びのみならず、インフォーマルな生活場面での相談援助が求められることもあり、まさに「一方的ではない、主体的かつ能動的」な態度が常に要求される学びの場である。このことに鑑みたとき、本研究は、「介護実習」を中心とした介護福祉士養成課程におけるアクティブ・ラーニングの実践に関する評価・モニタリングを目的とした取り組みとして位置づけることが可能となると考えている。

介護福祉士養成課程の学生をアンケート調査の対象と設定した第二の理由は、「研究的側面」に関するものである。すなわち、介護におけるコミュニケーションに関する問題、とりわけ、その専門性をめぐる問題について考察を今後進めてゆくにあたり、実習生という立場の有するマージナルな特性を有する者の視点からの分析を行っておくことには、一定の意義があると考えられたためである。認知症高齢者介護場面における実習生とは、純粋な介護者でも、被介護者でもない、不安定な、どっちつかずの存在といえる。そのような、まさに境界的な存在である実習生のみが有する視点を浮上させ、そこからパッシング・ケアの意義についての検討をさらに進めることで、これまで筆者が行ってきた、認知症高齢者ケア場面におけるコミュニケーションに関する研究に、新たな示唆をもたらさうのではないかと期待した。

詳細は紀要論文を参照頂きたいが、検討の結果として示唆されたのは、ケアに当たる者（≒介護者）が、ケアを要する者（≒被介護者）とともに「ゆらぐこと」や「戸惑うこと」、「振り回されること」といった、一見すると「専門性」とは対極の「素人性」とでも呼ぶべき特性にこそ、ケアという行為に固有の存在意義が見出される可能性の存在である。

(2) 本年度のもう一つの研究成果として、幼児教育学科1年生を対象に実施した「社会的養護」の授業レポートを分析の素材として、「子育ての社会化」と家族のあり方をテーマにした論文の執筆を行った。

表題は『「子育ての社会化」をめぐる現状に関する一考察ー学生レポートの検討過程からー』とした。その目的として、対人支援をめぐるさまざまな分野においてすでに確認されている「ケアの社会化」をめぐる動きのうち、児童分野における動向に焦点を当て、まずはその現状と課題を概観的に確認すること。さらにそのうえで、保育・幼児教育の実践者となることを目指す短期大学生が、「子育ての社会化」についてどのような意識を有しているのかについて把握するための、より有意義なデータ収集のあり方を検討することとした。紙幅の制限もあり、またデータの分析にも十分な時間が確保できなかったため、設定した目的を十分に達成することができなかった。ここでの考察の成果を次年度の授業の組み立てにも活かしつつ、研究としてもまた継続的に取り組んでいきたいと考えている。

平成 29 年度 (2017 年度) 研究活動報告書

【学科名またはコース名】 幼児教育学科 【職名】 講師 【氏名】 福井謙一郎

【研究の題目】 保育者養成課程に在籍する学生の子ども観と養育状態に関する研究

【研究の概要】

本研究は、愛着や養育行動の世代間伝達を軸に「保護者－子ども」の関係と「保育者－園児」の関係に共通性があると考え、保育者が親から受けた養育態度認知が、自身の子ども観に影響を与えていると仮説設定した。検証を段階的に行うため、本研究では保育職志望の女子学生 210 名を対象に調査を行った。その結果、親から「無関心」に育てられたと認識する学生は、子どもに対する「慈愛」や「可能性」、そして子どもの意思や主体性を重んじる「尊重」といった肯定的子ども観が有意に低く、さらには「過干渉」的養育態度認知がそれらを調整することで、肯定的子ども観に対する「無関心」と「過干渉」的養育態度認知の有意な交互作用が明らかとなった。

(保育者養成教育学会、2018 掲載)

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 幼児教育学科 【職名】 講師 【氏名】 光武 きよみ

- 【研究の題目】
1. 保育実習指導の教授における研究
 2. 領域「健康」の指導法についての研究
 3. 病児対応型施設における保育士の専門性について
 4. 保育学生における乳幼児の発達段階への理解

【研究の概要】

1. 保育実習指導の教授における研究

「保育実習指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」のうち、施設実習に関連する「保育実習指導Ⅰ」に焦点を当て、授業の理解度を知り、不安や要望を把握するために、実習後、学生に対してアンケート調査を実施した。その結果、①「保育実習指導Ⅰ」の内容に関して、9割強が満足していた。②実習前には9割強が施設や「施設保育士」を理解したとして実習に臨んだが、実際は理解できていない学生が約2割いた。③上級生による体験談等の機会を設けることで、不安や緊張感が軽減する。④実習後、障害を持つ方への偏見がなくなった。⑤実習事後指導（個別指導）では、次回実習に向けてのアドバイスを希望している学生がいた。など現状の把握ができ課題も明らかになった。

2. 領域「健康」の指導法についての研究

本年度担当する卒業研究ゼミ生は8名であり、研究テーマを領域「健康」を意識して「園児への手洗い指導」と決定した。保健指導や健康教育を実施する際は、しっかりとした知識やエビデンスが必要となる。そのため、現時点での学生の知識を把握する必要があると考え、感染症や保健指導についてのアンケート調査を行った。さらに園児を指導する指導者として、自身の手洗いの再確認を行うために、学生の手洗い評価を実施した。その結果、感染症や保健指導についての知識が不足しており、清潔への意識も低く、思った以上に手洗いが実施できていないことが明らかになった。学生の反省点も明確になり、卒業研究を進めていく中で、感染症や保健指導の知識を身につけ、園児にわかりやすい保健指導をどのように展開していったらよいかを考える道筋が示唆された。

3. 病児対応型施設における保育士の専門性

現在、共働き世帯が増加して、保育所等の集団保育を利用している家庭が多い。そのような中で、子どもたちが感染症に罹患した場合、病児保育施設を利用する保護者も増えている。そこで、医療機関併設の病児対応型施設に勤務する保育士にアンケート調査を行い、さらに施設見学でのインタビューを通して保育士の専門性について考察した。結果として、①疾患の知識を持ち、利用児に対して瞬時的なアセスメント能力があること。②看護師同様、利用児の観察や記録、必要に応じて急変時の報告が出来ること。③感染症マニュアルに沿って、適切な対応ができること。④利用児のための安心・安全のための対応や遊び・環境の提供が出来ること。⑤保護者への気配りと説明能力が必要であるということが導かれた。

4. 保育学生における乳幼児の発達段階への理解

乳児保育は通年の科目ではあり、乳幼児の成長発達について学ぶ科目である。子どもたちをイメージしやすいように、今年度から「見る・触る・実施する」を昨年度よりも多く取り入れた授業を展開している。新生児から乳児期の成長発達を学ぶ前期の授業において、学生の理解度がどのような変化しているかについて、中間アンケート調査を実施した。その結果、教材の工夫で、学生は授業に集中することができ、学びが深まることが理解できた。さらにパワーポイントでの講義やDVDなどの視聴覚教材の使用、デモンストレーションを含む演示が、授業理解には効果的であることが明らかになり、今後の授業内容や教材研究の方向性が導かれた。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース【職名】特別専任講師【氏名】江頭万里子

【研究の題目】ビジネスマナー習得のための効果的な方法の検討

【研究の概要】

「マナー学」開講以来3年間、授業で学んだマナーの定着を目的に、学生が独自に定めたマナー項目を授業外で実践させる取り組みを行ってきた。今年度は、これまでの課題の改善を図ったことで、一定の効果が得られた。

改善点：①実践するマナー項目の選定方法を教員指定と学生の自己選定とする

②実践するマナー項目を増やす

③振り返りの回数を増やす（モチベーションの維持と主体的な取り組みの促進）

対象科目：「マナー学」「秘書実務2」

調査対象：栄養士コース1年生45人、介護福祉士コース1年生19人、ビジネス医療秘書コース2年生27人

マナー項目：教員が指定した5項目（a. 授業時に名前を呼ばれたら、教員を見て感じのよい返事をする、b. 自分から感じの良い挨拶をする、c. 美しいお辞儀をする、d. 話を聞くときは相手に視線を向ける、e. 時と場合に合った言葉遣いをする）と、学生が独自選定したマナー項目

実施方法：定められたマナー項目を日常生活で実践する。各実践期間を授業後の1週間とし、毎週次の授業時に対象期間の実践状況を自己評価することにより振り返りを行う。併せて、5項目了時点、10項目終了時点、最終授業時に実践開始時からの振り返りを行う。

評価方法：自己評価。4段階評価（よくできた4点、大体できた3点、余りできなかった2点、全くできなかった1点）

結果：教員が指定した5項目の全項目が平均点は3点を超過しており、学生はこの5項目は大体身に付いていると認識していることが分かった。

学生が選定した項目の結果検証のために、学生が実践した全項目を行動の視点及びマナーの要素の視点から分類した。

行動の視点からは、「社会人に求められる基本的なマナー」と「実務に関すること」の領域に大別した。更に、「社会人に求められる基本的なマナー」の領域を「挨拶」「返事」「話す」「聞く」「立ち居振る舞い」「物の取り扱い」「相手や周囲への配慮ある行動」「身だしなみ」の8つの領域に、「実務に関すること」については、「働き方の基本（時間管理・自主性）」「話し方（正確性）」の領域にそれぞれ分類した。「話し方」を除き、全ての項目が3点を超過していた。

マナーの要素の視点から「社会人に求められる基本的なマナー」の領域に分類された実践項目を、「自分から」「笑顔」「声」「視線」「美しさ（姿勢・立ち居振る舞い）」「丁寧」「相手や周囲への配慮」「敬語」「TPOに合った言葉遣い」「身だしなみ」の10の領域に分類した。結果は、全ての領域で3点を超過しており、マナーの要素から見ても学生はマナーが大体身に付いていると感じていることが分かった。特に、「相手や周囲への配慮」については、71.1%が実践し、平均点も3.50点と高得点だった。多くの学生がマナーの基礎である他者への配慮ができていると感じていることが分かる。

ビジネス・医療秘書コースの2年生15人については、夏休み中に参加した病院実習またはインターンシップ時に、授業期間に目標としたマナーの実践ができたかの自己評価をさせた。教員が指定した5項目全てが3.60点以上で学生は学びの成果を職場である程度発揮したと感じていることが分かった。

学生の振り返り（自由記述）からは、マナーを意識して実践することの大切さや自身の成長を実感している様子が窺えた。

考察：以上から、マナー項目を選定し実践することで、学生は日常において求められるマナーに基づいた行動ができたと感じていることが分かり、今回の取り組みが、マナーの定着に一定の効果があるものと推察できた。今回は調査結果の統計処理を行っていないが、今後は、この結果を基に指導方法や成果検証の方法を検討して行きたい。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 幼児教育学科 【職名】 講師 【氏名】 樋口 誠

【研究の題目】 腹話術研究に取り組んで

【研究の概要】

腹話術研究の取り組みは、昨年につき 5 年になります。今年度は、観客と一緒に楽しみながら演技発表ができたように思えます。

本年度も「実践腹話術」を研究テーマに掲げ、多くの施設・会場を訪問し、研究発表をさせていただく機会を得ました。毎回課題を持って臨んだ腹話術実演会でしたが、会場によって観客の反応は様々でした。例えば、発達障害の施設ではステージだけでなく、客席を回りながら発表するスタイルを取り入れ大変好評でした。また、手遊び・クイズなどを取り入れたことにより、全員が一体になり大変良い発表会になったように思えました。

各実演会場で施設の方々と反省会を持つ機会があり「腹話術発表を皆、真剣に見て楽しんでいましたよ。」とっていただきました。参加者の中には、重度の障害者がいて、ベッドのまま会場へ移動して担当者が付きっきりで参加していただいたことに大変頭が下がる思いでした。ご協力いただいた関係者には大変感謝いたします。

11 月の弥生祭では、本年度も「全日本あすなろ腹話術協会」会長の福小介氏を特別ゲストでお迎えし、腹話術研究学生と一緒に野外ステージに出演して頂きました。素晴らしい演技を披露していただき、その後 231 教室において、腹話術講義を開催いたしました。子供から大人まで 30 名の参加があり、全員腹話術を楽しみながら腹話術の魅力が十分に伝わる内容の講演会となりました。

今年度で研究活動も終了になりますが、多くの方々と出会うことができ大変楽しく腹話術研究に取り組めたように思いました。

平成 29 年度 (2017 年度) 研究活動報告書

【学科名またはコース名】 幼児教育学科 【職名】 助教 【氏名】 昆 正子

【研究の題目】 専門科目から保育へとつながりを持たせた授業展開について

領域「表現」における造形表現に関する一考察 ―オイルパステルによる心の開放体験から―

【研究の概要】

<研究の背景と目的>

学生の学力低下に加えて、自己表現力や自信、コミュニケーション能力等の低下が高等教育機関において問題視されている今日、保育者養成における表現の授業にも、その力量形成への貢献が期待されている。

造形表現は自発的で制約のない遊びのような経験のチャンスを数多く含んでおり、心の開放と安定につながる活動として注目される。また、ものを相手に試行錯誤を重ねていく過程で、達成感や具体的な成果を獲得することができるという特徴を持つ。

今回、学生が遊ぶ主体となり、体験的に造形表現の意味をとらえなおすことを目的として「オイルパステルを用いた心の開放体験プログラムを実施することとした。

<研究方法>

子どもと美術（本学幼児教育学科 1 年次通年必修科目）受講生 103 名を対象にし、オイルパステル画（活動時間 1.5 コマ）体験後の感想アンケートから学生が本活動を通じたことについて分析し、プログラムの成果と課題を考察する。分析方法については、回収した学生の感想アンケートから、活動を通し学生が得たものについて整理した。また書かれている文章を単語・文節に区切り、素材となる記述を内容の別に分類した。

<結果と考察>

回答者の記述を内容（ラベル）別に分類し、各内容を記した回答者の数を件数として示したところ、大項目では学生が活動を通じて得られた事柄を 4 つに分類することができ、「自身の感情との向き合い」92 件「素材や技法（もの）の理解」30 件、「保育者としての心のあり方」25 件、「他者との結びつき」15 件となった。全体的に「楽しかった」「きれい」「感動」「満足感」「リラックス」等を得られたという感想が目立ち、活動を通じた「自身の感情との出会い」が多くの学生たちにとって快いものであったことが明らかになった。そしてその「快さ」の多くが、個人の意のままにできる「活動の自由感から」（62 件）によるものであった。このうち 20 件が絵画活動への消極さや苦手意識の軽減につながったという内容であり、学生の苦手意識へのアプローチができたことは本活動の大きな成果であった。

今回の学生の心の開放体験が、子どもの心情や、造形表現が得手不得手・上手下手で論じられるものではないということの体験的理解、また、表現を楽しみながら造形の基礎技能や材料用具に関する知識を獲得する機会として、授業の一部に活用できることを確かめられた。

今後の課題として以下を挙げる。

- 今回記述数の少なかった項目についても学生の理解を定着させる。例えば「多様性の尊重」や「情報の共有」については、表現が保育者や友達のコミュニケーションの中で育つことや自己・他者理解、表現の柔軟な読み取りにもつながる重要な学びであり、幼稚園教育要領の領域「表現」の内容の取扱いに示された「他の幼児の表現に触れられるよう配慮」の理解にも通じる部分であるため、今後の振り返りの中で学生全体に理解を促していきたい。
- 心を開き表現する体験は、いわば造形表現の学習の入口であり、その後続く基礎技能や子どもの個人差、発達理解、幼児理解に基づいた造形指導の学習等との関連も踏まえて、授業全体から学生の造形表現に対する理解の定着について、考察を加える必要がある。
- 学生からは美的感覚を満足させる以外に、作品を手掛かりに自分の心理を探ろうとする心の動きも見られた。絵からすべてが分かるという考え方は適切ではないが、子どもの理解を助ける一つ的手段として、色彩の発達の理解と象徴的な意味の理解の両面についても押さえておくことは必要であり、今後の授業で触れる部分でもある。内容の程度と時期について今後検討を重ねたい。
- 表現過程や試行錯誤の痕跡にも意味があり、それらを価値づけられることが保育者の大切な資質の一つであることを、すべての学生が感じられるようにしていくために、今後より丁寧なフィードバックを心掛けていきたい。

優劣を問わず、多様性を肯定することによって自信を育み、子どもたちの可能性をひらくことのできる保育者を目指すためにも、無理なく自分のありのままを表現することや、ものとの対話から始まる自身の心の変化に向き合うことを今後とも学生に促していきたい。

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 幼児教育学科 【職名】 助教 【氏名】 山本 尚史

【研究の題目】（本年度紀要に掲載分）

- ①領域「言葉」と小学校生活科の接続についての一考察 ～幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の比較～
- ②小学校生活科におけるスタートカリキュラムについての一考察 ～言葉による伝え活動を意識した自己紹介を事例に～

【研究の概要】

①本稿は幼児教育と小学校教育の接続について、領域「言葉」と小学校生活科から考えたものである。その際、領域「言葉」と小学校「生活科」をどのようにつなぐかという観点から幼稚園教育要領と小学校楽手指導要領を比較し検討した。新要領の文言とそれが指し示す内容についての基本的性格を整理し、根本的な理解を深めることに努めた。

②本稿は、小学校入学直後の1年生を対象にし、生活科の授業を通じて自己紹介を行うことを想定した取り組みを提案するものである。自分をどのように表現するか、そして友だちへの理解を深め、学校を楽しい生活の場として認識できるかは、幼児期の教育から低学年の教育へのスムーズな移行が重要な論点として考えられる。そのため小学校1年生と幼稚園年長児との交流場面を設定した。

以上

平成 29 年度（2017 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 幼児教育学科 【職名】 助教 【氏名】 蛭原 正貴

【研究の題目】 身体表現活動が保育者効力感に与える影響

【研究の概要】

待機児童問題等が深刻化している昨今、保育サービスの多様化に伴い、保育者に求められる役割は年々増加している。そのため、保育者の資質や専門性の向上が一層求められており、保育者養成機関においては、保育能力の高い保育者の育成が望まれている。保育者の資質や専門性の向上に関しては、これまでも多くの研究や議論がなされてきたが、近年、保育能力に係る要因として、保育者効力感研究が注目を集めている。「保育者効力感 (pre-school-teacher-efficacy)」とは、三木・櫻井によって開発された概念であり、“保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念”と定義されている。

また、実習はもちろん、現場でも保育の質と密接に関わる保育スキルであるが、中でも「身体表現」に関わる保育スキルは非常に重要とされている。身体表現活動は、子どもの身体支配能力、創造性、社会性の向上などに影響を与えることから、子どもの発育、発達に有効な保育活動として多くの保育現場で取り入れられている。しかしながら、その指導や援助に関しては、言葉がけ、表現の解釈力、子どもへの志向性など、細やかで確かな視点、能力が要求される。そしてなにより、保育者自身が感情を豊かに表現できることが必須となる。また、保育現場では思いがけない出来事に対して即興的に対応することが求められるが、新山・高橋は、この即興性こそが保育者の資質と身体表現に共通して必要とされる能力であると述べている。これらのことは、身体表現に関する保育スキルが子どもの発育、発達にとって重要なだけでなく、保育者の資質や能力にも影響を与えることを示唆している。

そこで本研究では、身体表現の保育スキルに必須となる「保育者自身の表現力」に焦点をあて、身体表現活動における内的感情や気分の変化が保育者効力感に与える影響について検討することとした。

検討の結果、以下のことが示された。

- 1) 身体表現活動による感情の昇華や充実は、保育者効力感の向上に影響を与えることが示唆された。
- 2) 授業前後等の短期的な影響については、感情や動きの昇華、感情の充足が図られることによって、保育者効力感が高まる可能性が示唆された。
- 3) 中・長期的な影響については、実習や保育者に対する期待感が保育者効力感に与える影響が大きく、身体表現の授業等で保育者効力感が向上したとしても、それは一時的な影響であることが考えられた。

今回の研究では、身体表現力の向上が保育者としての資質の向上につながる可能性が示されたが、授業内容、授業時期等が調査に影響していることが考えられた。今後、身体表現活動の有用性を示すためにも、授業内容及び調査の実施時期について検討を重ねる必要がある。



KAKUMEI
GAKUEN

SINCE 1896